

男が少ない世界で人生を謳歌するために必要なのは？　そう紳士  
道！！

庫磨鳥

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

※主人公はバカです。

## 目次

はじまり	1
入学式から寿司に至るまで	5
寿司食べてから護衛ができるまで	11
護衛ができてから学校に登校するまで	18
登校してから友達ができるまで	24
友達ができて下校するまで	31
二週間後から個人授業を受けるまで	36
個人授業を受けてから個人授業になるまで	42
春が終わり思いつくまで	47
夏休みから暑さに負けかけるまで	52
緒口奈々子の気苦労 その1	57
遊園地当日から出発するまで	64
出発してから遊園地に到着するまで	69
遊園地に到着してから中へと入るまで	78
遊園地で遊ぼう 1	84
遊園地で遊ぼう 2	92
遊園地で遊ぼう 3	100
遊園地で遊ぼう 4	107
遊園地でPVを撮影しよう	114

## はじまり

気がつけば自分は四歳の子供となっていた。それから三ヶ月後、二十代にしか見えない母と年の離れた姉に対して全力で子供の可愛さというものを見せつけて悶絶させる遊びをしていた時に、これは転生と呼ばれるものであることに気付いた。

さらに言えば前世の地球とは異なる、いわゆる異世界みたいで、なんと男性の数が女性に比べてかなり少ないらしい。その比率は男性が1だとすると女性が20ほど。私はそんな世界にて前世と同じく男性として生まれた。

道理でテレビ番組に出演するタレントの殆どが女性で、いまいちパツとしない男が瞬きほどの時間でも出ればアイドル並の黄色い声援が沸くはずだと納得した五歳の春である。母親も姉も、子供の遊びに付き合っただけに喜んでくれていたという勘違いが解消されたのも同じ時期であり、どうにも世間一般的な息子という存在は家族には冷たくするものが多いらしく、それに比べて自分は愛想と優しさを振りまくものだから、あのド派手な反応は感極まった果てのガチだった。

時折呟いていた神様が贈り賜った天使と言うのは実の息子である自分のことだったらしく、恍惚とした表情で言うものだからてつきり変な宗教にでも入っているかと思っていたのだが違ったのか。

ともあれ、自分はガチの反応であるとは想像すらせず、時には鼻血を噴射させて、時には泡吹いて倒れさせて、その反応を迫真の芝居だと楽しんでいた。知らぬことはいえ母と姉には本当に申し訳ないことをしたと反省するばかりである。

……止めたら止めたで酷く寂しそうな顔をしないで欲しいものだ。これで体調を気遣っているのと正直に言えば、天使と叫びながら鼻血垂らして倒れそうだから始末に置けない。因果応報とはこのことか、仕方ない大事な家族を悲しませるのも嫌なので、せめて料理を振る舞おう。とにかく卵なら身体にいいだろうと、鉄分摂取も兼ねて肉多めのオムライスを作ってみた。五歳が作るものにしては中々の出来であ

る。

「む、息子の手料理……がはあ!？」

せめて食べ終えてから倒れて欲しい。この世界の男性は料理を作らないものなのか、単に母が異常なほどの親馬鹿なのか判断に苦しむ。あと姉は永久保存用に冷凍庫を買おうとするな。バイトを増やそうとするな。

なにか自分が家族のためにと行動を起こすと狂喜乱舞を通り越して阿鼻叫喚となる家族を見て、この世界の男というものは神か悪魔の類いではないかと疑い始める六歳。ふと自分がひとり外に出たことがないことに気付く。

年ごとの健康診断、買い物や外食などはしているのだがどれも家族との外出ばかりであり、思えば転生してから一度も子供らしく外で同年代の友達と遊ぶというものをしたことが無かった。

とは言うものの、この頃、日本の文字体系とほぼ一緒なため文字が読めた自分は姉の私物である漫画にどっぷり嵌ってしまい。ちゃんと考え出したのは三ヶ月後ぐらい後である。

姉のセンスが良いのか所持している漫画がとにかく面白かったのも原因だろう。この世界の漫画は男女七つにして席を同じゅうしないという不文律でもあるのか、地球以上に男性が出る漫画は男性ばかり、女性も同じく女性ばかりであるものの地球人思考の自分でも問題なく楽しめる名作揃いだった。

そんな姉も今や大学生。通っている大学は決して近くはないのだが、家族との触れ合い（主に自分）を絶やしたくないらしく、態々片道二時間掛けて通っているのだから凄いものだ。そのことを素直に褒めたら高熱を出してしまい、次の日を休んでしまった。普通に風邪だったと信じていたい。

閑話休題。漫画もある程度読み終わったところ、子供らしく外に遊びに行こうと思いい立ち、母に外に遊びに行くかと伝える。

「て、天にお還りあそばせられるのですか？」

おかしい。この世界では遊びに行くは死を意味するのか？ 普通に外に遊びに行くだけだともう一度言えば理由を問われたので、適当

に公園で一人カバディをしにいくと伝えたと、母は怒濤の勢いで外の世界、正確には女性というものが、どれだけ危険な存在かを説明しはじめる。

ふむ、ニユースで女性のセクハラ行動が問題視されていると話題になっていたが、どうせ胡麻を大豆だと言わんばかりに大袈裟に語っているだけかと思っただが、この世界の女性は地球に比べて遙かに生存戦略意識が高いらしい。故にそういった女性の被害にあつてトラウマになる男性が多く、誰とも添い遂げずに定期的に精子だけを国家や企業に売って生きるようになるものも多く、中には息子が立たなくなつてしまったのも居るらしい。

さらに話を聞けば小学校に通う年齢になるまで男子は家の中で育てるのが普通らしかった。もしも小学生未満の男子が一人外に居た場合、最悪その親は育児放棄と見なして親権を剥奪されてしまうそう。本気でどうかしている。母は嫌ってくれても良いから母親で居させてと大号泣。

母にいらぬ心配を掛けさせて泣かせてしまったことを悔やみ慰める……奇声を上げて鼻血出して気絶したのを介護したあと、この世界になんとも言えない窮屈さを感じてしまい、ため息を吐いた。男なら無条件でチャホヤされることに舌を出して喜びたいところだが、どうにもそう簡単には行かなさそう。

オスライオンになる気は毛頭無いが、重婚ありきの異世界なのだ。ここはひとつハーレムを目指してもいいかと秘めていた決意が少し淀む。まあ、それ以前に、とにかく素敵な人と出会いをしたい。女の子と青春を一緒に過ごしたいものである。一人での外出もそのための最初の足踏みのつもりもあつたのだが、こうなつては仕方が無い。自分はまだまだ家とテレビと漫画でしか、この世界のことを知らない若輩者。とりあえずは母の言うとおり学校に通うまでは家の中で遊び倒して小学校に通い、この世界をきちんと見聞してから将来のことを考えればいい。

であれば、小学校でやることはとにかく女の子と仲良くなることだと計画を改める。小学生の恋路というものがどこまで進んでいるか

分らないが、卒業までにはハグ出来るまでの関係性を築き上げたいものだ。

もはや殆ど覚えていない前世では女っ気がない人生を送っていた。多少怖い面もあるが何事も挑戦が大事、二度目の小学校生活が本当に楽しみである。

「——ここが志亮が六年間通う。紅月〴〵男子〴〵小学校だよ!! ってどうしたの志亮!? お腹痛いの!? 救急車呼ぶ!」

——神詩 志亮は激怒した。必ず、この世界で自由に生きることを決意した。もうこの世界の常識とか知ったことではない。

可愛い女の子とイチャイチャすることに弊害が、危険が、理不尽があるというのならば、その全てを打ち払うほど、そして世界の常識に抗えるほど強く生きよう! であれば自分のやるべきことは決まった!

「紳士の道を究めよう!!」

「え? 〴〵しんし〴〵ってなに?」

——どうやら、この世界に『紳士』という言葉は無いらしい。

## 入学式から寿司に至るまで

紳士とは社会的に高い地位を持つ男性、あるいは幾多の難事件を解決する頭脳や一輪の薔薇で状況を覆す射撃能力を持ち、時には手品で華麗にお宝を盗みながら格闘術や特殊な呼吸法を極めて吸血鬼と戦いながらも、礼儀やマナー、そして女性の扱いに長けている男性のことを指す。

この男が少ない世界で自由に生きるには、そんな紳士となる以外に道はないと、女性校長の話は一切聞いていないであろう態度の悪い同年代の男子共に囲まれ、その後ろに己の母親のを含めて随分とシャツター音が喧しい入学式の中で決意を新たに表明する。

今日、自分が入学したのは、この国、『紅月』の名前を付けることを許された『紅月男子小学校』である。名前の通り男子小学生のみが入学を許されている、酷くつまらない学校である。とは言うものの入学式を行ったバカにでかいと思つた体育館も、式が終わつた後に入った校舎内のヤケに金が掛かつている学校の整備の数々が国内の男子小学校の中では一番下と聞いて度肝抜かれた。

——いや母よ。驚いたのは豪華さであつて、貧しいからつて意味ではないぞ？

どうにも後で調べれば、男子小学校は公立で無ければ行けないという法律があり、そのため費用は全て国が負担してくれるらしい。元々、国は男子が通う学校を作る際にはできるかぎり平等になるようにしたらしいのだが、金持ちの親共が自分の息子が通う小学校に援助の雨あられを振るつたことを起因に学校に格差というものが生まれてしまったようで、自分の息子により良い学校に通つて貰いたい親たちによるネットワークを切つ掛けに非公式ながら学校序列というのが出来上がつてしまったらしい。

母親は勝手ながら自分をなるべく上のランクの小学校に通わせたかつたようだが、上へ行けば行くほど倍率が高くなるのは当たり前であり、在籍可能人数が溢れてしまった場合の選考方法がなんと試験とかではなく、親の年収や貢献度とのことだ。男性を故意ではないとは



いえ値踏みすることは失礼と当たるため、その母親を選考基準にしているとのこと、であれば息子たちにとつても自分ではなく親の所為に出来るとあつて、学校側に来るクレームを最小限にできるとか。

随分と世知辛い事情である。国の名前を冠している小学校が最下位なだけあつて特に世知辛く思える。

「ううっ。情けないお母さんでごめんねっ！」

息子を産んだことで国からの援助して貰えるようになったとはいえ、一般OL並の収入では一個ランク上の学校にすら書類選考の時点で落とされてしまったらしく、そう言つて母は静かに涙を流していた。言葉の通り、息子に不憫な思いをさせるのは稼ぎが悪く情けない自分の所為だと思ひ込んでいたようだった。

「——ふざけるな！」

そんな母に、自分は大声で怒鳴つた。驚愕のあまり目ん玉を丸くしている母親。ちなみに現在、入学式を終えた同級生と、その保護者と先生の50人ほどで、一年間世話になるクラスへ移動していた所である。だが理性が完全にとんだ自分は、そんなことお構いなしに言葉を続ける。

「母よ。貴女は大変素晴らしい母だ。朝から夕方、時には深夜まで懸命に働いているのに、文句ひとつも言わず、飯や風呂を準備してくれて、どうしても無理な時は精一杯自分たちに謝ってくれる。さらには懐に対する不安を一切表に出さず姉を大学まで通わせた偉業を家族である自分はとても尊敬している。だから自分の母親であることを誇りに思え！ 決して貴女は情けない母ではない!!」

二度目の人生で初めて声を荒げて本音を伝えた。姉が自分が産まれたことで金銭的余裕が生まれるまでは、バイト代を全部、家に入れていたと二人の話を聞いた。そんな優しくして自分とは比べものにならないほど頭のいい姉という存在が、母がどれだけ立派な母親をしていたかの証明になってくれていた。

そんな思いの丈を叫んだ結果、母はさらに泣いた。解せぬ。私を抱きしめて赤ん坊のようにわんわんと大泣き始める。百人以上いる人の前で、自分はすべてを諦めて仕方ないなと背中をさすつてやった。

——おい、なぜ他の親も自分を見て天使と呼ぶんだ？ 将来は最高の紳士になる予定だから勘弁してほしいのだが？

それから数分後、泣き止んだ母親と一緒に世話になる教室へと向かい、他の生徒保護者に遅れて中へと入る。教室内を見て驚いた。まず地球の教室と比べて、少なくとも二倍以上は広い。今年度入学した生徒は自分を含めて20人であるため隣同士の間隔がかなり開いている。教室机というものは存在せず、わざわざ小学生サイズに合わせた片袖机がひとり一つ与えられており、その上にはPCが置かれていた。

これがこの国の教育スタイル……ではないのだろう。漫画やテレビを見る限り、恐らくは女子の学校であれば自分が想像した教室風景が一致するはずだ。つまりこの教室は男子のみに与えられる特別なのだ。

保護者スペースである後ろ端に向かう母を見送ったあと、余っていた一番前の席に座る……なんだこの椅子。ふわふわ過ぎて永遠に座ってられるぞ!?

入学式から自分たちを引率した老齢の先生と入れ替わるようにウサギを連想させる白長い髪の若く、合法ロリとまでは行かないものの小柄で可愛い先生が教室に入ってきて教壇に立った。

「は、初めまして、今日から一年クラスを担任をさせて頂く、白雪しらゆき花音かのんです。教師になったばかりで色々と分からないことがたくさんあると思いますが、その男子の皆様には充実した学校生活を送れるように頑張らせて頂きます……」

間近で可愛い先生を見られるとあつて一番前の席が残っていた幸運を噛みしめていたら、やたら腰が低い自己紹介が始まった。

生徒たちをまるで権力者と扱う姿勢に、自分がい誰も違和感の“い”すら持たず、むしろ若い女教師をあてがうなんて、この学校は何を考えているんだとほぼ反対側であるはずの自分の耳にまで聞こえる声量で不満を口にする奥方様がまあ多いこと。蛙の子は蛙だと言わんばかりに、その親の子であろう数人を除いたクラスメイトたちも、己の処遇に不満を持ってふんぞり返っている始末である。

これは酷い。なんとも愚鈍な連中による無様な光景だろうか、息子を大事に思う親心と若気の至りによる帳消しを図つても全然足りないほどである。事実、白雪先生は萎縮してしまい顔を下げってしまった。垂れた前髪の間隙からみえる儂い表情は確かに可愛いが、救いがなさすぎる。

であれば、紳士を目指す男子として、ここは精神的にも、そして物理的にも立ち上がなければなるまい。

「ふえっ!? あ、あなたは先ほどの天使様!」

うむ、驚く仕草も愛嬌があつて大変癒やされる。あと天使と言うな。というか見ていたのか……。わざとらしく咳払いをして、姿勢を真っ直ぐに右手の平を左胸に置いた。いかにもな礼儀が正しい紳士のポーズが完成したところで口を開いた。

「——神詩志亮と言う。趣味は今のところは読書。将来の夢は紳士を極めることだ。よろしく頼む」

「えっと、〱シンシ〱……ですか? 先生はその〱シンシ〱というのは分かりませんが、なにか夢のために協力できることがあれば先生を遠慮無く頼ってくださいね」

むっ、やはりこの世界では紳士という言葉そのものが無いのか、もしかしたら母が知らないだけかと思つたが、これは確定と思つても相違ないだろう。しかし白雪先生は教師の鑑らしい。正直に知らないことを口にしながらも否定はせず、生徒の夢のためならば協力は惜しまないと断言してくれた。であれば紳士を目指すものとしてリップサービスのひとつでも送ろう。それで少しでも気持ち晴れば幸いである。

「ふむ、白雪花音先生。名前の通り純白の雪花のように素敵の方のようだ」

言つてから気付いたが『音』が抜けてしまつていたな。反省である。さて、失敗してしまつた以上笑われても仕方ないが感想は如何なものか? あ、そういうえば笑顔を浮かべるのを忘れてしまつた。後出しでも大丈夫だろうか? 瞳を合わさる直前ニコつと笑みを浮かべてみる。

「……きゅ〜」

美白顔を真っ赤にして倒れた。ふむ……緊張の糸が切れたということにしておこう、さて、母よ呆けてないで保健室に運ぶのを手伝ってくれ。小柄な人とはいえ流石に子供の身では難しい。

さて、入学式とあつて授業はなく午前中で解散となり、母と共に帰路につく。せめて白雪先生が起きるまで待とうとしたのだが、起きて目の前に自分が居たとあつてはトドメになるからと言う母の助言に従い止めておいた。どうせ明日になれば会えるのだ。その時に改めて謝罪のひと言を添えた方がいいだろう。

「志亮、先生にしたみたいなことあんまり女の人にしちゃだめだよ？先生が理性強い人で良かったけど、独身の女なんて野獣よ。ちよつとでも油断して近づけば志亮のこと食べようとしちゃうんだからね？」

運転しながら注意を促す母の言葉に、そんな大袈裟とは思わない。なにせニユースで聞く限り、この世界の女性は袖が振り合ったほどの理由で性的犯行に及んでいるのだ。それに実物が目で見える範囲に居るのだ疑う余地もない。

車の外を見やる。隣に車内で女が二人自分のことをガン見している。その顔は欲情に染まりきっていた。反対の歩道側も同じような顔をした女性で溢れかえっている。ちなみに登校時もそんな感じであり、確か男性の盗撮は重罰が課せられるらしいのでスマホのカメラを向けられていないだけましといった具合である。

外の世界は確かに危険で母が心配するはずだと納得する。ふと、興味本位で歩道側の窓を少しだけ開ける。

「やだー！ 天使みたいに可愛いシヨタがいる!! ペロペロしたい!!」

「え!?! どいどい!?! 美少年どこ!?! お姉さんの瞳の中に閉じ込めさせて!!」

「ああああああ、脳フォトが埋まり尽くすううううう!!」

静かに窓を閉じる。………紳士とは“人の女性”に優しくするものである。うむ自分のことながら器量が狭い気もするが、この世界ではこれぐらいの考えの方がいい塩梅だろう。

しかし、パツと見た感じバイオ的な災害が起きたと言われても信じてしまうほどである。であればせめてゾンビに対抗出来るほどの自衛手段をなにか考えておいたほうが良いだろう。頭の中は「アレ」とはいえ女性の類いであることは変わりない。なにか身体を傷つけないながらも無力化できる手段があればいいが。

「あ、夕食なんだけど、家にいるお姉ちゃんを拾ったら、そのままお祝いも兼ねて外食いくよー」

……寿司という単語は日本生まれ日本没の『紅月』生まれとなった自分に大層効き目があるらしく、自衛の手段について捻っていた頭が寿司で埋め尽くされてしまった。ああ、もしも神様というものがこの世界にいるのならば、寿司があることを感謝しよう。とてもとても楽しみである。

——母よ。息子は寿司が回転しているのを見たいので店を変えてはくれないだろうか？ 姉も給料袋を出すな……自分は玉子とカツパ巻きが大好物だ！

## 寿司食べてから護衛ができるまで

寿司屋では結局母と姉の遠慮するな攻撃によって理性の壁は半壊。折衷案として海鮮巻きを丸ごと一本ご馳走になった。イカやマグロだけではなく、高級なウニやいくらも惜しみなく巻かれた寿司は大変美味であり、これなら単体で頼むよりも安くすむという自分の予想は正しく、子供の胃を満足させるには充分だった。

それでも一本3000紅月圓したのだからやはり寿司というものは贅沢品である。母には改めて感謝しなければならないな……なぜか祝えなかったからと、後日あらためて姉と一緒に出かける約束をすることになったが、まあ、そのときは適当なハンバーガー屋にでも行けばいいだろう。普通に食べたいし。

この世界の暦は地球と全く一緒であり、入学式があったのは金曜日に当たる日となる。つまり、いざ小学校生活の始まりかと思えば、二連休が挟まれており、少し出鼻を挫かれた気がするが国が定めた休みなら仕方が無い。むしろ自衛手段を考える時間が出来たとポジティブに考えよう。

さて、であればまずは母に相談しようか、それで良い案が浮かばなかったら、いい機会だ。姉に頼んでパソコンを使わせてもらおう。授業でも使うようだから何時までも苦手意識を持つていては不味いだろうしな。

「母よ。少し相談があるのだが。今後の学校生活においてやはり不安が多くてな。身の安全のために自衛の手段を得ようと思うのだが、なにか心当たりはないだろうか？」

「あれ？ 言ってなかったっけ？ 今日来る予定なんだけど……？」  
なんと母は事前に自衛手段を用意してくれていたらしい。伝えるのを忘れていたと謝罪されるも、むしろ感謝しかないと礼を返す。

ただ不安があれば、いったい何を買ったのだろうか？ 殺傷可能な武器であった場合は申し訳ないが返品願ひ。改めて自分で考えると言おう。警棒ぐらいであればいいが。

「——お待たせしまい申し訳ありません！ 『アカスズメ男子護衛会

社』所属の『緒口 奈々子』です！ これから一年間、契約に基づき神詩家の大事なご子息様を全身全霊、命を投げ打つてでも守ります。どうかよろしく願います！」

——この世界は容易く自分の想像を超えてくる。インターホンが押されたことで、てつきり荷物が届いたと、母と共に玄関を開ければ、そこには黒生地に赤いラインが入った分厚いパーカーを着る首ほどに整えられた黒髪の女性が立っており、自分と一瞬目が合ったかと思えば緊張しているのが分かるほどの震え声で挨拶してきた。

「えつと、随分と若いけど……」

「はい！ 確かに専門学校を卒業したばかりですが、在籍中には護衛部門ではトップランカー賞を二年連続獲得しています！ まだまだ未熟なのは確かですが護衛という面に関してはお任せください！」  
「とうか一人なの？ 男衛って二人一組が基本って聞いたけど……」

「はい、それは私が『単独護衛』の特別資格にて合格しているからです。こちらが許可賞とIDナンバーとなっております。気になるようであれば『男子護衛組合』にてご連絡していただき確認のほうをよろしく願います！」

——護衛……護衛？ と母を二度見するがよほど真剣なのか息子の視線に気付かず話を進める。まるで上官に應對する兵士みたいな話し方をする緒口さん。背筋をピンと伸ばし手を後ろに回して組んでいる様子から本当に軍隊の出身かも知れない。いや、どうにも会話から察するに彼女は、男子専門の護衛業者なのだろう。

興味のないことはとことん忘れっぽい脳みそをフル稼働して思い出したのはテレビのワイドショー。男子を護衛する専門の女性たちが居ると確かに言っていた。通称は『男衛』と、かなりそのまんまで、二年間の専門学校にて地獄のような授業とノルマをすべてこなし、そして国家試験に合格したもののみが成れる、この世界の女性誰もが憧れる職業。

この世界の女性の大半は男子を何度か見たぐらいで人生を終えることが多く。接点を持つというだけでも中々に難易度が高い。特に

精子を保存する技術が発展してきた現代では、男女の接触頻度は社会的に問題になるほど年々少なくなっているらしい。そんな中で『男衛』というのは合法的に、常に男子の傍に居られる数少ない職業、つまり男子と深い関係になれるチャンスが多いらしい。そのため専門学校の特率はどんな大学よりも高く、無事に卒業できたとしても男衛に就職できるのは、さらに一握りだと言う。

それを考えれば、まだ十代後半になったばかりにしか見えない緒口さんは男子を個人で護衛する特別資格を獲得しているという太鼓判を押されていることもあって、経験量は不明だがエリート中のエリートと考えても間違っていないだろう。

さて母よ、まさかこの護衛の方が自衛手段と言うのではあるまいな？

「え？ そうだよ」

当然と言わんばかりに答える母に思わず頭を抱える。確かに母は仕事、姉も大学で忙しく毎日送り迎えをするのは難しく、あの男に飢えたゾンビの群れを見る限り一人で登下校するのは危険極まりないだろう。なので護衛を傍に置くというのは、そう過保護ではない発想というのは納得できる。

それを踏まえても自衛手段が道具や技術ではなく、人というのは中々に衝撃的である。

「神詩志亮様！ 至らないことが多くある身ですがまずはお試しでもいいので私に護衛を努めさせてください！ お願ひします!!」

「どうする？ 彼女が嫌だったらチェンジを頼むことも出来るよ？」

どうやら悩んでいる素振りを悪い方向へと勘違いされたらしく、緒口さんは懇願するように頭を下げて、自分を選んでくださいと手を出してきた。それに母がどうするかを問うてくる。

はつきり言って可愛い女の子が一年も傍に居てくれるというのなら、むしろ自分が頭を擦りつけてでもお願いしたいのだが、外見だけで選ぶというのは紳士が欠けているのではと理性を引き留めて、幾つか質問をすることにした。

「質問したいのだが、自分以外に護衛を受けたことは？」



「はい！ 先輩の休暇交代要員として何度か、日数にすると13日間となります」

「なるほど。では、これからよろしく願います」

「はい！ ……はい!? ……はい、はい！ よろしく願います!!」

咄嗟となると聞きたいことがこれといって思いつかず、ひとつ聞いたからもう充分だろうと答えを出した。緒口さんは他にも質問されることを予想していたのか自分の即決に驚きの声を上げたあと、次第に選ばれたことにたいする嬉しさから来るのか、隠しきれないほどの柔らかな表情になった。ギリギリの所で表情筋を固めて笑うのを我慢しているのはプロゆえか、いずれちゃんと笑っている顔を見たいものだ。

「改めて自己紹介を。神詩志亮<sup>かみうこころ</sup>という紳士の道を究めんとする今はしない男子だ。とりあえず一年間よろしく頼む」

「は、はい。緒口奈々子です……えっと」

恐らく紳士という単語に疑問を抱きながらも、名前を返してくれた緒口さんだが自分の差し出した手に戸惑い口が止まる。先に手を差し出してきたのは貴女の方だろうにと自分は仕方ないという面を醸し出して、緒口さんの下げていた手を掴んだ。

「よろしいか?」

「は、はい!」

「手を触れる許可に感謝を」

驚いただけだとは分かっているが、いけしやあしやあと許可を貰ったという体で手袋を外す。その手には道具痕がくつきりと残っており、握れば訓練しているためかその手は母と姉に比べて固かった。緒口さんの手は前世から共にこの世界へとやってきた性癖に刺さるもので、ほぼ無意識的に口が動いてしまった。

「自分を守ってくれる決意が表れた美しい手の平だ。貴女のような人に守られる人生はきつと幸福なものとなるだろう」

地球ではキザったらしくて気持ち悪いと評判最悪であったが、白雪先生の反応からしてこっちはそれなりに好感触だとは思う。少し

実験的な意味でも思った事を紳士風に変えて伝えてみたのだが、さて反応やいかに。

緒口さんは頬を真っ赤にして固まっていた。今更この話し方を矯正できるほど器用では無いので、少なくとも反応がドン引きではないことに安堵する。

「う……あ……は、はい！　ありがとうございます!!　ではまた平日の朝七時に迎え来ますのでよろしくお願いします、はい!!」

そういつて緒口さんは逃げるように出て行った……母よ、そんなまたやつたなコイツという目で見ないでくれ。気絶してないので、まだ許容範囲だと思っただが？

ともあれ。これから学校への行き帰り緒口さんと一緒となるみたいだ。できればお近づきになりたいものだ。護衛の邪魔にならないぐらいで色々をやつていこうと思う。

++++

「……う、うう。失敗した失敗したあ！」

会社から借り受けている車の中で緒口は頭を抱えていた。逃げ出すように出て行くつもりは無かった。嫌な女と思われてないだろうか？　仕事が出来ない女だと思われてないだろうかと不安が募る。

「こ、これが……男を知ることなの？」

緒口は男性を前にしても動じない自信があった。緒口はある種『男衛』として天才的な才能を持っていた。それは男性に対して心が靡きにくいこと。

なにせ男子学校の教師試験にも実装されている“男性を目の前にしたさいの理性力”を測るテストにて二〇年ぶりとされるS判定をとっていたためだった。その内容は最難関とされている、音声、匂いのできるだけ男性の肉体に似せた抱き枕が用意された箱にて最大10分間理性を保つというもので、誰もが1分、長くて3分も耐えられない中で、緒口は試験官が確認を怠ったために時間制限を遙かに超えた14分20秒も平然と居続けた。その偉業に他の女性たちから『無反応』ノーライフという異名を付けられていた。

子供の時からそうで、男性だからといって同年代のようにテンションを上げられず無礼な態度に不快感すら覚えていた。そのため学校はおろか家族にまで白い目で見られるようになった。そんな生活に耐えかねた緒口は『男衛』になれば、こんな自分でも反応できる男性に会えるかもしれないと思い、親に頼み込み中学校を中退、男衛専門学校に入学。16歳にて無事卒業を果たして四大男衛会社と呼ばれる『アカスズメ』に就職を果たした。

『男衛』という職業は新人にはとても厳しい環境だった。なにせ護衛する対象自体が少なく、『男衛』の大半が男性に近づきたいがためにこの職を選んだようなものだ。競争率はかなり高く、ライバルとなるのは後輩も一緒に、同じ企業に属する仲間であっても結構過激な蹴落としあいが発生してる。三年手持ち無沙汰が当たり前なんて言われるほど新人が『男衛』としてちゃんとした仕事にありつけることは滅多にない。

「神詩家って本当にEランクなの？ 信じられない……」

顧客は男衛を契約する際に金額を設定できる。その料金と支払い方で企業内でランク付けが行われており、一年契約の24回払いにて設定金額の最安値による契約を希望してきた神詩家は最低であるEランクであった。男性は確かに貴重で尊いものだが企業としては金払いの期待できない顧客はなんにせよ敬遠されるもので、さらに『男衛』の給料は高校生のバイト並に安い基本給に加えて契約金の10%であるため、下手に受けてしまうと護衛中に破産してしまう可能性も出てくる。そしてケチな家の男性は理性試験を通っている『男衛』から見れば例え男であつてもちよつと……と人間失格な者が多く、適当な理由を付けて断るのが定番であった。

そんなEランクの依頼を自己申請で受けたのが緒口だった。彼女が受けた理由は自分が『男衛』になったのは、ガチの不能であるのか試すためであり、とにかく男性に会いたかったというのがあった。そして相手と己の反応次第ではきっぱりと退職届を出して、ひっそりと社会の隅で静かに暮らそうという破れかぶれもあった。

しかし、蓋を開けてみれば出てきたのはSSRランクでも居るか疑

わしい男の子。大人顔負けの凜々しい目つきが頭から離れない。視線を合わせた瞬間、生まれてこのかた体験したことのない電撃が走った感覚、そして治まることのない痒みが体を襲った。

それを我慢しながら、神詩母と話し合いをしていると男の子……神詩志亮は頭を抱えて悩み出した。それを見た緒口は断れるかもう恐怖にかられて思わず自分の方から懇願する。もうこの時点で緒口は志亮から離れたくないと必死だった。

だから、よろしく頼むと言われたとき緒口は発狂しそうなほど喜んでいた。そして最後、手袋を外されて訓練のしすぎで痕だらけとなった自分の手を握り、口元に寄せた志亮の表情を鮮明に思い出せる。

——自分を守ってくれる決意が表れた美しい手の平だ。貴女のような人に守られる人生はきつと幸福なものとなるだろう。

「——うっ」

子供にしては低い声で放たれた、どんな薬よりも脳を蕩かしそうな言葉を頭の中で何度も何度もリピートする。自分の存在を肯定してくれた天使のような男の子。

「神詩志亮……」

自分の半分以下の男の子の艶めかしい笑顔を思い出して、ついに痒みを我慢できなくなった緒口は会社に直帰の連絡をして、そのまま自宅へと帰った。

——そしてある程度痒みが抑えられたあと、平日から始まる刺激的になるであろう日々に頭を抱えることになるが、とりあえずは会社の人間には神詩志亮のことを絶対秘密にすると決意した。

護衛ができてから学校に登校するまで

緒口いしくちさんが挨拶に来てから二日経過した。平日のはじまりである。前世を含めてここまで楽しみな休み明けはあっただろうか？ 新しい生活に期待が膨らむばかりで気分はまさに有頂天だ。

弾む気持ちのまま顔を洗い歯を磨き、入学式でも着用した紅月男子小学校、略して月男子つきだんご……いまいちか、紅校あかこうの制服を着て朝食を摂る。献立は目玉焼き、ハム、チーズが乗った焼いたトーストをかぶりつき牛乳を飲む。美味い。

紅校の制服は腰ポケット部分に真ん丸模様が刺繍されている全体的に黒めのブレザー。デザイン元がこの紅月国の国旗と考えると国を背負っているようで、中々に重い意味を持ってそうではあるが、格好いいのでなにも問題はない。特に黒が良い。紳士を目指す自分にぴったりの制服である。

そういえばこの世界の男物の服は、できるだけ素肌を隠すことを目的に開発されており、基本的に男性服専門店に行けば厚着しかない。夏用でも長袖であり薄い生地を使っているとはいえ、中々に暑苦しい。この世の男性は夏場はどうやって過ごしているのだと聞けば、基本は冷房の聞いた部屋から出ることはないと言う。今のところ自分もそうなる未来しか見えない。

「志亮、用意はできた？ 忘れ物はない？」

問題ないとスーツを着て化粧を施した仕事姿の母に答える。といても持つていくものはハンカチぐらいである。この世界にはランドセルはあるものの男子が背負うことは無い。理由は下手に私物を歩いて外に出ると、自分で使うにしろ売るにしろ盗むやつが多いからだ。なので教材などを家に持ち込むことはないためランドセルを使う意味がない。

是非ともワインレッド色のランドセルと共に六年間をすごそうと思っただけに非情に残念である。

そんな風にセンチになっていると、インターホンが鳴った。玄関カメラで外の様子を見ると、今日から自分の護衛を務めてくれる『男衛』

の緒口さんが立っていた。背筋を伸ばして手を後ろにやって組む姿は、もう完全に軍人のそれである。

「おはよう」

「…………… は、はい！ おはようございます！」

うむ、一瞬だったが緒口さんのふやける顔を見ることが出来た。常にキリツとしている様も性癖であるが、そんな女の人の緩んだ表情も大好物である。挨拶は大事、これから毎日欠かさずにしよう。

「そういえばなんて呼べばいいか決めていなかったな。緒口さんと呼んでも？ それとも奈々子さん？」

「えう……………で、出来れば下の名前でお願いします……………あまり名字で呼ばれるのは……………あ、自分事ですいません！」

緒口さんは名字で呼ばれることはあまり好きでは無いらしい。であるならば自分としても遠慮無く名前を呼べるというものだ。

「分かった。今日からよろしく頼む奈々子さん。自分の事は是非とも志亮と呼んでほしい」

「は、はい！ では志亮様と！」

様付けか、まあ彼女にとって自分は大事な客であることは間違いないし、女性が男を呼び捨てにするのは結構特別なことらしい。すこし面はゆいが下手に呼び捨てを求めたら、緒口さん改め奈々子さんに迷惑しか掛からないだろう。それに正直、高校生ぐらいの女性に様付けで呼ばれるというのは……………中々いいものである。

「……………えへへ」

自分の名を呼べることにそんなに良いものなのか奈々子さんは嬉しそうに笑った。恐らく自分ではいまだんな顔になっているのか気付いていないのだろう。年相応に喜ぶ姿は可愛い以外の何者でもなく、自分は調子に乗って白雪先生の意識を飛ばした紳士スマイルを向ける。

「ありがとう、これで下の名前で呼び合うもの同士になった。特別な関係とはこういうことを言うのだろうか」

「……………ふっ！ ……さ、さあ危険ですから……………早く車にお乗りください」

しまったやり過ぎた、あわや膝から崩れ落ちそうになった奈々子さんは、プロ意識がそうさせるのか寸前で耐えて、膝を震えさせながら仕事を真つ当しようとする。流石に今回ばかりは真つ当に反省しなければなるまい。だから母よ。学校行かせないほうがいいかと悩まないでくれ。

それから、母と姉に見送られて、奈々子さんが用意してくれた車に乗り学校へと向かう。見た感じの普通車両であるが『アカスズメ男子護衛会社』のロゴと会社のエンブレムであろう可愛らしい赤色のスズメのステッカーが貼られている。窓はマジックミラーと防弾ガラスの二重になっているらしく、ドアにも鉛板が挟まれているといった、まんま要人警護仕様となっている。

車内はカーナビや通信機やドライブレコーダー。他にも正体不明のボタンや機械が運転手側に設置されており、男心をくすぐる空間となっている。将来はこんな車に乗りたいたいものだ。

ちなみに自分はいま助手席に座っている。護衛対象は本来後ろに座らせるらしいのだが、何故か助手席に座ってくれと頼み込まれた。シンプルに男子を隣に置きたかったのかと疑ったが、どうにも違うらしく、運転中の奈々子さんは先ほどとは違って変わり真剣な表情となっており、見て分かるほど仕事に集中していた。

「そういうえば、どうして助手席に座るように?」

分からなければ聞けばいいと単純な考えで質問すると、凜々しい顔はそのままで反対方向に視線をそらした。前向いて運転してほしいのだが? やはり邪な理由だったのだろうか? まあ男子を警備するプロとはいえ、やはり役得は欲しいものなのだろうか、であれば学校についたらサービスのひとつでもしてみよう。

「えっと……はい。その……後部座席ですとバックミラーに志亮様が映って……目が離せなくなる危険性があつたからです……」

頬を赤くして恥ずかしくする奈々子さんを見て、自分をこの世界に転生せしめた神に感謝を送る。

「奈々子さんは自分の想像以上に可愛いかたなよぐえ……!?!」

「か、かわ……かわっ!?! ……って大丈夫ですか!?!」

この口は自分でも想像している以上に軽いらしい。超絶反応してしまった奈々子さんはハンドル操作を誤ってしまい車が振り子の如く左右に揺れる。流石はプロと言うべきか、奈々子さんはすぐに体勢を立て直し、顔を真っ青にしながら自分の心配をする。

——この世界では運転中の女性を無闇に褒めてはならない、極めて反省した次第である。

それから学校へと到着するまでの短い時間、落ち込む奈々子さんに謝罪して、気分を変えるために、なにげに気になっていた質問をした。『男衛』という職業があるのには納得したが、どうして『単独護衛』には特別な許可が無ければ行けないのかというものだ。

答え、相棒がいないと暴走した時、止められる者が居ないためとのこと。それはもうプロ失格なのではと思うが、*“未遂”* だけなら過去に何度かあったのがこの世界クオリティ。護衛対象を襲ってしまったものは本末転倒。それが最悪にも未遂を通り越してしまったものなら、会社の信用だけではなく、『男衛』という職業自体が崩壊しかねない大事件と発展してしまう。なので互いを監視しあい歯止めを利かせる意味でも二人く三人で護衛するのが『男衛』の基本なのだそうだ。

しかしながら男性の中には、自分を護衛してくれるとはいえ近くに女性がいるのを疎ましく思う勿体ない奴がいるらしく、そんな男性たちの感じるストレスを緩和させるために最低人数である単独での護衛ができる『男衛』というブランドを国ぐるみで作ったようだ。

専門学校の合格者が100%、無事卒業して就職できるのがさらにその100%とされている中で、『単独護衛』の合格率は、その中からさらに0.01%とされているらしい。

専門学校の受講生は毎年二万人を超えるらしく、つまり一人、違うか二人……二〇人？ ……とにかく、ほんの一握りしか試験を合格できないほど難しいとのことだ。

奈々子さんはそんな最高難易度の特別資格を持っているとのことだ。エリート中のエリートとは思っていたが、ピラミッドの頂点に居るような『男衛』だったとは本当に驚いた。

だからこそ、そんな雲の上のような『男衛』が自分の所に来てくれ



たのが不思議でならなかった。新人と言えど、普通ならもつと大富豪や社長のご子息とか格が上の仕事を任せられそうなものだが？

「いいえ、『男衛』は基本的に従業員の指名形式です。会社が請け負ってランク付けを行った依頼を個人の裁量によって、その仕事に就くのか決めます。相手側の指名があれば別ですが基本はそうですね」

「指名制なのか、意外といえば意外だな」

「はい、会社そのものが全て決めてしまうと、トラブルが多かったみたいですよ。なので個人が判断できる要素を増やすことによって責任を分散させるようにしたと聞いています」

「トラブル？」

「……報酬の事もありますが、『男衛』には理性が強くないとなれない職業です。そのため男性の見方が一般的とは言えず……この仕事は現場が変わる事は年単位先になりますので、その結果、みんなが不幸になることが多かったみたいです」

自分が年端もいかなない男子だからか、奈々子さんはそれなりに言葉を濁して語った。恐らく昔の体制のままでは奈々子さんのような『男衛』だけではなく、会社や顧客側にも何かと不幸なことが多かったのだろう。

「ふむ、となると奈々子さん本人が自分を選んでくれたのか」

「……はい。偶然ですがご指名させて頂きました」

それは色々と飲み込んだ発言に聞こえた。彼女は新人らしいし、もしかしたら実績ほしさに適当に選んだのが自分だけだったのかもしれない。しかし、個人的に理由はどうでもよくて、こうやって奈々子さんに会えたことに運命の神がいるというのなら感謝のみを伝えたいもの。

奈々子さんは気まずそうな顔で会話を終わらせる。彼女はどこまでも真面目で優しい女性らしい。だから落ち込んで欲しくないなと考えてしまうのは当たり前だろう。

「……ご指名まことにありがとうございます。貴女に守られることにこの神詩志亮、人生最大の喜びを感じているといっても過言では――」

——先ほどの反省などを完全に忘れる馬鹿の所為で、自分は遅刻することとなった。

登校してから友達ができるまで

色々あつて遅刻してしまったが、授業が始まるまでには学校に到着した。やたらでかくて派手な正門を車に乗ったまま通った後、そのまま地下駐車場へと向かう。最初みた時は本当に学校かここはと驚いたものだ。

「こちらをお持ちください」

「ボタン？」

「なにかあつたさいは、それを押してください。すぐに駆けつけます」

「中まで一緒に来ないのか？」

「よろしいのですか？ 校内ですよ？」

どうにも反応を見るかぎり、これより先は女性禁制らしい。よく見れば奈々子さんと同業者らしき女性が数人車内に待機しているようで、下校時刻までここで『男衛』を待機させるのは当たり前のことらしい。といわれても紅校の入学式でみた感じ、先生も女性ばかりで今更な気もするし、護衛と言うのならは近くに居てくれたほうが自分も安心である。

その事を正直伝えて、一緒に来てくれと頼むと奈々子さんは躊躇いがちながらもうれしさを隠しきれずニヤけながら了承。一緒に校舎内に入ることとなった、するとやはり普通ではないのか、別の『男衛』が目を見開いて驚いている様子なのが印象的であった。その視線はどこか羨まし妬ましそうに奈々子さんを見ていたが、とりあえず今は気のせいだと思っておこう。

「さすがに教室までは、ここで待機していますので何かあれば大声で叫んでください」

「わかったよ。それじゃあ行ってくる」

奈々子さんに背中を見守られながら、前扉を開けて教室に入ると、白雪先生が無事な様子で立っていたことが確認できて、とりあえず安堵した。しかし何故か口を開くほど驚いた顔をしている。休みだと思わせてしまったのだらうか？ ともあれ遅刻したのは事実だ。謝らなければ。

「少々トラブルがあつて遅れてしまった。申し訳ない」

しまった。丁寧語で言うべきだったのに、つい何時もの調子で言葉を発してしまった。地球では偉そうと不評ばかりであつたというのに、やはり癖というものは抜けないものだ。

「い、いえ来てくれただけで……本当に来てくれただけで先生は嬉しいです!!」

お、おう。そんな大層喜ばれることかと疑問に持ちながらも、一番前の席に向かう。その道中に気付いたのが、入学式よりもクラスメイトが少ないのだ。人だけではない半分ほど机ごと消えており、元から教室そのものが広いため気付くのに遅れた。

「先生。入学式に比べて生徒数が半分もないようだが、いったい何が？」

進行の邪魔をしている自覚はあるが、さすがに気になると先生に聞くと帰ってきた答えは転校である。驚きのあまり授業初日に半数が転校したのかと質問を重ねれば、紅校ではよく見る光景らしく、その理由は最下位の学校だと見切りを付けて、ランクがいつこ上の学校に再入学をするとか。

授業はおろか入学式でなにを見限つたのか、ちつとも理解できないが、残つた他の男子を見るとあながち間違いないらしい、少数というか見た感じ二人を除いた同級生どもは、ここに居ることじたい不平不満でしかないと言つた様子だ。

席が遠いおかげで、聞くに堪えないであろう文句を耳にしなくていいのは幸運なことなのだろう。高校や大学ならいざ知らず小学校でなにが変わるといふのか、地球のころからとんと理解出来ない領域である。

そういえば反応が他とは違う二人のクラスメイト、どうにも他の男子たちと違うようで休み時間になつたら話しかけてみよう。そういえば白雪先生、今は授業の最中だろうか？ 教科書が見当たらないがどうすれば……なるほど、すべてパソコンの中にあるんですね。それで授業も基本的にはオンラインだと……。

先生、まず電源ボタンがどこにあるのか教えてほしい。というか前

世があつたとしても小学一年生にわかるわけないだろと、少々この世界の教育制度にケチを付けていたら、クラスメイトに鼻で笑われる……まさか、この世界の男子は小学一年生でもパソコンを使えるのか？

白雪先生は親切丁寧に電源の入れ方から、授業の受け方、教科書の開き方を教えてくれた。それによつて授業が遅れて申し訳ないと思つて、改めて周囲を見たらクラスメイト共は、ヘッドフォンをしてすでにパソコンで動画を見ている様子だった。

あれはいいのかと聞けば、そもそも男子校の授業は学校側が用意した動画を見ることを言うらしい。なんでも、女性に直で教えられるのはストレスになるためとか、もはや家畜扱いではと思つた自分は悪くないと思う。

なので、その日のノルマとして公開される動画を見て、それが見終わつたら好きに帰つていいとのこと……駐車場で置き去りにされている『男衛』が一日中あそこに居るわけではない事だけは安心した。それ以外に問題しなくて悩ましいことこの上ないが、ふと白雪先生は自分たちが動画を見終わるまで眺めているだけかと思つて聞けば案の定、そうだと寂しそうに笑いながら言つた。

彼女も、こんな虚無に近い教師生活は本意ではないのだろう、なんのために教師になつたのか分からなくなる扱いに同情しかできない。であれば、そんな彼女の立場に全力で甘えろとしよう。

「先生。やはりパソコンを上手く使えなくてな、申し訳ないがしばらく傍に居てくれないか？」

「はえっ!?! ももももちろんです！ 先生を遠慮無く頼ってください!!」

「ありがとう」

先生、礼を言つただけで倒れそうにならないでほしい。今日は母が居ないから保健室には運べないんだ。

さて、白雪先生を隣に座らせて動画を見始めた。その内容はひと言でいえば色々な意味で面白いものではなかった。女教師が教科書の中身をかみ砕いて黒板に書いていき説明をしていくだけで、そこに無

駄も遊びもない。科目別に先生が替わったのだが、違いと言えば授業内容と使うチョークの色ぐらいである。どうせ男たちを不快にさせないという理由なのだろう、感情を殺しながら授業を進める様は中々えぐいように思えた。

救いだっただのは、専門には劣るものの他の科目にも明るい白雪先生が居てくれたおかげで、動画で気になったところを口に出せば答えてくれたことだろう、彼女の説明は大変分かりやすく理解というものがとにかくしやすかった。覚え続けられるかは別として楽しく、同時に白雪先生無しで動画を見終える自信は完全に喪失した。

数にして三時限分、時間にすれば90分ほどの動画を見終えた所で本日の授業は終了。これで自分はいっ帰ってもいいらしい。あまりにも終わるのが早すぎる。まさかこれから毎日昼前に終わるのか？勉強は苦手であるが、これはこれで心配である……いや、というかもしかして給食がない？

「昼食は食堂があるので、お腹がすいたという子は自由に移動してもいいですからね」

絶望に打ちひしがれていると、白雪先生は時間を確認して、念のためにと説明をし始めた。さらに言えば、完全に無料らしい。これは行くしか無い！

「——ちよつといいか？」  
「君は？」

唐突に話しかけてきたのは成長すればダウンナー系として女性に人氣がでそうな縮れた黒髪の男子。つまりクラスメイトだった。彼はこの学校で授業を受けることに対してあからさまに不満そうにしていなかった片割れであり、自分の方から機会があれば話しかけたかった人物だった。

「和車わくるま 狛哉りよつやだ。あんたは確か神詩志亮かみししあきといったか？」  
「ああ、そうだ」

「なあ、どうしてあんたは女に優しくする？ 女つてのは少し優しくするだけで襲いかかるもんなんだろう？ 怖くないのか？」

単刀直入に真っ向から聞いてきた和車、その様子からして自分が理

解できない怖いものであるから知りに来たといった風であった。確かにこの世界での自分の言動は異常でしかないのだろう。それに關しては最悪自分は白雪先生や奈々子さんのような女性なら襲われてもいいかなと思っっているし、紳士道を極めるのとは別にハーレムを作って幸せな家庭を作る未来もありだと思っっているから……と正直言うのはあまりにも紳士に欠けているので、極力言い方を変換できるように努める。

「ふむ。であれば逆に聞きたい。どうして女性だからと冷たくするのだ？」

「どうしてって……」

「確かに男を見たら獣となって襲いかかってくるのが女性というものなのだろう。理性を失っている故に自分たちの異常などお構いなしに暴れ狂う存在なのかもしれない。だが白雪先生みたいな、そうでない素敵な女性も確かにいるのだ。和車よ。自分は自立しなければ叶えられない夢を持って生きている。故に自分は自分を尊重してくれる女性を一介の男性として同じように尊重したいのだよ。であれば逆に問おう和車よ。己はどうしてただ性別が違うだけで、そこまで怖がるのだ？ 同性であればどうして安全だと思うのだ？」

「それは……」

始めに答えたのは、自分の言葉を盗み聞きしていた名前も顔も覚える気の無いクラスメイトだった。曰くそんなの女だからだろである。お前には聞いてない。しかし和車は七歳にも満たない小学生なのだ。こんな難しい質問をするほうがおかしいか。

そう思ったのだが、彼は顎に手を当てて長考している。そもそも質問の内容からして年齢以上に頭が良いのかも知れない。ちなみに自分の場合二周目というズルをしているから他と違うだけで、記憶を思い出さずに過ごしていたら、あまり頭が良くないため一般的な男となんら変わらない人生を送るところだったかもしれないな。考えるだけで中々にゾクツとする。

「……正直よくわからない。でも神詩の質問に答えられる男になりたいと思っっている自分が居る。お前がいう“シンシ”を極めれば答え

が見つかるか？」

「和車、いや、猟哉よ。すまないが自分もそれに対して答えを持っていないのだ。なぜならそれは君が自分で探して決めるものだからだ」

本当に分からないので答えは自分で探して欲しい。自分はそこまで賢くないんだ許せ。

「——ハハッ！ お前等おもしれえな！」

「お前は確か。灯元ひのもと 到自とうじ」

「なんだお前、もしかして同学年の名前全部覚えてんのかよ？」

「偶々だ。俺たちとは見た目が違いすぎるから自然と覚えた」

つと、割り込んできたのは話しかける予定だったもう一人のほうだ。真つ赤で逆立つ短髪もそうだが、なにより特徴なのはお前本当に小学生か？ と疑うほどの高身長に体格の良さだ。性格も乙女ゲーの攻略対象そのもので、これでスポーツを始めたものなら秒でスターになること間違いないだろう。

「くそつまんねえ男に生まれて嫌になっていた所だ。なあ、あんたの言う“シンシ”を極めれば、そんなつまらない人生から抜け出せるのか？」

「自分の答えは変わらんよ。紳士道というものはあくまで道でしかないのだ。その道をどう作り、どこへ到り、そして何を見るかは己次第だ」

粗暴の言動の中に懇願と言っても過言では無い今を脱却したいという気持ちを感じ取れた。だが、本当に申し訳ないことだが、それ自分に関われても正直困るので猟哉の時と同じく適当に誤魔化す。

「……へへっ。いいじゃねえか。自分で道を作るって所が最高に気に入ったぜ！ 決めた！ オレも“シンシ”を目指す！ そうして自分で道を作ってやるぜ！」

「俺も答えを見つげるために“シンシ”を極めたい。よろしく頼む」

……とりあえず友達が一気に二人も出来たと考えておこう。因みに白雪先生は猟哉と話している最中にきゅーと言って気絶していた。他のクラスメイトも教室を出ており、恐らく帰ったのだろう。

「そうだな。まずは先生を起こしてお昼にするか」



そう提案すると二人とも了承してくれたので、白雪先生に何度か声を掛けると、男子に囲まれ……とじやつかん錯乱しているもののきちんと目を覚ましたので、自分たち三人は教室の外に出た。

## 友達ができて下校するまで

紅校の食堂は、地球のテレビで見たことがある一般人でも出入りが自由な大学の食堂なみの広さと整備があるようだった。高級レストランを思わせる煌びやかな清潔感と言うべきか学校設備としては明らかに逸脱した雰囲気醸し出している。

だが、学級崩壊または限界集落。そんな単語が浮かぶほど悲しいまでに食堂は閑散としていた。猟哉と到自、そして自分の三人以外に学生がいなのだ。一年は自分たち以外授業の動画を見終わって帰ってしまったが、上級生は居るものだろうとはかなり浅い考えだったらしい。

久しぶりに学生が食堂に来てくれたと感動する食堂の恐らく母と同じく年齢に比べて遙かに若々しい婦人の方々に切なさを感じながら本日の献立を尋ねると、注文してくれたら何でも作るとのこと、成長期の子供には中々毒になりえそうな甘美な言葉である。

自販機で食券を買ってセルフで出来たものを持って席に座るのではなく、席にはメニューが置かれており、注文すれば持ってきてくれるフルサービス形式だった。これは普通に楽なので正直嬉しかったりする。

そして驚いたのがメニューの豊富さである。子供が好きそうなものを中心にラインナップが多すぎて、これが全部無料と考えると喜びしか湧かないというものだ。困ったことがあるとすれば何を食べるか悩んでしまうことだろう。できればちよつとずつ色んなものを味わいたいものだ。そんなメニューはないものか。

……お子様ランチ？ 注文するものが決まったな。

「お子様ランチ……それは『シンシ』に関係するのかわ？」

「いや、普通に食べただけだ」

なにかと紳士の道に繋がったがる猟哉に勘違いを膨らませるのもどうかと思いき正直に答えながら、そういえばとつかず離れず適切な距離で護衛してくれている奈々子さんに話しかける。

「奈々子さんは昼食、どうするんだ？」

「はい、自前のシリアルバーがあるので、それを食べたいと思います」  
「昼はいつもそうなのか？」

「……はい」

そう返事はしたものの、彼女は隠し事が苦手らしい。視線が明らかに泳いでいる。そういえば『男衛』の給料は契約先が支払う報酬の額によって決まるとか、であるならば神詩家は、男の自分が産まれて国の援助を受けて初めて普通になった家庭なので裕福とは言いづらい。であるならば彼女の財布の厚さが、どれほどのものか想像できてしまう。

「……すまないが、このビーフハンバーガーも追加で頼む」

「こゝ、志亮様？」

しばらく待つてると、ほぼ同時に全員分の注文した料理が来た。その中のビーフハンバーガーをバケットごと奈々子さんに持つていつて差し出す。

「やっぱり頼みすぎたようだ。すまないが食べてくれないか？」

そんな風に言い訳をした直後、これなら片手間に食べられると思つて選んだのだが仕事柄、炭水化物の塊であるハンバーガーは食べないかと心配になる。せめてサンドウィッチのほうが良かったかと後悔している、奈々子さんは恐る恐ると言った風に受け取ってくれた。

まあ、ちとルールに反する行為かもしれないが、これでも一介の男子なのだ。多少の我儘なら許されるだろう。駄目そうなら後日、頭を下げて頼んでみよう。でなければ安い賃金で自分のことを一年間守ってくれる彼女に流石に申し訳が立たないというものだ。

「あ、ありがとうございます！」

金も払ったわけではなく、ほぼズルのような行為で感謝されることに罪悪感と気恥ずかしさが生まれて、早めに食べるようにと言い残して席に戻る。もう少し成長して金を稼げるようになったら彼女の誕生日にお洒落なレストランでも行きたいものだ。

「……なるほど、頼みすぎたのは『男衛』のためか、それも『シンシ』に  
関係することか？」

「……自分の家はそれほど裕福ではなくてな。だから別の形で報いた

いだけだ」

「なんだか自分の行い全て紳士に繋げようとする猟哉。注文したのは米と味噌汁と漬物多数のお新香セット。美味そうだが渋い。」

「つーかよ。結局 “シンシ” ってなんだ？」

「ステーキを口いっぱい頬張りながら聞いてくる到自。身体が大きいとやはりたくさん食べないといけないのか、とにかく肉がでかい。」

「そういえば紳士が明確にどういったものか説明した無かったと思いつたり、自分の紳士像を二人に伝える。聞き終わった二人の感想は概ね似たようなものだった。」

「なんだその完璧超人」

「不可能とまでは言わないが、非現実の存在にしか聞こえないな」

「もちろん、これらは紳士と呼ばれる男性たちの特徴をまとめただけに過ぎない。紳士とは常に礼儀を忘れず優雅に華麗に強い意志や目標を持ち、そのための努力を決して怠らず。そして異性の前に立ちその背中で魅了し続ける男性のことを言うのだ」

たぶん。

「……女性たちの最後尾で玉座に座り、自分では何もせず全て他人任せ。それが男の理想の生きかただと教えられたけど、紳士の考えはまるで正反対のようだ」

「へっ、女どもの前に立つ生き方が、面白そうじゃねえか！」

「好感触と言えいいのか静岡の違いはあれど、紳士というものを知った二人はとても楽しそう。その様子に自分もまた嬉しく感じる。思えば前世も合わせてこんな風に同世代の友達とご飯を食べるというのは久しぶりだったかもしれない。これはいいものだ。」

「ご飯を食べきった後は自分たちの生い立ちを中心に会話が始まった。まず神詩家の話をすれば、自分の似たようなもんだぜと到自が言う。ただ灯元家は家の中でも危険や男のすることじゃないという理由から到自に殆どなにもさせなかったらしくかなり過保護な印象を受けた。荒っぽい言動はそんな束縛が強い環境の反動かもしれない。猟哉のほうは紅校よりも上の小学校に行ける裕福な家庭らしいのだ。」

が、ある事情によってほぼ強制的に入学させられたようだ。事情について深掘りすると反応したのは到自だった。

「そういえば和車って聞いたことあったわ」

「有名なのか？」

「わかんねえけど。母さんがその名前聞く度に息子を渡すものかって怖い顔するんだよ」

「なに？ どういうことだ？」

「……和車家は男子特別保護法によって保護された男子を引き取れる権限を持つ紅月国有数の富豪一族だよ……俺もそんな和車家の養子なんだ」

男子特別保護法とは、国の援助を受けてもなお男子を健全に育てられないと役所が判断した場合、親から親権を剥奪して男子を保護することができると法律だ。和車家はそんな保護された男子を国有数の金持ちだからという理由で養子にできる許可を国から貰っているらしく、なんと猟哉は実の親から引き離されて和車家の養子にさせられた子供だと言う。

「俺は赤ん坊の時から引き取られた血の繋がらない8人兄弟の末弟なんだ」

その話を聞いた自分は心底反吐がでた。何故なら猟哉の言い回しや表情から決して和車家での生活は幸せではないとわかるからだ。特に自分は神詩家が大好きだ。母の腹から二番目に産まれてきたことに何度神に感謝したか覚えていない。そんな家族と他人のエゴによって引き離されるとあつては喜怒哀楽の感情のうち三つが消え失せる事になるだろう。

「ひっでーな。兄弟っていじめがやばいんだろ？」

「まあ……否定はしない」

男としてのプライドか、それとも気を遣ってくれたのか猟哉はそれ以上は黙ってしまった。ぽりぽりと静かにお新香を食べている姿は、どこか達観しており年不相応の賢さも、そういった苦勞が積み重なったものかもしれない。せめて学校では楽しく過ごして欲しいものだ。今度トランプとか無いか先生に聞いてみよう。

それにしても二人が紳士に興味を持ったのは、恐らく家庭の事情から来るのだろう、心のどこかでは奇抜なものに眼を惹かれているだけと思っっている部分があったが、二人とも紳士に対するガチ度が高そうだ。……単にこのままだと彼女すらできないぐらいの気持ち切っ掛けだったことは心に秘めておこう。

昼食がすんだ後は二人とも家に帰るらしく、自分も同意する形で学校初日はこれにて終わることとなる。この世界について知識がより深まり、なによりも友達ができた事が嬉しかった。男子校だと一時は絶望もしたが、ここに来るとよかつたと思う。

家族にいい土産話ができそうだ。さて自分も帰るか、奈々子さん車を出してく……るまえにハンバーガーを食べてくれ。一生大事にしないでいい。料理は消え物であるべきだ。

## 二週間後から個人授業を受けるまで

登校初日から二週間。学校生活は今のところ順調である。最近では言わずとも横に座ってくれて、色々と教えてくれる白雪先生のおかげで授業は詰ることなく受けられていた。ケアレスミスが多いのは許して欲しい。日本語に引つ張られてしまい、どうしても書き間違いが多くなってしまう、雰囲気を読めるから有り難いと思わなかったが文字が似過ぎているというのも問題だな。

時間が経って、それなりに慣れたのか白雪先生は感謝を伝えても悶えたりするが滅多に気絶することは無くなった。それに安心してか自分も先生とよく会話をするようになり、この世界のことをより知ることが出来た。

男子校の教師は勉強、理性試験、そして就職。そんな三難関を突破して初めてなれるかなり難しい職業らしい。特に後ろの二つはレベルが違うらしく全国一位の才女でも、この二つに躓いてしまい二ノトに転落してしまうとか、厳しいが過ぎる。

「でも、理性試験は使われた男性の声とか匂いが私の好みから外れていただけだし、就職も偶々担任を募集していたのに乗っかっただけで、私は幸運なだけなんです。先生としては全然で……」

そう言つて恥ずかしそうにする白雪先生。どうやら自信の無さが謙虚でお淑やかな性格の理由になっていたらしい。行き帰りに見る外の女性たちとはえらい違いだ。彼女たちはどうも男子校を車で往き来する生徒目的に、わざと屯っているらしく、目的の男子が登校下校する時間を予測する阿漕な商売も存在しているとのこと。

なので、奈々子さんはそんな女性たちと読み合いバトルを日夜繰り広げているらしく、定期的に会社が貸し出している車を入れ替えたり、ルートを変えたり、偽情報を拡散したりしているとのこと。車の窓はマジックミラーで外側から見れないからそこまでしなくていいのではと思つて聞いてみたら、下手をすると囲まれてしまい車を乗り捨てないといけなくなるらしい。やっぱゾンビの類いか？ 飢えているからこそその言動なんだろうが、それならなおさら人に戻ってほ

しいものだ。

閑話休題。白雪先生は自分を幸運と評するが本当にそうだろうか？ 狛哉が言うには男子校の担任というのは、なにかあったさいに責任が学校に向かないようにするために用意される生贄と聞いた。だから、斬り捨てても諦められる人員、つまり新人が配置されやすいとのこと。白雪先生は例に洩れず、ゆえに紅校の先生になれたというのは、どちらかと言えば不幸な気がした。

この二週間でまた一人転校した、狛哉と到自を除いた男子共は授業動画を流すだけ流して、堂々とゲームをする始末。白雪先生は自分の傍にいなながらも、そんな彼らも担任として、きちんと気にしているのか心配そうな視線を向けるが気付かない、気付いたとしても無視している。

……もしこんな奴らでも白雪先生が嫌だと喚けば簡単に辞めさせられてしまうのが担任という立場なのだ。やはり幸運と祝福される職業とは思えなかった。まあ、もしそんなことがあったとしても、男という武器を最大に使い全力で止めてみせるがな。

「……ならば。先生には感謝しなければな」

「え？」

「なぜならば。白雪先生が幸運だったからこそそうやって会えることが出来たのだから。本当にありがとう。貴女は自分にとって幸運を象徴する白い花のようだ。できることならば長く長く傍で咲いて欲しい」

意気込みが過ぎたのか自分でも驚くほど齒の浮いた言葉を並び立てる。案の定、白雪先生は顔を沸騰させて、言語中枢が麻痺してしまふ。あうあうとしか言わなくなった彼女を宥めて……若干悪化させてしまった後、仕方ないと動画に集中する。

……やはり自分は白雪先生なしでは賢さを上げられないようだ。ちつとも理解が進まない。自業自得とはこのことか。

授業動画を見終わり、自分たち男子三人組と『男衛』の奈々子さん。そして自分が誘ったことで一緒に食べるようになった白雪先生の計五人で食堂に向かいお昼にする。



「食堂の料理って本当に美味しいですね！」

「はい。会社にも食堂があるのですが、それよりも断然に調理も食材もグレードが違います。これが無料で食べられるようになるなんて……感謝してもしきれません」

「……私もです。本当に夢みたい」

白雪先生、そして自分の割としつこかったであろう説得に負けて昼は普通に食べるようになった奈々子さんは、自分たち男子とはひとつ離れた席に座り一緒に食事していた。本来であればここは生徒専用の食堂らしいのだが、自分たち以外に使う奴がいなしと、調理場の婦人方々に直接交渉を行った結果、彼女たちも食材を腐らせるだけだと許可を頂いた。いずれは他の教員職員さんにも解放できればいいと思うが、まあ本格的に交流をし始めてからでいいだろう。

ちなみに奈々子さんは『男衛』の仕事があるので最初は断っていたのだが、執拗に説得を行ったことで根負け、今では一緒に昼食を摂っている。当初は自分の安全に関わることとあって、仕事そのものに干渉しないようにとは思っていたのだが、白雪先生を誘ったことで考えを変えざるをえなかった。

一緒にと言っても、じゃあ男女同じ席で食べるわけには行かず。自分だけならともかく到自も狛哉も平気とは言ってくれたが、まだまだ二人は完全に女性慣れしているように見えないからと白雪先生が遠慮をして、少し離れて食べることとなった。

本人は至つてももの凄く幸せそうではあったが、その光景は客観的に見ると虐めにしか見えぬ。さすがに気になると、奈々子さんも普通に食事してもらおうようにしたのだ。おかげで自分の天使度が上がったみたいだが、まあ満点になったら天に還らないといけないというものでもないため安い代償だろう。

「しかし相も変わらず。こんなに美味しい食堂を自分たち以外誰も使わないな。二週間通い詰めても上級生一人も見ないとは、もしかして全員が転校しているのかも？」

「そうだと思う。紅月男子小学校は進学するだけで恥と認識されている。二年になる頃には大半の生徒は転校してしまい、どうしても転校

できなかった男子は不登校になるとのことだ」

「そこまでか？」

冗談にしか聞こえないが嘘を吐かない猟哉の言うことだ、事実なのだろう。六、七歳の子供が考えるものではない。どうにもこの世界の人間は地球の同年代に比べて早熟な気がする。法の年齢制限が地球よりもずっと低いことが影響しているのか？

軽自動車であれば15歳から免許を取れたり、中卒就職は当たり前らしく、特に女性に関しては十代後半ではすでに社会人になっている者が圧倒的に多い。実際に奈々子さんは16歳で会社員。姉も中卒で就職しようと思っていたのだが、母の強いすすめによつて高校に進学。自分が産まれたことで金銭的余裕ができ、そのまま大学へと通うことになったと言う。成人基準が江戸時代である。

「紅校に何かしら問題があるとは思えんがな」

「確かにー。飯がうめえし、授業も先生がいるおかげで分かりやすいしよ」

「ああ、全くその通りだ」

何気ない到自のひと言に同意すると食堂の婦人たちと白雪先生が一斉に照れ出す。男というものはどうにも、女性という理由で評価をマイナス100から始めようとする。しかし到自も猟哉も自分を真似ているのか、ここ最近、授業でも分からない所や疑問に思ったことがあれば白雪先生に質問しており、詰ること無く回答を提示して、自身が知らないことがあれば正直に伝える先生のあり方を真つ当に評価してくれている。その事に純粹に良かったと思うものの、最近は独占とは行かないため少し寂しさと嫉妬を抱いてしまう。やはり紳士の道はまだまだ遠いようだ。まあ渡す気はないがな。

ついでに白雪先生たちが自分たちの会話を当然と言わんばかりに聞いていることには、数日前に内心でツツコミ済みなので指摘はしない。男子に関するものに限り五感が鋭くなるものだ、この世界の女性

は。  
「別の男子校を見たことあるが設備で言えば比べものにはならないほどの差はある。ただ過剰な悪評の裏には他の男子校の思惑もあるみ

たいだ」

「思惑？ 随分ときな臭い話だな」

「ああ。分かりやすいのはランクが一段階上の『聖なる男たちが学ぶべきに値する学園』のやり方だろう。『紅月男子小学校』に入学した家族に甘い言葉で近づいて中途入学や転入で高額な料金を要求する。そうやって大金と男子を得るために噂ではわざと合格率を低く設定しているみたいで、『紅月男子小学校』を入学して即転入したくなるような悪評を率先してばら撒いているという話だ」

「そうか………すまないが、もう一度そのランクが上の小学校名を言ってくれないか？」

「聖なる男たちが学ぶべきに値する学園』だな。正確には小中高大一貫制で、入学してしまえば大人になるまで二度と学校から出られない男子の監獄なんて呼び名も聞く」

もう正式名称の時点から相性が悪そうだ。『聖なる男たちが学ぶべきに値する学園』、よくもまあここまで自己中且つ自負心溢れた名前を付けられるものだ。略して聖学でいいだろう。

「ごちそうさま——さて、白雪先生」

食事が終わったことで白雪先生に声を掛ける。すると彼女はビクツと肩を震わせてる。こちらを見る顔は青く、どこか脅えているように見える。

「……ほ、本当にやるんですか？」

「勿論。数日前に決まったことだ。今更変えることはできない」

「わ、私じゃやっぱり……」

「白雪先生じゃないとダメなんだ。それに先生は言ってくれたはずだ。なんでも協力してくれると」

「うっ……わ、分かりました。先生として全てを捧げる覚悟で挑みたいと思います！ えいっえいっむんっ！ むん！ むんむんむん!!!」

意気込む、というよりも死中に活を求め勢いで気合いを入れる先生に大袈裟だと、リラックスしてほしいと言いながら、手を差し出す。先生は死すらも受け入れたような悟りきった表情で自分の手を取って立ち上がった。

——授業の動画は1日3時間分全て合わせても90分ほどしかないが、本人が望めば先生による専門科目の直接授業を受けることができる。自分はこれから毎日、昼食後に白雪先生の授業を受けることを選んだ——ひとりで。いわゆる個人授業マンツーマンという奴である。

「さあ先生。昼の専属授業と行こう。よろしく頼む」

ちなみに、先生の科目は音楽だ。——自分は知らなかったが、この時自分以外の人全員が、先生の明日を心配したらしい。

## 個人授業を受けてから個人授業になるまで

自分は行き詰っていた。いくら考えてもこれと言える自衛の方法が思い浮かばなかった。確かに『男衛』である奈々子さんが傍に付いてくれているのは心強い。直接武力を行使する姿はまだ見たことないが、登下校時には日夜練り広げられている自分をひとめ見ようと群がるゾンビのような女性たちとの心理戦にて勝利し続けていることから、その実力が本物であることが伺える。

だがいつ何時、不測の事態が起きてもおかしくないのだ。そういったもしかしてを考えると自分の身。ひいては家族に心配を掛けず。奈々子さんの職を守る為にも自衛の手段は必要だと強く思う。

事の発端は数日前。学校生活が落ち着いてきたので忘れかけていた自衛手段を持つという目的をはっきりと思い出したことから始まる。自分で考えても埒が明かないと今度は大学生である賢い姉を頼ることにしたのだが、自衛手段が欲しいと姉に伝えると奈々子さんが不満なのかと誤解されかけてしまい話は弁明から始まってしまうこととなった。

なんとか念には念を入れていただけだと納得させて話を聞くと、賢い姉はシンプル且つ最適解として『男衛』を増やした方がいいと言った。なぜなら、秋の誕生日まで、数えて七つの子でしかない自分が護身術を学び始めたり、防犯グッズを身につけたとしても大の女性相手ではほほ意味をなさないからだ。

そう姉の理路整然と語られる理由に確かにと納得するしかなかった。守られる側の自分が自衛をしなければならぬということとは、もはや逃げることにすら出来ないほど追い詰められている状況である。

であれば窮地に陥らないことが最大の自衛手段であり、自分の護衛を増やすことが現実的で最善な策であることは間違いないだろう。流石は姉である。

「姉さんの弟として生まれたことを誇りに思うよ」

などと、イケボを意識して低めの声で言ってみれば、姉は昔のように鼻血を垂らして幸せそうな面で気絶してしまう。姉はどうにも男

らしい低めの声が好きなので感謝と相談に乗ってくれた恩返しを同時にできるならと短絡な考えでやってしまったと後悔。そして椅子に座りながら気を失った姉を見て、いつもは怠けているばかりの脳みそがここぞと閃いた。

——この声、自衛に使えるのでは？

母に姉。白雪先生に奈々子さんと、この世界の女性に何度か言葉を贈った自分なりの結論であった。事実、彼女たちは思考を停止させたり、腰を砕かせたり、気絶したり、鼻血を出したりしている。耳は最も脳に近いとあってか、その効果は絶大だ。

それに声だけならば身体を傷つけることはなく、距離が多少遠くても届き、囲まれた場合でも全方位に影響を与える事ができる。考えれば考えるだけ自衛の手段としてこれほど最適なものはないと思えるほどであった。とつて付けたような事を言えば、紳士としても声を武器にするというのは割とありだろう。格好いい台詞を言い放つと敵が倒れていって、全てが終わった後、ニヒルに笑う自分をイメージすると中々格好いいようにも思えた。

であればと鉄も打たなきや剣にはならず。声を武器にするなら声を鍛えないといけない。

白雪先生の担当科目が音楽だったことを思い出し、さらに授業動画を見終わった後は生徒が頼めば、先生の個人授業を受けられると言う。これはもう運命か宿命かが己の声で身を守れと言っているようなものだ、あまりにもわくわくが過ぎて、姉の事を完全に忘れてしまう。

この日は姉の好物のオムライスを作って手打ちにした。すまなかった。

思いついたら即行動と次の日、白雪先生の個人授業が受けたいと願っていた。すると白雪先生はバグったのかのように数秒ほど停止し、再起動を果たしてすぐに天使の歌に文句を付けられるほどの出来た人間ではありませんので、訳の分からぬことを言っただけとするので、これは紳士になるために必要なことで先生の力が必要なんだとごり押し、承諾を得ることとなった。

ただ、覚悟が出来ていないので今すぐ授業をするとすると内臓全てが持たないと言うので、数日間の執行猶予をくださいとのこと、焦る必要もないと自分は承諾した……執行猶予？

ともあれ約束の日は訪れて、白雪先生と奈々子さんとの三人で紅校の音楽室へと初めて訪れた。道案内も兼ねて先頭を歩く白雪先生の背中、なんだか気が重いを通り越して断頭台へと赴く罪人に見えたのはきつと気のせいであろう。そういうことにしておく。

「——中に入りましょうよ奈々子ちゃん！」

「いいえ！ 私はあくまでも部外者ですので！ それに扉前で待機することは『男衛』として間違っていますので服を離してください！」  
「食堂で当たり前のようにお持ち帰りを頼みだした人が、いまさら何言っているんですか!?!」

「……私には志亮様を守らなければいけないと言う死ねない理由があるんですっ！」

「いいんですか？ 神詩君と二人きりになっちゃいますよ!? ここ防音だからなにかあっても外からでは分かりませんよ!? というか自分でもどうなるか分からないのでお願いしますので中に居てくださいー！」

「そ、それは……」

音楽室の前でこんなやりとりがあり、教室と同じく外で直立待機しようとしていた奈々子さんであったが、白雪先生の必死の説得に負けて教室内に入る事になった。正直白雪先生なら襲われてもいいのだが、そうしてしまうと白雪先生が社会的に抹殺されかねないので、されるにしても、せめて自立の目処が立つてからのほうがいいだろう。早く大人になりたいものだ。

「これは……すごいな」

音楽室とは銘打っているものの、その中は収録スタジオそのものだった。白雪先生に教えられて初めて名前を知ったコントロールルームの本格的な機材の数々に驚き。白雪先生との二人で、その奥にある扉を通り抜けてブースの中に入り再度驚く。奇妙な空間と言えはいいのか無音というだけで、まるで違う世界に変わってしまった感

覚に、どこか興奮めいたものが湧き上がる。ふとガラス越しにコントロール・ルームに残った奈々子さんが見えたので、手を振るうと、遠慮がちに顔を赤らめて手を振り返してくれた。

「簡単な機材なら私でも扱えるので、授業をするのには問題無いはずです」

「よろしく頼む」

今日やることは事前に決めており、ちゃんとした声の出し方、つまり基礎の中の基礎をやっていく事になる。先生が長さを調整してくれたマイクスタンドの前に立ち、ヘッドフォンを被る。その後先生はリモコンを操作してコントロール・ルームとは反対の壁に埋められている巨大モニターの電源を入れた。

テレビに写し出されたのは、楽譜に書いてあるような線に設置されている太い横棒をひたすら縦棒が通り過ぎる。言わば前世のカラオケ採点で見たものだった。試しに声を出してみると音程に合わせて別の横棒が現れたので間違いないだろう。

つまり、今回やることはカラオケ採点と同じく元からある横棒……バーに合わせて声を出していくと言うものらしい。なにせ自分がどこまで声を出せるのか才能があるのか分からないため、その確認をするとのことだ。全くもって道理である。

それから五分ほど「あく」とか「んく」とか「AHく」「HUく」とか、時折場所が上下するバーに合わせて声を発した。どうにも自分は感情に左右されやすく、気分が昇ってしまうと音程を外してしまいがちになる。ただ白雪先生が言うには、声の出し方が初心者且つ数えて七歳児にしては大人顔負けで安定しているらしくものらしく凄く驚かれた。前世でのカラオケ経験がこんな風に生きるとは、なにが役に立つかは死んだ後も分からないものである。

して、授業が始まって十五分経過したころ自分は途方に暮れていた。白雪先生に限界が訪れたのである。先生はまさに教師の鑑だった。マイクを通した声のみが聞こえるヘッドフォンを当てて自分の声を真剣に確認してくれていたのだ。その結果、彼女は立ったまま安らかな眠りについてしまった。死んではいない。



「知っていました」

白雪先生の様子がおかしいとブースへと入ってきて自分を止めてくれた奈々子さんの第一声である。その顔は赤らんでおり、息も荒かった……急いで来たからだと思いたい。

「……ちよつと聞いただけでこれだけの威力ですか……花音あなたは本当に頑張りました。同じ女性として心の底から尊敬します……」

最近こんなことばかりしているためか彼女も慣れたもので、頼む前に小柄ではあるが大人の白雪先生を軽々とお姫様抱っこして、コントロール・ルームのソファに寝かせた。しかし随分と気持ちよさそうに寝ている。もしかして寝不足だったのだろうか、であれば自分の声が程よい子守歌になってしまったようだな。そういうことにしておこう。じやないと次の授業がすぐ頼みづらい！

「……残酷」

やめてくれ奈々子さん。その二文字は自分に効く。

とにかく声を自衛に使えるということは計らずとも証明できてしまったので、音程合わせを再開することとなった……これが本当の個人授業というやつか。今後どうなるか心配であるが、とりあえずは白雪先生の体調をみながらやっていくしかないだろう。願わくば明日も音楽の授業を受けたいものである。

## 春が終わり思いつくまで

結局、毎日自分の声を直で聞くとなると負担は大きく、白雪先生の心体が持たないとのこと、火と木曜日の週二日で行われることになった。慣れはじめたら日数は増えるとのことだが無理はしないでと心配したら、優しいと言って気絶仕掛けたので、今年中は無理だと思った。

それ以外の月水金では、音楽室は自由に使っていていいとの事なので、事前に白雪先生が考えてくれたメニューにそってポイトレを行う。コントロール・ルームに避難もとい機械操作をしてくれる奈々子さん曰く、極楽と奈落が同時に味わえる空間らしい。そこまでか？

そんな日々が続いてそろそろ春も終わり夏ももうすぐ。同級生はさらに人数が三人減った。ただ転校できたのは一人だけであり、二人は不登校になったとのことだ。白雪先生という素敵な担任がいるというのに全くもって勿体ない話である。

白雪先生は不登校になった生徒を気にしている様子であったが、電話一本或いは自宅訪問なんてしてしまえば、男子を狙う不埒な女扱いを受けるのがこの世界。警察に連行されかねないので心配するだけしかできないというのが、男子校教師の辛い所である。

まあ、紳士にあるまじきであろう黒いところを内心で吐いてしまえば、ちよつと話しかけたら、男に色目使っている痴女と言う暴言を吐くクソガキなんぞ、早めに聖学という名の男の監獄に転校して貰い、真つ当な大人になるまで幽閉されて欲しい所が自分の正直な意見である。

「……そういえばこの学校には行事がないのか」

てつきり春には遠足にでも行くと思っただのが話すら無かつたなど白雪先生にそんな質問をした。まあこの世界の男子事情を考えれば、複数の男を連れて外に遠出をするのは普通に危ないかと、ひとり得しかけた所に想像以上の事情を聞かされる。

「学校側としては、その月ごとの学校行事を決めてはいるんですが、生徒たちが参加せずに、そのまま転校してしまうので殆ど形骸化し

ちやつているみたいですよ」

紅校は、学級通り越して学校崩壊しているようだ。生徒が全員、居なくなるから学校行事が行えなくなるのは初めて聞いたぞ。という事は春の遠足も同じ理由で忘れ去られていたのかと問えば、そこは年端もいかない男子を外に出すなんてと自分の想像通りだった。

「なぜ、この学校が存続できているか分からんな」

「男子校を廃校にしてしまえば国の評価を下げることになり、ただでさえ男子に関する保護が遅れていると評価されている紅月国にとって大きな外交の弱みになってしまう。それに紅校が潰れてしまえば他の男子校四つは自分たちが最下位にならないようにと過剰な競争を行うだろう。だから他校としても国としても底辺の存在として『紅月男子小学校』は残したいんだと思う」

自分の疑問に獵哉はきちんと答えてくれた。やはり聡明ぐあいが小学生を超えている気がする。授業中の質問も自分では到底理解できぬ難しいことばかりで、白雪先生が言うには中学・高校で教えるようなことばかりと言う。同じ授業をしているのかと気になって授業中のことを尋ねてみれば。最近、動画を見終わった後、パソコンを使って自習をしているらしい。

「なぜそこまで勉強に励む？」

「どんなシンシとなるべきか、それを決めるにしても俺はまだまだ知らないことが多すぎると思った。だからたくさん勉強して色んなことを知ることから始めたんだ」

「……その考えに、心の底から敬服したい」

獵哉はかなり立派だった。立派すぎて逆に申し訳なくなるレベルであり、変に格好付けた「すげえ」としか言えなかった。なんて自分は小さい人間だろうと猛省するばかりである。ちなみに到自のほうは普通で、日本語で言うところのカタカナを覚えている最中である。

「なあ、今日の昼キャッチボールやろうぜ！」

そんな到自は、年相応に身体を動かして遊びたいと思った自分がなにげに誘った、ゴムボールでのキャッチボールを大変お気に召したらしく、自分のほうから誘ってくるようになった。その頻度、ほぼ毎日

である。

「すまないが、今から自分は白雪先生と個人授業だ」

「あ、そっか。じゃあ明日やろうぜ」

「それなら構わないが……そうだな、到自が良かったらだが、違うスポーツをしないか？」

「違うスポーツ!？」

こうやって誘ってくれるのは嬉しいが、遊び盛りの男子なので、こう毎日同じ事だと飽きるばかりである。どうにも到自は野球そのものに興味を持ったという訳では無く、身体を動かす遊びがキャッチボールしか知らないから、そればかりを選んでるように思えたからの提案だった。その予想は的中だったようで食いつきが凄い。

「本当か!?! なにをするんだ!?!」

「さて、体育館倉庫に色々あったからな、色んなことが出来ると思うぞ」

到自は玩具を与えられた子供、まあ子供なのは間違いない。到自は楽しみ過ぎて我慢ができず明日なんて言わずに今日行こうぜと言い出したのでやんわりと断る。しまったな。これなら明日遊ぶ直前に言えばよかった。

そもそも男子は小学校に入るまで家の中で過ごすものである。そのため子供の遊びといえはゲームとかであり、身体を動かした遊びというものを殆ど経験しない。到自も類に漏れずそんな生活を送っていたらしい。つまり中学生でも通じそうな巨体は本当に才能によるものだった。

事実、彼はスポーツの才能の塊である。なぜ数十回投げただけである綺麗なストレートを投げられるようになるのか、確かに前世で得た投げるコツを教えたが、小学一年生が投げていい玉ではない。途中から倉庫で見つけた子供用ミットグローブをはめ込んでキャッチャー役になり、到自の剛速球を受け止めては返球するのが、自分たちのキャッチボールである。もはや練習な気がする。

「へへ。こうやって色んな事をしていけば、オレもいつかは紳士になれるかな」

到自は今のところ普通に遊んでいるだけのような気がするのだが、動けば身体は自ずと鍛えられ、スポーツを通して精神も磨き上げられると考えれば間違っていないだろう。であるならば友人として、到自には色んなスポーツを体験して欲しいものである。もしその中から得難いものを見つけられるというのならば、友人としても本望である。

ただ最近考えてしまうことがある。天才的な頭脳を持つ獬豸に天才的な身体能力を持つ到自。まるで物語の主人公のようなハイスペックの二人の友人であることはもの凄く嬉しいのだが不安事があった。

どうにもこの二人、自分のことをもの凄く尊敬している節があるのだ。比べてしまえば一介の男子でしかない自分である。確かに自分が紳士という概念を教えたことで人生の転換があつたのかもしれないが、自分は尊敬されるような人間ではない。いや、尊敬されること自体は嬉しいのだが、二人の期待を裏切りやしないかと心配になるのだ。

だからか最近、紳士らしく振る舞うことにより念入りとなった。言葉使いはもう前世の時からどうにもならんが最近では姿勢、歩き方や動き方、それに食べ方なんかも優雅さを意識している。所詮は前世の知識頼りの独学だ。単なる無礼で言葉使いが偉そうな奴になつていないかと自己嫌悪に陥ることもある。

一介の男子でしかない自分が、果たして数年後、二人の友人として隣に立っているのだろうか。

とまあ、ひとりで悩んでも答えなんて見つかるわけではないので、家族の次に一緒の時間を過ごしているだけあつて、自分に慣れてフランクになつてきた奈々子さんに少々格好付けた言い回しをした悩みを打ち明けたのだが。

「……………え？」

ひと言だけ返され、運転中にも関わらず三度見された。その垣間見えた顔は「信じられない」とハッキリと書かれていた。そこまで？

「あの……………し、心配ありません。志亮様は男子の中でも特別の中の特

別。SSRです。だから志亮様にはゆつくりと成長をして頂いて貰いたく……はい」

慰めでというかは、もうなんか爆弾のボタンを押さないように慎重に言葉を選んで話す奈々子さん。妙な説得力に自分は難しいこと全部放り投げて納得することしか出来なかった。

——ま、まあ。どうやら自分は充分に二人の友で居られる資格はあるようだな……。ただ、紳士は手品とか推理とかボクシングとか熟練した一芸を持つ者でもあるし、早いうちに何か考えておいた方が良さだろう。

とは言うものの、最近念入りに行っていることと言えば読書かボイトレぐらいで……。ボイトレ……声……なるほど。

「——自分で曲を作って歌ってみるか」

「……志亮様？　いまとんでもないこと言いませんでしたか？　志亮様？　気のせいで無ければ大量崩壊兵器を作るみたいなこと言いませんでしたか？……志亮様？　聞いていますか志亮様？」

「明日、白雪先生に相談しないと」

「……すみません花音。私では止められません。せめて幸福に満たされながら逝く事を願います」

すでに前世の音楽を思い出しながら、どんな歌を作ろうか悩み始めた自分は集中しすぎてしまい、奈々子さんが何か言っているのに全く気がつかなかった。

## 夏休みから暑さに負けかけるまで

学校生活はじめての夏休み。自宅の冷房が効いたりリビングにてアイスを食べるという充実した生活を送れているが、はつきり言って退屈である。なにせ校内限定であるが、外の世界を知ってしまったのだ。年頃の男子として外で遊びたい欲求が勝ってしまう。

7月冒頭から8月末まで、ほぼ二ヶ月休みとは長すぎる。夏休みの宿題が無いのは正直ありがたいが、碌に外に行くことができないというのに、なにをそんなに遊べというか、学校も完全に休校であり自主練もできない。仕方ないので私室で鼻歌を奏でていれば偶然通りかかった姉か母が廊下で倒れる事件が勃発。自分の周辺人物、気絶しすぎである。

「志亮ちゃん……それは……人類には早すぎるよ……がく」  
「弟が……至高すぎて……ぐふっ」

とまあ、自分の声はきちんと当初の目的である自衛効力をきちんと発揮してしまい。姉や母を私室に引きずりこんで看病するハメになってしまう。それからと言うもの曰く天使の歌からの天使の看病コンボに変に嵌ってしまったらしく無駄に家族が私室前廊下を意味も無く通り過ぎるようになり、流石に注意したほうがいいのではないかと検討中である。

なお、自作の歌作りに関しては白雪先生に止められている。理由としては人類に早すぎるとか母と同じ発想である。さすがに納得するわけにもいかず。まともな理由が欲しいと追及してみると歌を作るにしても作詞作曲は簡単にできるはずもなく、作るにしても準備が必要だと言われてしまい、そりやそうだと納得する。

不味いものでいいのならば作詞は出来そうだが作曲はてんで分らん。前世でも憧れはあったが精々ゲームセンターで太鼓を叩くぐらいで終わってしまったのが悔やまれる。

ただ、落ち込む自分を見て白雪先生がもう少し個人授業を頑張ってくれたら、プロで音楽をやっている友達に連絡して曲を作ってくれるか頼んでみると約束してくれた。予想外すぎるあまりの贅沢話に今

度は自分が慌てる番となる。

プロに頼めるほど神詩家は裕福ではないと断ろうとすると、あくまで話を振るだけだからと前置きをして、友人の事を語る。なんでも学校時代から沢山の依頼が舞い込んでくるほどの才能を持つ友人はかなりの職人気質らしく、一定以上の実力がある歌手でなければ例え男子でも受けないという。

しかし、その実力を認められて曲を作るとなれば、多少の融通をきいてくれるのでお金の心配はしなくていいそうだ。最後にぼそつともしもの時は借しがたくさんあるのと呟く白雪先生の表情はとつても黒かった。

もしかしたらプロにオリジナル曲を作って貰えるかもしれない。そんなご褒美を目の前にぶら下げられては努力しないわけには行かず。一層ボイトレに励んでいたところで夏休みである。タイミングが悪すぎて学校行きたいと不機嫌になってしまったのは家族にとっても申し訳なかった気がする。

それと長期休暇にて自分よりも遙かに憂鬱になっていたのは猟哉と到自である。猟哉の場合は家族とは仲が悪く、その代わりと云っていいほど充実した学校生活、到自のほうは運動する楽しさを覚えてしまったことで家にいることが凄く苦痛らしく、休み始まって三日目にて限界お気持ちメールが届いた。

これは早急に二人を誘って外で遊ばなければならぬと迫真に奈々子さんに相談した所、三人の男子を護衛するには自分だけと流石にキツイとのこと、逆に言えば『男衛』が人数揃っていれば可能という言質をとった。

「え？ いや、そういうわけじゃ……あ、もう聞いてないんですね」というわけで、和車家は養子を八人も引き取れるほどの裕福な家なのだ。金はあるだろうと猟哉に、そのことを電話で伝えると数日掛かるかも知れないがどうかしてみると覚悟が籠った返事をしてくれた。よほどストレスが凄かったらしい。なお到自に関してはもう暫く我慢してくれとしか言えなかった。南無三。

ちなみに奈々子さんは自分が一人で留守番している間、玄関前で門



番をやってくれている。暑いところでずっと立っているなんて見ているこっちが辛いと、家に招き入れたいのだが、さすがに誰もいないとはいえ、家族が暮らす家に、まだ他人でしかない奈々子さんを自宅に入れ込むのは不味いと自重している。

せめてエンジンを付けた車内に居てはと言ってみただが、そこはプロの『男衛』。なにかあった時に動きが遅れてしまう可能性があるかと頑なに断られた。そんなわけで毎日麦茶とアイスの差し入れを欠かさず、学校の登下校と同じく適当に会話をするのが日課になっている。

「私。世界で一番幸せな『男衛』です……はむ」

しかし、変わらずパーカー姿で直立不動のすまし顔の奈々子さん。日に照らされて汗垂れながら棒アイスを嘗めるさまは、なんともまあ最高のひと言であり、あと五歳年食っていたら我慢できなかったかもしれない。じっと見られて恥ずかしそうにしないでくれ、まだ責任取れないんだ。

「え、あ、あ、あの……シャツが汗で……その、は、肌がっ……！」  
こちらが見ていたら、あちらも見ている。いま着ているシャツは長袖ではあるが夏用はかなり薄い白生地で出来ている。なので額に浮き出た汗をこっそりシャツで拭っていたこともあつて素肌が若干浮き出てしまっていた。それに気付いた奈々子さんは分かりやすくテンパリ、隠してくださいとやたらカチャカチャと鳴るパーカーを、止める暇がないほどの早業で脱ぎ、自分に渡してきた。

初めて見る彼女のパーカーを脱いだ姿。黒で統一されており正しく動きやすい格好だった。下から順にレギンス、ショートパンツ、ホルスターと拳銃のようなもの、スポーツブラ。つまり腹出し首出しうなじ出し。さつきまで通気性の良いとは思えない長袖の企業パーカーを着ていたためか全身から汗が滴っている。神よ改めてこの世界に転生させてくれた事に感謝しよう。

「あ……も、申し訳ありませんー！」

紳士的にガン見している自分。その見ている視線を追って奈々子さんは己の行いに気付いたらしく、しゃがみ込んでパーカーをタオル

のように扱いは前を隠す。恥ずかしいから顔を真っ赤にしている。という事ではなく、その逆、顔を真っ青にして絶望していた。

この世界の事だ、パニックの故の善意的行動とはいえ己の汗が染みついた衣服を異性に着させると言う行いはセクハラ。つまり完全にアウトなのだろう。見つかったら職を失うだけではなく、彼女は重犯罪者としてこれから生きていくことになってしまう。自分からすれば全裸で襲われてもいないのに大袈裟など思うが……まあ、これに関しては地球のほうでも人それぞれか。

「ち、違いますこれは……!」

言い訳のひとつでも言ってくれれば、そうかと済ませて平和的に終われると思うのだが、あまりの動揺に言葉が出ない模様。こんな風に奈々子さんを追い詰めてしまったのは、薄着のシャツで居た自分の完全な不徳である。もう何度目かになる謝罪を口にしたいがそれでは解決しないだろう。であるならばと自分は奈々子さんのパーカーを握る。自分のために貸してくれるなら遠慮無く使わせて貰おう。

「え? あ、あの?」

自分の行動が理解出来ず呆然としている奈々子さん。パーカーはするりと彼女の手から離れ自分の……重お!?

「こ、志亮様?」

「……奈々子さん」

「は、はい!」

奈々子さんのパーカー。その裏側には色んなものが仕込まれているらしく持ち上げることができず地面に落ちる。自分は少し考えて何喰わぬ顔でパーカーから手を離し、しゃがみこんで身長的にはほぼ同じになった奈々子さん本人に正面から抱きついた。ヤバイくらい良い匂いがする。

「こ、こころささまままま?」

「奈々子さんの行動は全部、自分のためであると理解している。ありがとう」

もはやバグってしまった奈々子さんの耳元で日頃思っている感謝の言葉を鍛え上げられたイケボで送る。

「できることならこれから末永く自分の傍にいて欲しい。もう奈々子さん無しの人生は考えられないんだ」

「——志亮様あ……い！」

完全に蕩けきった声で自分の名前を呼ぶ奈々子さん。自分も匂いに当てられてか息子こそ反応していないものの、なんかもうどうにでもなれと雑な覚悟を決めると、奈々子さんは申し訳ありませんと自分を引き剥がして立ち上がった。パーカーを脱ぎ捨てたまま母の隣に駐車してある会社の車に乗り込むと、エンジンが掛かる音がしたので、もしかしたら何処かへと行ってしまおうのかと慌てる。

しばらく様子を見ていると動く気配がないので、恐る恐る背伸びして窓を覗けば、運転席で奈々子さんがエアコンの吹き出し口に頭を向けて強風に当たっているのが見えた。窓に触れるとひんやりしており、つまり冷房を全開にして車内を冬並に冷やしているようだ。

……彼女は夏の暑さに身を任せるよりも、仕事。いや、自分の安全を守るためにこのような行動に出たと理解して、そのあまりのプロ根性に涙が出そうになる。

加害者である自分にできることは、彼女が落ち着くまで距離を置き、そつと見守るだけしかないと言葉がゆい気持ちになりながら自宅へと戻ることにする。……いつもとは違った匂いがするシャツ。洗うのがなんか勿体ないなと思いつつも暑さに負けぬように麦茶を飲むことにした。

まだまだ夏休みは始まったばかりである。

## 緒口奈々子の気苦勞 その1

『アカスズメ男子護衛会社』の社内休憩所にて緒口奈々子は深いため息を吐いた。蓋を明けた缶ジュースの中身は減っておらず、眉をひそめて難しそうにスマホを操作しているさまは誰がどう見ても困っている様子だった。

「あれ？ 奈々子じゃん。おひさー」

「……矢地」

「なんかもう見たまんま悩んでいるご様子だったけど、どしたの？」

そんな奈々子に声を掛けたのは『高崎<sup>たかざき</sup> 矢地<sup>やち</sup>』。専門学校時代からの同期であり、授業などではコンビを組むことが多かった。

「やっぱりEランクのお仕事は大変？ 奈々子は私たち『男衛』の中でも特に理性が強いから癩癩に付き合わされても辛いだけでしょ。護衛対象とは上手くやっていける？」

「……」

新人は三年仕事にありつけない男衛業界。そのため同期は血で血を洗う関係になりやすいのだが、矢地は友達として純粹に奈々子の心配をする。

矢地から見た学校時代の奈々子は、一匹狼で成績は優秀だったが自分の事となると無機質で孤独な二歳年下の女の子だった。このまま自分が話しかけないと、ずっとひとりじゃないかと思ひ、矢地は彼女に話しかけた。それからというものの矢地にとつて奈々子は天才の名を欲しいままにする同期であり、頼れる友達であり、そして目が離せない世話が掛かる妹みたいな子だった。

「どうしても駄目だったら仕方ないと思うけど、『男衛』辞める前に私に相談してね」

目を逸らす妹的存在にやっぱり護衛対象である男子と上手く行っていないのかと矢地は考えるが、それは勘違いであり、奈々子は条件反射的に神詩志亮という存在を同業者に知られたくないという独占欲から黙秘権を行使しただけである。男が絡めば女性同士の友情なんて夢いもの、奈々子もまたこの世界の女子であることに変わりな

かった。

「そ、そういうえば矢地は今日休みなんですか？」

「今日、というかはしばらくは仕事しないでおこうかなって」

露骨な話題逸らしに矢地は気付かず自分の現状を話し始める。

「なんて言うのかな……男性を護るのが仕事なのに、やっている事って単なるパシリばっかで……学校でも実際の現場はこうなんだよって教えられていたけど……仕事のギャップに心が付いていかなかったちやっつてね」

『男衛』は男性を傍で護衛する職業であるが、護衛対象である男性がその通りの扱いをすることは希であった。先輩の付き添いで連れて行って貰えた仕事先での矢地の扱いは使用人に劣る小間使いである。近くのコンビニでお菓子やジュースを買ってきて、言われたものを買ってきてでも気分次第ではこれじゃないと怒鳴られる。そうやって尽くしても外で走り回っているだけなので護衛対象には覚えて貰えず。別れる時には「ああ、まだいたんだ」と言われる始末。憧れが何も変換できずに消費されるだけの日々になんて自分は『男衛』をやっているのだろうか毎日考えるようになってしまった。

「矢地……」

専門学校時代に矢地が『男衛』を目指した理由を聞いていた。それはありきたりと呼べるものであり、テレビのCMで男性を護る『男衛』がとても格好良く、そして男性にあれだけ近くに居られるといったものだった。男の罵倒はご褒美と言い続けてきた矢地がこうまで弱っているとは、仕事先での境遇の酷さ、そして先輩が矢地を仕事先に連れて行った理由がスケープゴートだという事が嫌でも分かっていた。まった。

「愚痴言っちゃってごめんね。奈々子もEランクの仕事で大変だろうけど頑張つてね！」

「あ、はい……」

確かに奈々子は大変な思いをしていたが、それは矢地が想像しているのとは完全に真逆の意味である。

神詩志亮の護衛は幸福に満ちあふれていた。まず前提として奈々

子にとって志亮は、不能と危ぶまれていた自分を救ってくれた救世主である。そして女性であるのに、とても優しく、尊重もしてくれて、我儘も言わないどころか学校内では自分も食べられるようにと食堂と掛け合ってくれて、夏休みに入れば自ら毎日欠かすことなくアイスと麦茶の差し入れをしてくれる。極めつけは自分のことを素敵な女性といい、一生傍にいて欲しいと言ってくれるのだ。女性として産まれた以上、誰もが夢を持つ理想の男性の傍で仕事ができることに、奈々子は毎日が夢見心地である。

この間なんて、夏の暑さにやられてセクハラから職務放棄まで完全にアウトなことをした自分をお許しになつてくれたのだと、奈々子は、その時の事を思い出しては忠誠心を勝手に上げていつてる。

まあ、『男衛』冥利に尽きることはあるが、自分や心の友である紅校の教師、白雪花音に対して甘い言葉を囁いてくれるのはご褒美がいの何でも無いけど、ちよつと手加減して欲しいなと思つていたりもする。遠慮されても嫌なので直接言つてはいない。

「……あの、矢地、でしたら私の仕事を手伝つてみませんか？」

「手伝う？」

「ええ、実は私が受けている護衛対象者が今度お友達二人と遊園地に行くことになりました、その護衛のために人を集めている最中なんです」

奈々子は隠し通すつもりであったのだが、罪悪感から矢地を誘う。事の発端は志亮の無茶ぶりからであった。同級生である狛哉と到自の三人で外で遊びたいのだが、なにか良い方法は無いかと相談を持ちかけられたとき、キリツとした真面目な顔にやられて、ほぼ無意識に単独では無理だけど『男衛』複数人いたら外で遊ぶことも可能かも知れないと言ってしまったのだ。

それから止めても聞いてもらえず。話はトントン拍子に進んでしまい神詩志亮、和車狛哉、灯元到自の三人は和車家が保有する遊園地にて遊びに行くことが決まった。ただし遊びに行くには『男衛』の面で問題が出てきてしまった。報酬や費用は和車家が全額出してくれるとの事だが、こちらの方で最低でもあと五人『男衛』を見つけなけ

れば行けなくなったのだ。

そして現在、難しいならまた別の方法を考えようと言いながらも残念がる志亮に奈々子は私かなんとかすると見栄を張ってしまった。しかし、奈々子は知り合いなんて、それこそ矢地しか居ないし、元がEランクなため同僚の反応は冷たく、今の自分の評価は後先考えずに仕事を受けてしまった愚かな新人でしかないため、話をまともに聞いてくれる人はいなかった。上司に相談は論外であるため八方塞がりの状態で期限は後二日に迫ってしまっていた。

そもそもつい前日まで矢地は現場入りしていたので、私情を抜きにしても話を受けてくれるとは考えにくく、奈々子は当初から選択肢に入れていなかったのだが、今にも『男衛』を辞めてしまいそうな友人に黙って見送ってしまえば流石に目覚めが悪すぎると気持ちを変えて話を振ってみる。

「んー。誘ってくれたのは嬉しいんだけどごめんやっぱ疲れちゃって……」

「そうですか、分かりました。無理を言っすいません」

……とはいえ、本人から断るのならば引き留める理由はないので話を終わらせに掛かる。恨むなら友達の誘いを断った自分を恨むことですねと心の中で両手を合わせる。男が関わると女の友情なんてこんなものである。

補足すれば、矢地は定員1名だけだからと、先輩に誘われた時にそう言って入社したばかりで右も左も分からなかった奈々子のことを置いて行っていたりしたので。過去にやられているからやり返しているの態度だったりもする。

「それに男子が三人って言ってもみんなEランクでしょ？　ちゃんと仕事できる自信はないかなー」

「志亮様はそんな人じゃありません」

「……ん？」

Eランクの依頼は地雷。それは『男衛』にとって常識であり矢地にとって単なる軽口でしかなかったのだが、忠誠心が爆上がりしている奈々子にとって己の主人を馬鹿にしているように聞こえてしまい、別

のスイッチが入ってしまう。

「……私のご主人様はSSRです」

教えたくない気持ちとは裏腹に——奈々子はすごく我慢していた、  
ようは自分のハッピーをめちやくちや自慢したかった。男性関係で  
女性が同性に対してマウント取りに行くのも、この世界では割と当た  
り前である。奈々子はスマホの画面が見えるように矢地の前に出す。  
「ご主人様ってなにを言って……」

矢地はスマホに映し出された写真を見て思考を停止させる。それ  
は夏休みに入った直後、会える時間が少なくなりますねと寂しそうに  
していた奈々子に、ならばと志亮がプレゼントとして送ってくれた  
狂気<sup>至高</sup>の一枚。志亮本人の自撮りである。上45度から撮られている  
少年は視線を凜々しくしながらも優しく微笑みを浮かべている。そ  
の奥には運転中の奈々子が写っており、事実上のツーショット写真と  
なっていた。

本人はこれで寂しさを紛らわせてくれれば嬉しいと冗談半分に  
送ったのだが、奈々子にとっては国宝級の品物である。A3サイズに  
現像してラミネート加工した写真を額縁に飾り、毎日起きる時と寝る  
時に手を合わせて祈りを捧げていた。本人は温度差にまだ気がつい  
ていない。

「……奈々子。い、意外ね。あなたがこんな合成写真を作るだなんて  
……」

こんなイケメン男子。現実には居るわけないと矢地は写真は偽物で  
あり、この写真に写っている男子は何かしらのアプリを使い、奈々子  
がとち狂って生み出したイマジナリー男子だと結論付けるのだが、  
奈々子はそんなことしない系女子だと家族よりも理解しているのが  
矢地だった。

「神詩志亮様。私の護衛<sup>ご主人様</sup>対象です。ちなみにコレは盗撮写真じゃあり  
ません。夏休み入って寂しいと本音を零してしまった私のために志  
亮様がプレゼントしてくれたものです」

「嘘だ！ ぜったい嘘だ！ そんな漫画みたいな男子いるものか!？」

先ほどの嘘を吐かないという評価はなんだったのか矢地は魂の奥



底から叫んだ。奈々子はあまりの優越感に深い鼻息をする。表情筋が死んでなければにんまりと笑っていただろう。

「……奈々子、そういえばさつき人手が欲しいとか言っていたよね？」  
「敬称が抜けていますよ？」

「ぐざぎざ……奈々子さん、お金はいりません！ 仕事中は奈々子さんの命令に一切逆らいません！ なのでどうか私に奈々子さんのお仕事を手伝わせてください！」

「嫌ですよ。さつき断ったじゃないですか」

「くけー！」

奇声を上げて十数秒まえの己を呪いはじめる矢地。学校時代から男子に関係することでやたらうざがらみされてきた奈々子は、はじめに矢地に勝つたと小さくガッツポーズをする。あと冗談でもなんでもなく、嫌なのは本音だったりする。男子が絡んだ女性は（以下略）。

「……奈々子様、借り一、いや二でどうでしょうか？」

「借り三。あと信用のできる『男衛』を四人、最低でも二人見つけてきてください。期限は二日です」

「わかった！ すぐに見つけてくるから待っててね〜！ 絶対待っててね！」

しかしながら、志亮たちの外遊を成功させるためには数人の『男衛』を集めないと行けないのは確かなので、ここぞとばかりに恩を着せながらも自分の苦手な作業を全部押しつける。これくらい強かでないかと、志亮をひと目見ようとあわよくば情熱を捧げようとしている女たちに情報戦で勝利し続けていない。

矢地はダッシュで何処かへと行ってしまったが、彼女の交流関係の広さを知っている奈々子は、これで志亮の期待を裏切らなくてすむと安堵しながらも、矢地に志亮の事が知られたことに本当にこれだけよかったのかと頭を再度抱える。

矢地は高校から専門学校に転入してきただけあって頭もよく、総合成績も1位以外の1桁台を常にキープしていた。特に身体能力に関しては圧倒的だ。しかし理性試験のほうはギリギリであり、理性が一般女性に近しいため、果たして志亮を前にして彼女の理性が耐えられ

るかどうか。

最悪の場合は友達として問題を起こすまえに葬ってあげましょうと決意を露わにしながら、彼女の能力をなにひとつ疑ってもいない奈々子は、先んじて志亮に結果報告の電話を掛けた。ちやっかり自分だけ褒めて貰えるようにと。

## 遊園地当日から出発するまで

約束の時は来た。今日は兼ねてより楽しみにしていた遊園地に遊びに行く日である。

男子が夏休みのテーマパークに遊びに行くというのは、この世界では普通ではないが普通らしい。どういうことかと言うと、数千から数万単位の女性が居るであろう場所に好んで遊びに行く男は殆ど存在しないが、金を持っている男の中には自分が遊びたいからとテーマパークを丸ごと貸し切りにするところがあるそうだ。これは海外の話になるが、地球で言うところのアメリカーナを題材にした某なんたらランドに匹敵する巨大テーマパークを二ヶ月貸し切りにし続けた事もあるようで、紅月国でも稼ぎ時であるはずの長期休暇で前触れもなく休みになるときは大体そんな感じらしい。

自分には縁の無い話。他人事だと思つて、そこまで遊びたいものかとテレビにツッコミを入れていたのだが、当事者となつたいま遊園地を貸し切りで遊べるという現実に気持ちの昂ぶりが抑えられない。

なんとも太っ腹な話で狛哉が義親に相談したところ、和車家が保有する遊園地の一日遊び放題のフリーパスと園内の飲食物完全無料。交通費から男衛費まで全て負担してくれるという。国有数の金持ちすごい。

ただ、急な話だったため和車家のほうで『男衛』を用意できなかったらしく、自分たちの安全のためにも都合が付くまで待ったほうがいいかもしれないという話になりかけたのだが、残念がる自分を見て奈々子さんが伝手を頼つてみると名乗りを上げてくれた。

その結果。どうにかなりそうという事で予定通りの日に遊園地に行く事となつたのだが、現在進行形にて奈々子さんは心底申し訳なさそうに頭を下げて謝罪してきた。

「すいませんでしたあああああ!!」

そして、その隣で女性が夏の太陽によって熱されたアスファルト道路で土下座していた。まったく見覚えのない人に全身全霊で謝罪される日が来るとは、二度目の人生は退屈とは無縁である。

「とりあえず。綺麗な肌が焼けてしまつては自分も辛い。立ち上がつて事情を話してくれないか？」

「は、はい……え？ 優しい、現実？」

「その気持ちはもの凄く分かります」

奈々子さんと同じ赤雀のエンブレムが刺繍されたパーカーを着ている女性の名前は高崎矢地さん。短く整えられたくせつ毛が目立つ茶髪。奈々子さんに比べると身長が頭二つ分大きいものの、どこかあどけない印象を受ける。奈々子さんの学校時代からの友人であり同じ会社に所属する『男衛』とのこと。どうして謝られるのか自発的焼き土下座をやめさせて事情を聞くと、なんでも今回、自分たちを護衛する仕事に就かせて貰う代わりに『男衛』集めを担当したのが矢地さんのだが先輩や同期には悉く断られてしまい、呼べたのは謝る後ろで縮こまつている二人のみだったかららしい。

「ふむ。そちらのお二人は？」

「私たちの後輩です。まだ専門学生で……職場体験という形で無理を言つて来て貰いました。志亮様に自己紹介を」

「も、本島もとしま美並みなみと言います！」  
「本島もとしま榎並かのみ！ です！ 学生なので未熟ばかりの自分たち姉妹ですが命を賭けてお守りしたいと思いません！」  
「です！ あと五月に15歳になりました！ 末永くよろしくお願いします！」  
「今の姉の言葉は聞かなかつたことにしてください！」

オレンジ色のショートヘア。名字と似た容姿から察するに双子なのだろう。年齢的にもまだまだ子供の面影が強い。本人が望めば中学二年目から中退して専門学校に入学することができるのは奈々子さんから聞いていたが、日本で培ってきた常識があるせいで中々感慨深いものがある。奈々子さんのように16で新社会人になつている女性のほうが多い世界だ。これからも十代社会人に会うことは多いだろうし、できるだけ早めに慣れよう。

それにしても、まだ専門学生である彼女たちを現場入りさせて色々大丈夫なのだろうかと奈々子さんと矢地さんのふたりに視線を送ると。今にも消え入りそうな表情になつたので、できれば使いたくない

かった裏技を使用したことだけは分かった。ともあれ自分たちのためにしてくれた行為なのだ。なにか問題が出たさいには自分が無理言ったらと訴えかけよう。

「美並さんに榎並さんか、今日はよろしく頼む」

「は、はい！」

「それで志亮様。この通り最低人数は確保できましたが、素人同然の学生二人に私を含めて新人が二人です。粉骨碎身の覚悟でお守りいたしますが、場合によっては苦勞を掛けてしまうことになるかと……」

「構わない。自分たちからすれば今日遊園地に行けなくなるこのほうが問題だ」

「獵哉も到自も楽しみ過ぎているらしく、中止となつたらどれほどショックを受けることやら。であるため獵哉たちも多少のリスクがあつたとしても遊園地に行くことを選ぶのは確信しているので、勝手に二人の意思を代表して伝える。」

「これからの予定としては獵哉と到自の家まで迎えに行き。そこから距離的にはそれほど遠くは無いため休憩を挟まず高速道路で一気に遊園地に向かうとのことだ。『男衛』の四人は出発予定時刻まで会議をするらしく自分は先に助手席に座り時間まで待つ……という風を装い。『男衛』たちが一体どんな話をするのか気になって車の陰に隠れて、四人の会話を盗み聞きする。」

「やばい。本当にやばい。本人が写真で見た以上にイケメンで性格も素敵がすぎる。二次元から飛び出してきたとしか思えない。ほ、本当にEランクの護衛対象なの？」

「志亮様の前でランクのこと言ったらぶん殴りますよ」

「ごめんなさい」

「で、でも本当に格好良い。あんな男性初めてみるよ榎並もそう思うよね!」「美並姉さん……まあそれは否定しませんが……」「それにあと二人も居るんだよね? その人たちもすごいのか?」

「ご友人の方々も信じられないほど素晴らしい男子たちです」

「男の人って聞いた話と全然違って、あんなにも素敵なんですわね！」

『男衛』を目指してよかった……」「いえ、恐らく神詩志亮様が特別なだけかと」

「まじそれな。こういつたら悪いけど私が護衛してきた男性たちとオーラが違いすぎる……ねえ、奈々子。今からでも応援頼んでみる？ 他会社にいった友達にはまだ声を掛けてなかったから、もしかしたら来てくれるかも」

「どちらにせよ。耄碌している老害たちが作ったランクの所為で結果は変わりませんよ。頭悪いこと言われて断られるのがオチです」

「私の時みたいにも、あの写真を見せればいいんじゃないの？」

「あれは特例です。本来ならば独占して墓場まで持っていくつもりでした。そもそも志亮様のこと極力知られたくない……」

「だよねー。あーあ。先輩たちも勿体ないことするなー。私だったらお金払ってでも護衛するのに……不安になってきた、やっぱり五万圓ぐらい貢いだ方がいいかな？」

「やめてください」

なんか会議の内容が想像と違う、まあルートやポジションは事前には話し終えていたのだろう。それで今は時間が余ったから他愛もない会話をしているのだ。そういうことにしておこう。

しかし、どうにも『男衛』が集まらなかった根本的な原因は自分にあるようだ。会社から格付けされたランクが低いから、報酬を期待できずに断られ続けたといったところか。奈々子さんに直接聞いたわけではないので、風の噂程度になるが依頼のランクは主に報酬の額が関係していると聞いた。裕福とは言えない我が家庭。Eと付けられるのも仕方がないのだろうが、お金を出してくれた母がバカにされているようで正直面白くないという気持ちになってしまう。

金か、小学生の間は考えるだけどうにもできないだろうと思っていたが、やはりどうにかしたほうがいい気がする。奈々子さんを雇う金も毎年バカにはならないだろうし、日によっては夜遅くまで働く母に物入りがまだまだ多い姉に負担を掛けているのは本意では無い。小学生でも稼げる「何か」も探したほうがいいのだろうか。

「——それでは気合いを入れて行きましょう！」

「はい。」

まあ今日は遊園地で遊ぶ特別な日だ。お金については後日考えることにしよう。円陣を組んで気合いを入れる奈々子さんたちは話が終わったらしく、自分もそれに合わせて車に戻ると、連鎖的なタイミングで奈々子さんと美並さんが車に乗ってきた。矢地さんと榎並は二台目の車のほうで、そちらに猟哉と到自が乗る予定である。

「あれ？ 助手席なんですか？」

「悪いが指定席でな、代わりに自分の背中を護ってくれないだろうか？」

「——は、はい！ 美並お姉ちゃんにお任せください！」

「美並。早く乗ってください」

心臓を捧げる系のポーズをしたまま車に乗ろうとしないので先輩から注意される。先ほどの会話を聞く限り、彼女の方が双子の姉にあたるらしく性格は楽天的なようで、妹の方は冷静でしっかりものといった所だろうか。瓜二つな容姿でありながら見事に正反対の印象を受ける。

「それでは出発します」

「改めて、苦勞をかけると思うが今日一日よろしく頼む」

「お任せください。志亮様の『男衛』として、楽しい思い出だけが残る日に見せてみます」

「はい。美並お姉ちゃんもすっごい頑張りますからね！」

——本日は晴天なりて、二台の車は動き出した。今日は始まったばかりである。

出発してから遊園地に到着するまで

灯元家は結構近く、出発してから十分も経たずに到着した。

奈々子さんが、先んじて連絡を入れていたように、到自はすでに外で待っていた。その隣には到自の母親らしき女性がおり、その表情から心配が見て取れる。

「おはよう」

「よう！ やつと着いたか！ 待ちくたびれちまつたぜ！」

到自は母親から何かを言われ続けており、鬱陶しそうにしていたのだが、自分たちの車が家の前で停車すると持ち前の瞬発力で、すぐさま後部座席に乗り込んできた。

「なあ、早く猟哉拾って遊園地行こうぜ！」

「まあまで」

奈々子さんが到自の母親に大事な息子を預かりますと挨拶しにくくと何やら話し始めてしまった。それが終わるまで出発はできないと告げると、到自は母ちゃんマジで話長いんだよなど不満げに口を尖らせる。なんでも待っている間に延々と同じ注意を聞かされていたらしく、鬱陶しかったとのことだ。男を差し引いても大事な子供。親として心配になるのは分かるが限度を超えてしまっているようで、そんな大事な子供の強いストレスになると本人は気付いているのだろうか？ 手遅れになる前に灯元親子の関係が改善されることを密かに願う。

「それに到自が乗るのはあっちの車だ」

「別にどっちでもいいだろ」

「そうは行かない。なぜなら、このままだと美並さんが持たないからな」

「す、スポーツ系美青年が私の隣に……あ、汗の臭いやばい……やばい……」

唐突に到自が乗り込んできたことで美並さんは避難するチャンスが与えられず、口元を押さえて隅っこに縮こまってしまった。どうにも到自の汗の臭いを嗅いでしまったことで、理性があじやぱーになり



かけているらしい。

「ん？もしかして話に聞いていた『男衛』か？今日はよろしく頼むぜ！」

「ぴえ」

ちなみに到自も猟哉も、自分が連れてきた『男衛』だからというのはあるのだろうが、紅校で白雪先生や食堂の婦人方たちと触れ合っっていくうちに女性にある程度慣れてしまったのか、今では自発的に挨拶もするし、女性だからと言って無闇に怖がることはなくなった。

まあ、今回はその成長が悪いほうへと向かってしまったようで、到自は美並さんに親指を突き立てて笑顔を送った。中学生に見間違う体格に綺麗な白歯によるさわやか青年スマイルの直撃を受けた美並お姉さん。すでに限界寸前である。

「到自。ただでさえ無理を言っ来てくれたんだ。彼女たちの仕事の邪魔になるような行為は控えてくれ。でなければ最悪の場合遊園地にも行けなくなるぞ」

「まじでか!? ごめんな！」

「い、いえ。むしろありがとうございまひゅ……」

遊園地行きが中止になるかもしれないというのがよほど効いたのか、到自は大人しく車から降り、二号車に乗り込んだ。ちなみにあちらは、きちんと前に『男衛』、後ろに護衛対象つまり到自と猟哉が乗り込む手筈となっている。

「……大丈夫か？」

「も、問題ないでしゅ……です……せ、先輩は毎日これを耐えてるの？わたしやつていく自信がないよ……」

「ふむ、そう言わないでくれ。事情があったとはいえ、それでも奈々子さんたちが選んだのだ。少なくとも自分は二人のことを信用している。どうか自分たちを護つてくれ——美並お姉さん」

「——お、お……おねえちゃんがんばりやきゅ！………うう」

……まずい。ついうっかり奈々子さんのノリでやってしまった。彼女ならば慣れてきたということもあり顔を赤らめて恥ずかしがるだけで終わるのだが、未だ雛鳥の美並さんには刺激が強すぎたよう

だ。

まあ彼女も学生の身とはいえプロだ。なにかあつたら起きるだろう。緊張で夜眠れなかったようだし、今は寝かしておこう。

「なにやってるんですか……」

お眠した美並さんを見て、全てを察したのか呆れた視線で自分を見つめてくる奈々子さん。ちよつと待つてくれと、トドメ以外は到自がやったと責任の分散を図ったのだが、結局トドメを刺した自分が十割となつてしまった。さもありません。

十十

猟哉が住む超高層マンションへと到着。話に聞いていたが35階のマンションビル。この周辺では最も高い建物であるため最上階はさぞ景色が良さそうだと、しみじみ見上げる。なおその最上階に住んでいる人こそが猟哉である。

和車の実家は首都にあるらしく、紅校に通うためにわざわざ親が買ったそうだ。借りたではなく買ったのである、金持ち凄い。ただ使用人は居るものの家族が居ない環境で日々を過ごし、かと思えば夏休みには実家に強制的に戻されて仲の悪い兄妹たちとの生活を余儀なくされる。知れば知るほど猟哉に対して同情してしまい、今日は是非とも楽しんで欲しいと心から願う。

自分も興味があると奈々子さんと共にマンションの出入り口付近で待つ。本格化してきた夏の熱さを我慢して待つてみるが降りてくる気配がない。

「遅いな?」

「いま降りると返信はありましたが、なにかトラブルでもあつたのでしょうか?」

「もういちど連絡を……つと降りてきたようだな」

階層表示灯が動き出したのを確認し、もう少しだけ待つとエレベーターが開き猟哉が現れた、沢山のメイドと何か言い争いをしながら。予想外の光景に驚いていると、メイドたちの代表っぽい、黒髪を三つ編みにしている二十代ほどの眼鏡メイドが、猟哉に対して訴えかける。

「——獵哉坊ちやま！ やはり心配でなりません、私たちもご同行しますー！」

「メイド長。何度も言っているが待機命令が出た以上。このマンションの外に出るのは命令違反になる。もしもそれがバレたら、君たちは辞めさせられてしまうかもしれないんだぞ？」

「ですがっ！」

「甲羅のエンブレムにメイド服。『クロカメ』の『男衛』たちがこんな……」

奈々子さん曰く、獵哉に付いていくと言って断わられ続けているメイドたちは『クロカメ男子護衛会社』に所属する『男衛』たちとのこと。護衛業以外にも奉仕業に力を入れている会社らしく、専門学校にて護衛科と共に奉仕科でも高い成績を残さないと就職できないことと有名のようだ。戦うメイドが実在するとは。ここは異世界であると強く実感する。

「獵哉」

「志亮。すまない遅れた」

「構わない、それよりも彼女たちは？」

「……和車家で雇われて、俺の世話をしてくれているメイドだ」

「これはご挨拶が遅れて申し訳ありません。わたくしたちは獵哉坊ちゃんに従う男衛<sup>メイド</sup>。そして、わたくしはメイドの長<sup>わき</sup>をしているものです。坊ちゃんのご友人にこうして会えたこと一同うれしく思います」

獵哉のメイドたちは特に合図をしたわけでもないのにタイミングを揃えて頭を下げてくる。洗練された一礼は彼女たちが付き従う者として高い教養を持っていることを表わし、彼女たちも獵哉と同じく、一介の男子である自分とは違う世界の住人のように思えた。

「こちらにも挨拶が遅れてすまない。獵哉の友達の神詩志亮だ。自分も話に聞いていた貴女たちに出会えて嬉しく思う」

しかし、紳士を目指すものとして挨拶で遅れを取るわけには行かないと、優雅さを意識してメイドたちに返礼する。腰を曲げては大袈裟かと軽い会釈程度に留めたが、紳士帽が欲しくなるところ。今度姉に教わりながらネットで探してみるか。

「私たちメイド相手に勿体ない。恥ずかしくも身に余るお言葉、ありがたく頂戴したいと思います」

「それで、どうにも言い合いをしていたようだが、なにかあったのか？」

「彼女たちが俺に付いていくつて聞かないんだ」

「ふむ、なら連れて行けばいい……と簡単な話ではないようだな」

メイドたちもまた『男衛』であるのならば、一緒に来てくれたほうが心強いのだが、猟哉の掻い摘まんだ説明を聞くところ、彼女たちには直接の契約者である和車家から、今日丸一日は、このマンションで待機するようにと命令が下されており、これを破ってしまえば最悪の場合は契約違反としてメイドたちは明日から無職になってしまう可能性が高いそうだ。

「融通は利かんのか？」

「無理だな。どんな事情があるにせよ。命令に背いた『男衛』を義母上は決して許さないだろう。俺が擁護したとしても兄たちがここぞと嫌がらせのためだけに義母上に味方するのは目に見えている……俺はまだ無力な末弟でしかないんだ」

「あまりにもご無体な……」

悔しそうにするメイドたち。契約者からの命令が不本意であることが目に見えて分かる。だがおかしな話だ。猟哉の話によれば和車家では『男衛』を用意できないとのことだったが、『男衛』であるメイドたちには特に意味も無さそうな待機命令が出されている。単に遊園地に行つて遊びに行くだけなのに、どうにも話が難しくなってきた。

「猟哉様の身の安全を考えれば、彼女たちにご同行してもらった方が安心なのに、和車家は何を考えて？」

「和車家の考えではない、これは義兄の嫌がらせだ。それ以外に意味はない」

そもそも和車家から『男衛』を出せないという話も兄が横やりを入れて義理の母親に、そうするようにと頼み込んだかららしい。メイドたちは護衛のために付いてくるき満々だったため、待機命令が出たと

きはかなり驚いたとのことだ。会ったことの無い獵哉の義兄の正気を疑う。

「大人はなにも言わないのか？」

「義母上も、兄弟間のこのようなやりとりが好きらしくてな、費用は約束通り出してくれるが……兄に虐められる弟というのは需要が高いとのことで、寧ろ率先して煽っている節がある」

思い詰めるかのように獵哉が語る。メイドたちは不憫だと涙を流し、あのだ畜生女がと恐らく雇い主張本人であろう和車家当主を小声で罵倒する。その様子から察するにメイドたちは契約者こそ和車家であるが、忠誠心は獵哉に向いているようだ。案外彼女たちと暮らす日常は獵哉にとって一番まともな環境なのかもしれない。

自分たちに迷惑を掛けていると言う罪悪感からか、どこか浮かない顔の獵哉。どうにも難しいことを考えているようなので、自分は遊園地に行きたくないかと問い掛けた。すると獵哉が驚いた様子で見えてきたので、それを強い眼差しで受け止めていると、獵哉はハツキリと答えた。

「……行きたい。今日のことずっと楽しみにしていたんだ」

「ならば行くぞ。今更中止となれば到自も、そして自分もひどく残念な気分になる。行つて楽しもう」

「ああ」

今日は朝から夜まで丸一日楽しむ日なのだ。難しい事は明日の太陽が昇ってから考えればいい。それに金はしっかりと払ってくれるというのだ、日々の迷惑料代わりに、遊んで喰って騒げばいいと言えば、獵哉はそういうものかと吹き出した。

さて、後の問題はメイドたちだ。一緒に同行すればクビとなるのは獵哉も望まないだろうし、かといつてこのまま見送るのもよしとするような空気では無かった。どうしたものかとメイドたちに目を向けてみれば、なにやら奈々子さんと真剣に話をしていた。

「——この様に、私たち『アカスズメ』の『男衛』たちが中継点になることで自宅でもカメラを使いサポートはできるかと思われます。そのための機材は私たちの車に積んであるので、よろしければお使いく

ださい」

「わかりました。感謝します。そしてこちらがわたくしたちが使用しているルームアプリの部屋IDとパスワードとなります。ここは主人にすら立ち入ることを拒否することができるメイドたちによる秘密のお茶会場です。これで連絡を取り合えば義兄弟たちに、私たちの協力がばれることはないでしょう……本来ならば、別の、それも他社の『男衛』には教えるのは御法度なのですが……猟哉坊ちやまのこと、よろしくおねがいします」

「はい、ここは互いのご主人様のためにも」

「ご協力いたしましょう」

猟哉をお護りしたいメイド。男衛が足りなくて不安な奈々子さん。利害は一致していたためか交渉は素早くすんだようで、メイドたちは待機命令を利用してオペレーターの役割を担うことで話が付いた。こういった物事において素早く対処し解決するところは、やはり奈々子さんはとても優秀で自分には勿体ないほどの『男衛』みたいだ。もつとも誰にも渡す気は無いがな。

「猟哉おせえぞ！ もうこねえかと思ったじゃんかよ」

「すまない。ちよつと色々あってな。『男衛』たちも待たせてしまったようですまない。今日はよろしく頼む」

「遊園地までかつ飛ばしてくれよな！」

「到自。紅月国の道には速度制限があつてな、それを超えて走ってしまおうと彼女たちは捕まってしまうんだ」

「そうなのか!? じゃあ、普通の速さでいいから遊園地までよろしくたのむぜ！」

「は、はい。お任せください！」

「よろしくお願ひします！ ……せ、先輩。また凄い男の人数が増えました……！」

「和車家の御曹子とは聞いていたから、正直性格はちよつとアレかな〜って思っていた過去の私を誰かぶん殴って欲しい……紅校の男子レベル高すぎい！」

こうして無事紅校男子三人組が合流した。メイドさんがトランク

に積み込まれた機材をマンションまで運んだことで、少し予定の時間が過ぎてしまったが、この程度なら旅の醍醐味だろう。頼もしいバックアップを得られたことで、奈々子さんもどこか気持ちが悪くなったように見える。

また美並さんは、<sup>熟睡</sup>気絶しているところを妹に見つかつたらしく、待機中の間起こされて説教を受けていたようでとても落ち込んでいた。完全に自分の所為なので労おうとしたところ。奈々子さんにストツプを入れられてしまい。そつとする事になった。本当にすまん。

それからの移動は特にトラブルもなく。高速道路にて初めて見る紅月国の景色を楽しんだ。パツと見た感じでは都会の日本とさほど変わりはなく、異世界らしさというものは感じられなかった。また到自と猟哉も、普通ではでない車の速度。長いトンネルや景色にテンションのボルテージは上がり続けているらしく、スマホからの凄いはしゃいでいる声が止まず聞こえてくる。

《こちら二号車。後ろが尊み溢れすぎてヤバイです。オーバー》  
「こちら一号車。了解。限界が来そうなら早めに報告してくださいアウト」

《二号車。こちらメイドオペレーター。猟哉坊ちやまはどうして  
いますでしょうか？ オーバー》

《こちら二号車。三分ごとに確認してこないでください。とても  
楽しそうですオーバー》

「こちら一号車。オペレーター。確認はせめて七分ごとにしてくださ  
いアウト」

仕事をしている『男衛』たちもどこか楽しそうである。奈々子さんたちの通信を聞きながら、遊園地に思いを馳せる。貸し切りだから並ぶ必要もなしに園内のアトラクションを自由に遊ぶことができる。なので端から順に乗ってみるのもありか、それともジェットコースターなど絶叫系を中心に攻めてみるか、それとも行き当たりばったりで、みんなで決めながら回るか。

なんにせよ遊園地はもうすぐだ。本当に楽しみである。

「……………これは」

「ちよ、ちよっと待っていてください！」

遊園地に到着した自分たち、まず最初に目にしたのは駐車場を埋め尽くす車たちである。全員が嫌な予感に支配される中、状況を確認した奈々子さんが衝撃の事実を告げる。

「――遊園地。通常営業しています」



遊園地に到着してから中へと入るまで

『ワグルマランド』。名前から分かる通り和車家が保有している遊園地で国内発祥の中ではもっとも施設数が多いテーマパークとして有名とのことで、毎年何かしらでテレビで紹介されている印象を受けた。園内には絶叫マシンから観覧車まで王道とも呼べるアトラクションが取りそろえられており、紅月国では遊園地と言えば『ワグルマランド』の事を指すとも言われている。

テレビにて年に何度か見る国有数の遊園地を貸し切りで遊べるとあっては体は子供、心は大人な自分であっても、はしゃぐものである。そんなわけで到着した『ワグルマランド』であったが最大のトラブルが発生した。なんとびっくり貸し切りだと思われた遊園地が通常営業しているとのことだ。

「——はい、はい。わかりました……はい……とりあえず、皆さんに話してみます……はい、承知しました……はい……」

「どうだ？」

「園長に事情を確認したところ、どうにも連絡の行き違いがあったようです、本日貸し切りの予約が入っていたのは確かだそうです、その次の日にはキャンセルの連絡があったとの事なので通常オープンしたそうです」

「どこか行き違いがあったのか？」

「……まだ可能性の話ですが。園長の話聞く限りあちらの話に不備はありませんでした。キャンセルの連絡を入れたのも和車家の者で間違いないらしく、そのことから義兄弟たちの妨害かと」

「またか……」

証拠などはないが、これ以上の納得感を生める理由もなさそうだと呆れる。そして人に迷惑しか掛けぬ兄を持つ猟哉に心底同情する。話の邪魔にならないようにと黙っていて美並さんも話を聞いて思わずか、うわあと声を漏らした。

つまりはこれも猟哉に対する嫌がらせなのだろう。遊園地で遊びたいなら顔も知らぬ数万の女性たちと一緒になみたいな。この世界

の男性からしたら楽しい遊園地から一転、トラウマ必須の地獄のゾンビランドとなったようなものか。そうなら遊ぶどころではない、今すぐにも安全な所へと避難して、大人しくしているのが正しい。

こうなつては仕方ない。遊園地は諦めてどこか別の遊べる場所を探したほうがいいだろう。なにかあつてからでは遅い。自分たちに直接被害が出てくるものであり、奈々子さんたちにも迷惑もかかるし、母たちにも心配を掛ける。

——だが、このまま背を向けるのは。あまりにも面白くない。旅のトラブルも素敵な思い出の一部とは言うが、これは人の悪意によつて引き起こされたもの。楽しく思える要素が皆無であり、結果よくてもヨシとは言えるはずがない。なにより猟哉と到自の気持ちはどうなる？ 彼らは今日を本当に楽しみに来ていたんだ。

「奈々子さん。意見を聞きたい」

「……『男衛』としても、個人としても志亮様の身に降りかかる危険を考慮して遊園地を諦めて、別のプランを考えるべきです」

「であろうな……だけど、自分は今日、遊園地に遊びに来たんだ」

質問した辺りから、どこか諦め気味だった奈々子さん。額に指を当てて難しい顔をする。恐らく自分を止めるための言葉を必死に探しているのだろう。だが、本当にすまない今回だけは諦めてほしい。我ながらむきになつている自覚はあるが、ここで折れてしまえば二人の人生にも関わりそうなのだ。男には危険と分かつていても遊園地にてジェットコースターに乗らないと行けない時がある。多分身長的に乗れないだろうが。

「……美並。あとで榎並にも言いますが最大限フォローはします。命懸けで仕事に励んでください」

「せ、先輩!? その……よしたほうが……」

「元々、私たちに指示できる権限はありません。それにあなつた志亮様は止められないので、被害が最小限になるように努力してください」

「でも、これだけの女性を相手に四人で三人を護りきるのは無理ですよー」

「いえ、むしろ護るといふよりも……とにかく仕事を全うしてください」

「意味深に言葉を区切らないでください!?!」

それに紳士として、いや男として顔も知らぬクソ野郎の悪逆非道の行ないから逃げるわけには行かない。明日では駄目だ、いつかでは駄目だ。自分は今日、遊園地で大いにはしゃぐ、自分の予定は下らない虐めでは狂わない。

ただ、自分の勝手我が儘に付き合うか否か尋ねないと行けない。

「——到自、猟哉」

二号車で待機していた猟哉は全てを察しているのか酷く顔色が悪い。到自は周りの不穏な空気を感じ取って苛立ちを隠せないで居る。矢地さんも榎並さんも心配していて車内の空気はかなり重い。

「——どうした遊園地についたのに、随分とシリアスだな」

「志亮!・俺は……!」

「猟哉。遊園地は営業している。ならば自分は遊ぶぞ。二人はどうだ?」

「んなもん、オレも行くに決まってるだろ!」

「まっつてくれ! あまりにも危険すぎる!」

「猟哉。紳士は時として険しく危険な道をあえて進まないといけない。それは人生に不必要な歩みかもしれない。違う道を選ぶのも時には必要だろう。だが自分はこんなことで道を変えるつもりはない。これが紳士の道ならば喜んで真っ直ぐ突き進もう」

「志亮……君がそのつもりならば、俺も行く……いや、行きたいんだ」

《行けません坊ちやまつ!?! ……もしも遊園地に入るといふのならばメイドたちは今すぐにも坊ちやまのところへと向かいます!》

メイドたちは来月からの生活を盾に猟哉を止めに入る。それはそうだ。彼女たちからすれば主が自らライオンたちの檻あるしに入ろうとしているのだ、まさに狂気の沙汰だ。止めるのが普通であり、止まるのが正気だ。

「すまない。俺は義兄たちから逃げたくないし、なによりみんなと遊

びたいんだ」

《獵哉坊ちやま……》

「——何年かかってでも、君たちを雇ってみせる」

《獵哉坊ちやま?!?!?》

しかし、雇い主のキメに決まった台詞でメイドたちは陥落。半数以上が若年性ぎっくり腰を患ったので変わらず自宅でオペレートしてくれることになった。うん、よかったな獵哉。ただ自分を参考にシンシらしく思いを語ってみたのだが、これでよかったのだろうかと感想を求めないでほしい。どこか微妙な微笑みを向けることしかできない。

ともあれ！ 男子たちは全員遊園地に行く。そんな自分たちを護衛する奈々子さんたちを見れば覚悟を宿した顔をしている。自分が歩き出すと、全員がその後ろを同じ歩幅で歩き出した。絶対に遊園地に遊びに行く空気ではない……。まあ遊園地マジックがこの空気を変えることを信じて入り口に向かう！

……とまあ、意気込んだ後、そういえばキャンセルということは遊園地のフリーパスや飲食全て無料もなくなったのかと不安に思い、それとなく奈々子さんに相談。その当たりも園長に確認をとってくれたらしく、すでに年間パスとして発行しているため受け付けで名前を出せば受け取れるとのこと、奈々子さんはやっぱり凄い。

++++

——この日『ワグルマランド』は歴史に残る日となった。そのはじまりを目撃したのは炎天下で入場の順番待ちをしている最後尾の女性たちだった。

彼女たちは中卒で社会人となった同級生たちであり、休みが重なったと久しぶりに集まり遊園地に来たのだ。仕事のこととはそこそこに盛り上がるのは漫画やアニメについて、彼女たちが好むのは男女の恋愛漫画。志亮は姉の漫画を見て男女が一緒に居る漫画は少ないと思っただが、その逆、この世界は地球以上に男女の恋愛を綴った創作が山ほどある。

ただ大抵が、異性に飢えた女性の欲望が固められた創作物なので、

不健全だと姉の手によって隠蔽された。とどつまり女性が漫画やアニメの話をするときは大抵、男に関係する夢の話である。

白馬に乗った王子様に迎えに来て欲しい、石油王に求婚されたいという広大な夢は話が進むにつれて、どんどん現実に取り戻されてしまっている。最終的には男性に声をかけられたいまで萎む。だがそれでも漫画の世界で特別として描かれるほど現実では難しいのだ。科学技術が進歩して人口が増えた現代だからこそ、より男性と女性が顔を合わせ、会話が出来る確率は低くなっていると言う。

—— 私たちには一生縁が無いかも知れないね。

単なる世間話だったのに、どうにも憂鬱になった女子グループ。漫画の世界では遊園地イベントは男女の仲を深める定番のスポットだが、現実には厳しく、こんな女性だらけの遊園地で男子に会えるなんてそれほど天文学的な数字だろう。

「……失礼」

「はい？　なんで……!?!」

「入場口の順番待ちはここが最後尾か？」

しかし、宝くじの一等賞は誰かにしろ当たるものなのだ。それが今日遊園地に遊びにきた女性たちなのだろう。女子たちが振り向いた。そこには誰もいなかった、あれと思えば視線を少し下ろすと、なんという事でしょう。まるで漫画から飛び出たような素敵な男子がそこにいるじゃないですか、さらにはキリッとした目付きの少年シヨタが微笑みを浮かべて、こちらを見ている。

「あ、えっと、そう、ですね、はい、そうです……」

あまりの非現実的な光景にバグった脳みそを動かし、締め付けるほど喉に力を入れて言葉を生み出す。周辺はまだ気がついていない。

「そうか。ならば順番が来るまで後ろ失礼する」

「志亮様!?!　なにをしているんですか!?!」

「なにって？　並んでいるだけだが？」

慌てた様子で『男衛』を表わすパーカー姿の女性がダツシユシヨタで少年の傍まで来た。

「私たちはあちらの優先口ですぐに中へと入れます！　並ぶ必要はあ

りません！」

「そうだったのか……だから皆、端のほうへと行つたんだな」

「疑問に思っていたんですけど一声かけてください……」

すまないと『男衛』に謝る少年<sup>シヨタ</sup>。謙虚な姿勢は、彼の二次元的存在感を増させて女性グループはついぞ拗らせすぎて幻覚を見始めたのだと覚る。同じく固まっている友達に目ん玉洗つてと頼んでみるかと思考があらぬ方向へと飛びかけた彼女だったが、さらなる衝撃によつて、もはやそれどころじゃなくなる。

「そういうことみたいだすまない。先に入らせてもらう……また会えた時は改めて挨拶のひとつでもさせて欲しい、ではな——」

自分にそう話しかけて少年<sup>シヨタ</sup>は優先口へと優雅に歩む。こつそりのつもりがと頭を抱える『男衛』の言葉は完全に耳に入っておらず、ずっとその瞳はただ彼だけを見つめる。

ふと、音が止んだ。全員が彼に気付いたのだろう。場が静かになったことが気になったのか、改めて少年<sup>シヨタ</sup>は、こちらに目を向けて——小悪魔の微笑みを浮かべて、そしてウインクを一発放ち、そのまま遊園地の中へと消えていった。

順番待ちをしていた女性たちは、*「餓え」*が見せた白昼夢かと今までの出来事を判断して、大人しく順番を待つ。しかし音が戻らない。彼女たちは奇妙に見えるほど規律的な姿勢で己の順番を待ち、神聖視すら始めた入り口を通り過ぎて遊園地内に入ると、全員が魂を奪われたかのように覚束ない足取りで彷徨い出す。

——楽しい楽しい遊園地はまだ始まったばかりである。

## 遊園地で遊ぼう 1

入場口でちよつとしたトラブルの後、受付のお姉さんに何度も止めた方がいいと止められたが、そこは今更、奈々子さんが事情を説明してフリーパスを受け取り、無事に園内に入ることができた。

まず、目に飛び込んできたのは転生して直接目で見るのは初めての光景。つまり見渡す限りたくさんの人である。左右前後どこを見ても人だらけではあるが、その全てが女性であることが、改めてここが異世界だということを実感させる。

というか美女美少女揃いなのがとことん異世界じみている。といっても彼女たちがこれだけ綺麗なものには結構ちゃんとした理由があり、言つてしまえば次に種を残すための生存戦略である。科学技術が未熟だった時代。女性は何かしら秀でていなければ男性に選ばれる事は無く、寿命が短いこともあってそのまま絶家になってしまう事がそう珍しくなかった。それゆえ男に見初められるために必要な努力を行なう気骨というべきものが遺伝子レベルで刻まれているらしい。

さらに科学技術が発展した現代において、そういった事情からも美や若さに関係する技術が地球よりも遙かに進んでおり、化粧水ひとつでもまるで魔法のようなアンチエイジング効果を持っている。なので母のようにアラサー、アラフォーの貴婦人かたが二十代にしか見えない方が多いのもそういった理由である。

それでも、むしろだからこそなのか男性には忌避されて男女の溝が空いてしまっているのは進化論とはなんとも厳しいものである。まあ自分にとっては目の保養しかならないので、なんとも素晴らしい世界である。

「猛獣が息するジャングルに居ると思つて行動してください」

「は、はいー」

「よーし、どこでもいつでもこーいー」

「襲撃を望まないでください」

奈々子さんたち『男衛』一同は自分たちを『正方形・角の陣』にて

困い、忙しく視線を動かして周辺の女性たちの一挙手一投足を注視していた。強い気迫を感じられ、なにか不審な動きをした人物がいれば攻撃は最大の防御と言わんばかりに狩りに行きそうだ。

「う、おお……」

「これは……すごいな」

到自と獵哉は初めてみるたくさんの女性に腰が引けている。やはりこの世界の男性は本能的に女性を嫌悪する生まれつきのものがあるのだろうか？ そうなると遊園地を回ったところで脅えて楽しむことができないのか心配だ。

そう心配して確認してみると、どちらとも問題無いと返ってくる。強がりではあるみたいだが及び腰になってはいない。むしろ、先ほどから遊園地のアトラクションたちが気になって仕方ないといった具合だ。

「奈々子さん。そろそろ移動したいのだが問題はないだろうか？」

「はい、出入り口付近で立ち止まっているのは危険ですし、とりあえず移動を開始しましょう」

こちらを二度見、三度見をして瞼を限界まで見開く女性たちを警戒する奈々子さん。彼女たちは、ここに男が居ることを、己が生み出した幻覚だと考えているのだろうか、危ないくらい何度も目を擦っており、彼女たちの視力のためにも奈々子さんの提案を承諾。とりあえず移動する事になった。

というわけで自分たち紅月小学校遊園地隊、出発である。なおこの部隊名はいま思いついたので非公式で、これから使うことは多分ない。

「……歩いてる?」

「え? あ、歩いてるっ!」

「うそ、歩いてる!」

遊園地の奥へと進み始める自分たち、なぜだか歩いているというだけで周囲に驚かれる。通常営業している遊園地に遊びに来る男というものが希有なのは分かっているが、そこまでか?

予想どおり前世を合わせて経験の無い数の女性の視線に晒される



も、最初から覚悟完了していたおかげか、そこまで気にはならない。獵哉もメイドたちと暮らしている影響、あるいは和車家の男ゆえか堂々としているが、到自は居心地が悪そうだ。元々人混みに慣れていないのもあるだろうが、身長が高いこともあって自分たちよりも視線に晒されているのかもしれない。

……ふむ、まずは到自の気分を変える必要があるか。

「奈々子さん」

「はい」

「まずはここへ行くと思う」

背後を護ってくれている奈々子さんを傍に呼んで、入場口にあったのを持ってきたパンフレットに記載されている、とあるアトラクションを指す。

「構いませんが……よろしいのですか？」

「ああ。どちらにせよお昼前には行くことは思っていたからな」

「わかりました」

奈々子さんは自前のパンフレットを取り出して前を歩く双子に目的の地まで進むルートを伝える。二人が頷くと、先導よろしく願いますと言い素早く元の位置に戻った。

企業に属して新人とは言えプロである奈々子さんと矢地さんは奇襲を受けやすい背後や側面、そしてすぐに前の異変に気づける後方に位置し、まだ学生の身である美並さんと榎並さんは正面のみに集中出来るように前方とのことだ。その中で奈々子さんは『単独護衛』の資格を持つとのことだ。臨機応変に動き回って『男衛』たちの指示や、自分たちの要望に応えていく遊撃的な動きをする。仕事量が半端ない。後先考えず、自分の身勝手に付き合わせてしまった事に深く反省する。到自と獵哉の事もあるし手伝いとはならんかもしれないが、彼女たちの負担を出来るだけ軽くして行こうと思う。できるように努力する。

「へー。遊園地って初めて来たけどすっげえなー」

「紅月国有数であるから、他と比べると広さもアトラクションの数も段違いであるとは知っていたが……こうやって歩き回るだけでも結

構刺激的だな」

「夢中になつてはぐれるなよ」

「気を付けよう。それにしても志亮は落ち着いているな?」

「そうでもない。気分が浮かれすぎて、今にもどうにかなりそうだ」

中身は二度目の精神であれど、子供脳であることが影響しているのか、ちよつとでも気を抜けば足はスキップを刻み始めるだろう。

仕方ない。本当に仕方ない。なにせ自分は人類の夢を叶えているのだ。大人になつてしまひ過去を思い出して、もう一度子供に戻つて遊びたい。そんな願いを叶えているのだ。それも同年代の友達が居て、綺麗なお姉さんに囲まれて、こんなものはしゃがないほうが子供としてどうかしている。

残念な事に、遊園地さいこーと言いなながら両手を挙げて全力疾走などは、みんなの迷惑を考えればできないが、そんなものは些細なことである。はやく遊園地定番のアトラクションに乗りたい。小学生低学年の今だからこそメリーゴーランドは絶対乗りたい。

——まあ、最初の楽しみは友達に譲ることになつたのだがな。

「お、おとおー!」

途中からまさかとそわそわし始めていた到自が、目的地に到着して腹の底から叫んだ。込められた感情は歓喜である。無理もない、このアトラクションを最も楽しみにしていたのは到自であり、彼は絶対乗ると決めていたのだから。

「もしかして——ジェットコースターか!」

「もしかしなくてもジェットコースターだな」

日本でも遊園地と言えば名前が挙がる絶叫系のアトラクション。ジェットコースターである。数十人の客を乗せたビークルが、ゆつくりとレールの上を登つていき頂上へと到着、そのままほぼ直角の斜面を急降下。およそ日常じゃ経験しようのない速度での落下に喜色混じりの悲鳴がはつきりと聞こえてくる。

「乗つていいのか!」

「乗つていいから、ここに来たんだ」

事前の下調べで必ず乗ると豪語していた到自。実物を目にしたら

もしかしたら怖がつて止めるとか言い出すかと思ったが、その逆、もはや夜を照らせそうなほど瞳が輝いている。

「まじか、ついにかー！」

パンフレットに依れば最高時速150キロで疾走すると言う。さらに目に見えて分かるが、このジェットコースター2回転するのだ。『和車ランド』の目玉アトラクションにもなっているらしく、テレビでも何度も見た。それでも到自は怖じける様子はやはり無く、飛び出さないのが不思議なくらいである。

「どうした、はやく行こうぜー！」

どうやら自分が動き出すのを待っていてくれたみたいだ。到自は荒っぽい先走ること無く、きちんと仲間を待ってくれる優しい男だ。だからこそ申し訳なくなりながらも無理だと言う。どうしてだと本気で驚く到自に、獵哉はため息を吐いた。

「これで何度目だ？俺たちは乗らないんじゃないんで乗れないんだ。身長が足りなくてな」

そう、ジェットコースターに乗るには身長が130cm必要なのである。自分と獵哉の身長は小学校一年生の平均前後であるため足りないのだ。獵哉に到つては10cm以上足りない、しかし、到自はすでに中学生と見間違うほどの身長である。なので下調べの時点で、ジェットコースターに乗る際は到自だけという話であった。

到自も思い出したらしく、忘れてたと後頭部を搔く。そこでふと、そういえば自分たちの下調べの時の話は全部、貸し切りが前提であった。なのでジェットコースターも到自ひとりで乗るという予定だったのだが、他の客がいる以上。どうなるのか？

「すいません。報告が遅れましたが、メイド隊経由で訪れたアトラクションのスタッフに連絡が入り優先的に使わせて貰えるように園長から許可を貰っています」

「そうなのか？しかし……いいのだろうか？」

ジェットコースターに関してには到自だけではあるが、他の乗り物でも例外なく自分たちは先に順番待ちをしていた人を押しつけて乗れるのだろうか。その事に元は日本人として、どうしても罪悪感を抱いて

しまう。そんな自分の心情を察していたのか奈々子さんは間髪入れず、志亮様たちの身の安全が最優先ですと言ってきた。

納得しかない。だが罪悪感を払拭できるかは別なのだが、奈々子さんたちにこれ以上負担を掛けるほうがなによりも申し訳ないので、今回ばかりは甘えることにする。

「それとですが到自様。女性が多く集まっている以上、お一人での搭乗は危険すぎます。なのでジェットコースターに乗る際は矢地を傍に置いてください」

「……ちよつ!?!」

周辺の警戒に集中していたためか、矢地さんはお手本の様な二度見をする。ふむ、傍におくということとはつまり、到自と矢地さんがジェットコースターには隣同士で座るということか。

「奈々子!?! なにを言ってる——」

「おおいぜ」

「うえつ!?!」

矢地がジェットコースターに同行するのは奈々子さんの完全なアドリブラしく、矢地さんは、まさに寝耳に水という反応をする。そんな彼女に喧しいと視線で訴える奈々子さんに、いや待って心の準備をさせてと手を横に振って抗議をする矢地さん。

あくまで自分の想像であるが間違っではないだろう。到自も人が悪いと言うか、とにかくジェットコースターに乗りたくてしかたないらしく、些細な条件だと言わんばかりに即答したのだが、その結果矢地さんの動揺はさらに強まる。

矢地さんは何かしらの葛藤の後、腹を括るかと思呼吸をした。

「えつと、灯元様」

「到自でいいぜ!」

「あ、ハイ……そ、それではと、到自様。今からほんの少しの間だけです。よろしくお願いします!」

「おうー!」

明らかに動揺から回復しきっていない矢地さんに、到自は畳み掛けるようににかつと白い歯を見せる笑顔で返事する……すまんが、ギブ

アップ寸前の顔でこちらを見ないでほしい。なお奈々子さんは心配半分同情半分のため息を吐いた後、これも必要な犠牲ですと小声で呟いた気がするが多分気のせいだろう。両手を合わせたが異世界だ。宗教が違うかも知れない。

「せ、先輩……」

「……よし！ 私だって『男衛』！ 任務を確実に遂行してみせるよ！」

自分の頬を叩いた矢地さんは、到自と共にジェットコースターのスタートの元へと行った。矢地さんとスタッフが何度か会話すると、スタッフたちが先に並んでいたお客様たちに謝罪をしながら下がって貰える様に指示を出す。そしてスタッフが帯を外したガイドポールの間から到自たちは進み列の先頭へと立った。

急に後ろに下がってと言われてざわつく列の人たち。人気アトラクションなだけあって最後尾は一時間まち、今は最前列の女性たちも長いこと並んでいたはずだ。次は自分の番といタイミングで前に割り込んできた矢地さんに不満顔になり、次に到自を見ると目ん玉広げて驚き、お、男、うそ?! 私の目の前に男がと友達と一緒に驚きながらも嬉しそうにしている……なんか想像していたのと違うが、まあ問題にならなさそうならいいか。

出発したジェットコースターが戻ってきた。乗客が降りてきてスタートが通行止めになっていたジェットコースターへと続く階段の道を開いたことで、到自はついぞ我慢の限界が来たのだろう、駆け足で昇っていく。矢地さんもそれに慌てて続き、その後ろの乗客も、といったところで再度道が塞がれた。

これには元最前列の女性たちも不満顔であるが、男性が乗るんだから仕方ないかと残念そうにしながらも納得している様子だった。それを見て罪悪感を募らせていくと、なぜか上に昇っていったはずの到自が降りてきた。

「——どうしたんだ!? お前たちも早くこいよ!」

……シンプルに到自は、ジェットコースターは数十人纏めて乗るものだという認識なのだろう。そして全員が乗りきらないと出発でき

ないものと思っっているかもしれない。自分と関わったことで女性の嫌悪感がかなり薄まっていたのも相まって、まさかの到自が女性たちにたいして一緒に乗ろうと言ったのである。

これには予想外が過ぎると驚いた。奈々子さんも、双子も、猟哉も、スタツフも、そして声を掛けられた張本人である並んでいた女性たちも心底ぶったまげた。特に並んでいた女性たちの驚きっぷりはすさまじかったらしく幻覚、幻聴扱いしたのか動こうとしない。

「早く来てくれないと出発できないだろ！ 上で待ってるからな！」

しびれを切らした到自はそういつて階段を昇っていった、すれ違いに遅れて来た矢地さんが到自を追って再度昇っていく姿が見えたが些細なことだろう。女性たちは白昼夢を見ているかのような足取りで、階段を昇っていく。

「……その、なんだ。止めなくてもいいのか？」

「……こうなった以上、止めたほうが、危険性の高いトラブルが発生すると思いますので」

止めようがありませんと色々と諦めた様子の奈々子さんに、人数が上限だと入り口を閉じたスタツフと客たちがちよつと過激な言い合いをしているのを見て同意する。

「……ちなみに矢地なんですが……絶叫マシン苦手です」

その情報は日が沈んでから聞きたかったなと口にはせず、聞いた事がある声の絶叫に耳を傾けた。

## 遊園地で遊ぼう 2

到自と矢地さんがジェットコースターを堪能してしばらく、自分たちは少し早めの昼食を摂ることにして飲食店へと入った。遊園地側の配慮と言えはいいのか、本来であれば事前予約が必要な二階に案内された。エアコンは人類が生み出した文化の極みである。

ちなみに一階の通常席では、男子と同じ場所でご飯を食べる権利を賭けて、ちよつと言葉にするには難しい状況になっているようで、先ほどまでは建物自体揺れていたのだが、奈々子さん提案、メイドさんたちが伝達、スタッフがお客に向けて騒がしくした奴は即刻失格と通達したら静かになったとのこと。

いったい下では何が起きているのか好奇心を我慢出来ず、席を選んでいる振りをして窓から外を見たらこちらを真顔で見上げる何十人の女性と眼があつてしまったので気にしないことにした。お化け屋敷はもういいかもしれんな。

「すごかった！ マジですごかった！」

癖が付いてしまったのか無意識に学校の食堂と同じように座ると、ジェットコースターを堪能した到自が興奮冷めやらぬといった様子で感想を叫ぶ。内容の九割が「マジ」と「凄かった」のふたつで構成されているが、あのジェットコースターが特別であることがしつかりと伝わってきて、純粋な評価というものはなによりも勝ることを教えてくれる。

「落ちた時こええって思ったんだけどよ！ そつからガーつて行くのがマジで凄かった！」

「高い身長というものに余り興味は無かったんだが、そこまで言われると羨ましくなるな」

「楽しんだようだなによりだ……その……無事か？」

「ほげー」

立ったまま意識がどこかへと飛んでしまっている矢地さん。苦手なジェットコースターに乗った影響か、それとも到自の隣に乗ったことが原因か、白目むいて到自に肩で支えられながら階段を降りてきた

時は驚いたものだ。その時の仁義なき戦いをしかけていた遊園地スタッフと客が射殺できそうな視線を一斉に矢地さんに送った時は本当に驚いたものだ。かなり刺激的な光景であった。百を超える人の視線が一方所に集まるといえるのは自分が対象で無いにしろ怖いものである。

「矢地、そこでもしもの時に動きづらいです。左真横に一步半移動してください」

「ほげー」

奈々子さんの指示に投資に失敗したような蕩けた顔をしながらも従う矢地さん。意識を失ってもなお自分たちを護衛すると本能が働いているようだ。そんな彼女に最大級の感謝と敬意を送る。というか躊躇いなく犠牲に……もとい指示を出した奈々子さんを見る後輩の眼が期待に満ちながらもどこか脅えてるといった複雑怪奇なものとなっている。

安全を考えればジェットコースターの時のようにアトラクションを奈々子さんたち『男衛』の誰かと乗ることになるのは確実だ。地球ではデートの定番の遊園地。男女が一緒のアトラクションに乗り込んで楽しむというのはいくらもある話ではある。しかし、この世界では夢物語レベルの出来事だ。女性として至極当然に期待してしまうものなのかもしれない。

自分としては是非にとは思いますが彼女たちは工作中。自分がいつもの調子でやってしまえば迷惑にしかならず、ひいては自身の危険にも繋がる。ここは我慢の時だろう。まあ多分、早めに生け贄として差し出される……こほん、お仕事が回ってくると思うが。

各々に頼んだ料理が届く、自分は動き回ることを考えて軽めにトマトレタスサンドのみを注文。到自はがつつりハンバーガーセット。猟哉はホットドッグ。どこでも食べられるジャンクフードであるが、各々のパンには『ワグルマランド』のオリジナルロゴの焼き印が押されており、この遊園地でのみ食べられる料理であることを強調している。一口、うむ、普通のトマトレタスサンド。美味い。だが無料ではなかったら頼むかと言われると正直ちと高い。……次遊びに来るとき



は弁当を作って持ってくるのもありかもしれないな。

「……おっと、そういえば忘れていたな」

「どうした？」

「白雪先生に、遊園地に無事についたら報告しようと思っていたんだ」  
夏休みが始まってから自分は定期的に白雪先生に連絡していた。会話の内容は歌の練習についてや他愛も無い日常会話である。遊園地に行くことも話しており、初めての長距離外出だからか天にお還りあそばされるのでしょうか？ と心配されてしまった。

その時は普通に遊びに行くだけだと宥めたのだが、彼女のことだ。今でも不安に感じているのは想像に難くない。連絡するだけでは払拭されるか分からないので、写真のひとつでも送ろうか。そうやってスマホのカメラ片手にポーズを模索していると、猟哉も到自も白雪先生に送るならと自分から一緒に写ることとなった。というわけで奈々子さんに撮影を頼み、三人横一列となって各々の食べかけの料理が見えるように写す。

このあいだ奈々子さんに自撮りの写真を送ったら喜ばれたので、ポーズの練習をしていたのが役に立つ。紳士を目指すならば、やはりある程度は自分を格好良く見せる練習を積んでいかなければな。

撮影が終わり、写真を確認。ポーズに違和感があったり、口元に食べかすが付いていたら撮り直そうと思ったのだが、そのまま奈々子さんのスマホということで白雪先生に送って欲しいとお願いする。

「——花音……あなたは良き友人であり戦友でした！ 恨むなら己の幸運を恨んでくださいっ！」

送りつけた爆弾を起爆するようなノリで送信ボタンを押す奈々子さん。二人は仲がよく学校でもよく話しているのを見る。なので友達に対するお茶目な『男衛』ジョークなのだろう、そういうことにしておこう。

——この日、既読はついたが白雪先生からの連絡は来なかった。

ふと、奈々子さんが遠慮がちに自分を見ているのに気付く、言いたい事を察した自分は二人に確認をとって了承を得たので写真は消さずに残しておいても構わないと伝える。すると奈々子さんは表情こ

そいつものように変えないものの、ありがとうございませすと嬉しそうにしてくれので、自分もとても嬉しい気持ちになった。

《こちらオペレーター。アルファ。独占は許されません》

「こちらアルファ。分かっています。全ては今日と言う日を生き残った後に、どうぞ」

《……グッドラック》

「グッドラック。矢地、そろそろ覚醒してください」

「はっ!? 私はなにを……?」

奈々子さんの華麗な手刀による昭和テレビ的処方で矢地さんが元に戻る。どうやらジェットコースターの時の記憶は恐怖か何かで飛んでしまったらしく、どうして店内に居るのか首を傾げている。奈々子さんがぼそりと都合がいいですねと呟いた。今日はなんだか色んな彼女を知って得した気分である。

＋十＋

紅月国でも有数の遊園地だけあって、体験するアトラクションどれもとても満足いくものであった。

子供向けの回転ブランコは想像していたよりも速度があつて、遠心力による重力への開放感と言うべきか、身体が外へと飛んでいきそうになる感覚は中々に楽しかった。猟哉も風を切る感覚が気に入ったようで、もしかしたらジェットコースターに乗れるようになったら、誰よりも嵌るかもしれないな。なおメリーゴーランドはどこか物足りなさそうであった。

到自は高身長を活かして次々と絶叫系を網羅していく、搭乗時知らない客と隣同士になるのは危険ということと相方として必ず矢地さんが選ばれる。指示役の奈々子さん、まだ半人前の榎並さん美並さんでは不安だと消去法にてアトラクションに同行する『男衛』が矢地さんしかいないのだ。仕方ないという奴である。

「えへへー」

しかし、最初こそ呆けていた矢地さんだったが現在では男性と一緒にアトラクションに乗るのを完全に楽しんでた。降りてくるたびに全て出し切っていた感情が、徐々に残るようになり、五つ目から

降りてきたあたりで世界で一番幸せな女性の顔になっていた。客やスタッフたちによる羨望の殺気が向けられるのに、たいしたものである。

「いやあ楽しかったね！」

「おう！ 楽しかったな！」

ただ、調子に乗り始めて仕事というのを忘れていたのではなかろうか、奈々子さんもこれは後でお説教ですなとため息を吐いた。美並さん、榎並さんも不満げである。

「先輩ずるいんだ〜」「姉さん……否定はしませんけど油断しないでください」「私もいつかあんな風に男の人とデートしたいな」「先輩別にデートしているわけではありませんが、私も姉さんと気持ちは一緒です」

「なら、自分と乗るか？」

「……え？」

——憂う二人を無視することはできなかった。自分はそう後になつて奈々子さんに弁明した。

「……そろそろ、プランを変更したほうが良さそうですね」

遊園地を遊び回った結果。本来であれば自分たち同じく遊園地を楽しんでいたであろう女性客たちが後方数十メートルを行軍の如く追従してくる。その数は千を軽く超えるだろう。平和に遊べているほうが不思議なぐらいである。

というか、かなり意外である。彼女たちのことを自分は無礼を承知でゾンビと表現している。その理由は学校の行き帰りで見ると、少年にワンチャンを求めするために『紅校』周辺で屯っている様子が正にそのまんまだったからだ。だから男とみれば熱された鉄板に触れる水滴の如く理性は蒸発し凶暴になるのが、この世界の女性。そう認識していた。

しかし遊園地にいる彼女たちはスマホで撮影もせず、ただこちらを記憶に焼き付けようとしているのか瞼を限界まで開いて凝視しているだけだ。まったく関係ないが沢山の目で見えてくるだけの日本妖怪を思い出した。ぶつちやけ普通に怖い。

「——今でこそ理性と常識と倫理と法律知識などを総動員しながら、互いが互いを牽制し合って均衡を保っているようですが。いつ決壊するかわかりませんが、そうなってしまつては人の波に飲み込まれてしまい貞操……以前に命も危ぶまれます」

意外に意外を重ねて、こちらを遠巻きに見る彼女たちは自分たちに配慮をしてくれていたようだ。いや、むしろ学校周辺のアレがおかしいだけで、この世界は存外まともなのかもしれない。そう思い、感謝のひとつでも送ろうと視線を向けたところ、奈々子さんに腕で視界を遮られた。

「死にますよ?」

「すまない」

深々と頭を下げる。あくまで今は彼女たちの理性が保っているだけで、刺激すれば襲いかかる猛獣であることは変わりはないのだろう。どうしてこう自分は短絡的な行動をとるのであるのか、その謎を探るには未開のジャングルにでも行かなければ分からなさそうである。

「こほん。それでどこへ?」

「施設のアトラクションエリアを貸し切りにして、中に入りましょう。それからスタッフ達と協力して、外で待機する他の客をいったん散らします。志亮様はどこに行きたいですか?」

「そうだな」

貸し切りにするというのに引っかかりを感じてしまいが、そもそも今日は自分たちの貸し切りの予定だったと気にしないことにした。地図を見ながら、そういえば下調べの時に自分たち三人が公平に楽しめるような所があったことを思い出す。ここなら二人に確認を取らずとも次の目的地に決めてもいいだろう。なにせ元から行く予定ではあったのだから。

「なら、ここに行こう」

「わかりました」

この遊園地には体験型のスポーツ施設が存在する。ボウリング、ピッチングマシーンからバスケットボールをゴールポストに入れる

ゲームセンターで見かけたやつなど、とにかく身体を動かすタイプの娯楽施設である。

スポーツ用の服をレンタルしており借りる事となった。男子用というのはなかったがデザインが非個性的とあって、自分たちが着ても違和感はなく、赤や青など系八種類の色から選べるとあって黒を選んだ。ちなみに到自は青、猟哉は紫である。

機械の稼働音などで騒騒しいが、自分たち以外の客が居ない完全な貸し切り状態。いまごろ施設の外では遊園地のスタツフたちは総出で群がる女性たち相手に頑張ってくれているのだろう。熱中症で倒れる人が現われないことを祈る。

ちよつと落ち着いた所で男衛組はクーラーが特に効いている自販機場で休憩していた。遊園地に入ってから炎天下にもかかわらず水一滴も忙しくて飲んでいない様子を見ていない。奈々子さんと矢地さんはプロなだけあって余裕そうであったが、双子は疲労が目に見えて分かる。先ほど自分がやらかしたこともあってしつかりと休憩して欲しい。

「うわあ。私服も破壊力やばかったけど……スポーツ姿も大概……奈々子。マジで毎日あの環境で仕事してるの?」

「マジですよ。志亮様と到自様は週に三回以上、自主的に体育をしています。慣れないと死ぬので慣れました」

「先輩すごい」「先輩ヤバイ」

「といいますか、これからが本番なので今のうちに気合いを入れ直してください」

「これ以上にまだなにか!?!」

「スポーツするんですよ。激しく動くんですよ? どうなるか想像でき……したら死ぬので、なんとなくふわっと理解してください」

「……汗がぶしゃっ!?!」

「姉さんが鼻血だして死んだ!?!」

「そこら辺のベンチで休憩死しててください。出るとき起こします」

「……奈々子、私ね。いま貴女のこと死ぬほど羨ましいなって思ったのと同時に本気で尊敬した」

「ありがとうございます。矢地も頑張ってください」

「……がんばって？」

「到自様は対戦型のスポーツをお望みです。体力に自信がある方なので、ついて行けるのがこの面子で貴女だけなんですよ」

「……………あの奈々子さん。私は護衛をしないといけないんですよね？」

「ここには私たちが居ませんし、それにスポーツに勤しみながらも何かあれば動けますよね？ 仕事着のままフルマラソンを2週できる専門学校きつてのフィジカルモンスターの貴女なら」

「それとは別問題だよね!？」

話を聞いていると、到自がすぐにラケットと羽を持ってきてバトミントンやろうぜと誘ってきたので、できるだけ自然体で矢地さんはどうにもスポーツ万能なようで、到自の相手してくれるようだぞと紹介した。すると到自は本当かと、すぐに矢地さんに声を掛けて、返事も待たずに手を握ってコートの方へと引っ張っていった。

「奈々子さん!?! もうコレなんですかね!?!」

「仕事です」

間違いなく仕事であるが、仕事を楽しんでは駄目という法律はこの世界にも無いだろう。また役得ということで頑張つて欲しい。自分も最近は到自の体力について行けないんだ。まだまだ遊ぶ時間がたっぷりある中で早々に電池切れを起こすのもはつきり言って嫌なので、矢地さんには是非とも頑張つて欲しい。

「ふむ、そういえば猟哉とこうして身体を動かして遊ぶのは初めてになるか？」

「運動は得意じゃない。お手柔らかに頼む」

猟哉は運動がちよつと苦手らしく、下手に怪我をしてしまうと先生に迷惑が掛かってしまうと遠慮していた。そもそも自分と到自の体育の様子を見て、アレは無理だと思っていたのこと。しかし、折角なので自分と一緒に回るようになったのだ。

——さて、まずは何から遊ぼうか。

## 遊園地で遊ぼう 3

様々なスポーツを体験できる施設内にて、遊ぶにしても全部見てからの方がいいだろうということとで施設内をぐるりと回る。そんな中で猟哉が興味を持ったのは地球では不思議では無いが、この世界では意外そうなものだった。

「あれは……？ 車のゲーム？」

「本物の車のように運転するタイプのレースゲームだな」

地球のゲーセンとかに置かれていた本物の車の運転席に似せて作った座席型のカーレースゲーム。大人用二席と子供用二席の合計四席が、ひと目に付きにくい隅っこに置かれていた。座席裏に貼り付けられた説明欄を見ると、内容は至って普通のレースゲームであるが、ゲーム内での車の動きと座席が連動しているとのことだ。

荒々しくコースを走る車の映像に猟哉は興味津々と言った具合だ。アトラクションの反応を見る限りスピードを体感できるものを好んでいたから琴線に触れたのかもしれない。

「……志亮」

「ああ、これにするか」

人が興味を持てば自分もと言った具合にアクセルを吹かしたくなったので断わる理由はないと、いそいそと子供用座席に乗り込み、シートベルトを着用。お金は必要ないらしくスタートボタンを押すと画面が切り替わった。

「む？ これはどうやって……？」

「ハンドルを左右に動かして選び、アクセルペダルで決定するみたいだ」

「……詳しいな？」

「画面に出ているのをそのまま読み上げただけだ」

ハンドルやアクセルという単語を当たり前のように口にすると猟哉。理由を聞けば本で読んだことあるとのことだ。前世で似たゲームをプレイした事がある自分よりも手際よく猟哉は対戦モードを選び、車とコースも決めた。その後勝手にコースを選んだが良かったかと聞

かれたのだが構わないと返すことしか出来なかった。

遅れて自分も車を選んでゲームが本格的に始まる。座席のスピーカーからけたたましくなる排気音に小刻みに揺れる振動。レーシングカーを意識してか日常で乗る車よりも、かなり激しい。この演出は中々に心が躍る。それは獵哉も同じ気持ちなようである。驚きながらも、その瞳はギラついていた。

「獵哉。手加減せずに行くぞ!」

「こつちもだ。志亮!」

始まる前からテンションマックスとなつてしまい、思わず格好付けてしまうと獵哉も乗ってくれた。互いに気分はもう完全にプロレーサーである。

左上に表示されているマップを確認、レース前半はカーブが多く最終の直線が長めのシンプルだが結構難しそうなコースを選んだようだ。スリーカウントが数えられてレースがスタートする。その瞬間アクセルを強く踏み出した自分。一方で獵哉はアクセルを踏み続けていたためにスリップした。

「なっ!? ……知っていたな! 志亮!」

「たまたまさ!」

その驚く顔が見たかっつと悪い顔をしながらアクセルを踏みしめる。加速の度合いでシートベルトが強く締められ、ハンドルを切つて車を曲げると、それに合わせて座席の位置が変わることで擬似的なGが身体を襲い。荒れた場所を進む時には下から強めの震動が伝わってくる。そんな所々の実際に運転していると感じさせてくれる仕掛けがかなり楽しく、しかし調子に乗りすぎたようで盛大にコースアウトした。

「しまった!」

「速度に尖つた車を選んだのにアクセルが強すぎたな、志亮!」

「くっ、まだまだ終わらんよ!」

車に乗って勝敗を決めるためにアクセルを踏みしめる行為は例えゲームであっても心を狂わせる。だって男の子だもん仕方が無い。というか獵哉は性能のバランスが良い車を選んだためか、それなりの



急なカーブでも無理なく曲がれている。君本当に初めてか？

「直線で追い抜く！」

「抜かせないっ！」

勝負は対戦モードのためかNPCが弱く遅く設定されており、自分と猟哉の一騎打ちとなっている。曲がるのが苦手なカーブが多い地帯で猟哉に追い抜かされれば、ゴール前の直線で自分が追い抜き返すを2周繰り返して、勝負は最終ラップへと移行する。

このまま展開が変わらなければ最後の直線で追い抜く自分の勝ちである。なので自分がするべき事はミスを最低限にして決して離されないこと。周回する毎に明らかに上手くなっている猟哉に必死に食らいつく、ふと隣を見れば、同じくこちらを見ていた猟哉と視線が合いふつと笑みを浮かべ合う。

「ゲ、ゲームとは思えない気迫ですね」「どっちもがんばれ」「姉さん気を抜かないでください……が、がんばれ」「どっちが勝つんだろうね」

「志亮様です」

《《猟哉坊ちやまです》》

「《んっ?》」

奈々子さんたちが何やら騒騒しくなってきたが、それを気にするだけの余裕は無い。激しくハンドルを動かしており、それに合わせて座席が動くために少しでも気を抜いてしまうとG(偽)によってミスしてしまいそうになるのだ。これ明らかに子供向けの調整では無いな！

最後のカーブを曲がれば残すは直線のみ、猟哉が先頭を走っているが距離はそう離れていない。カーブを曲がりきってすぐにアクセルを全開にすれば、ゴール直前には追い越すことができる！

「この距離！ 貫った!!」

「——いや、この勝負俺の勝ちだ！」

「なっ、ショートカットだとお!？」

猟哉は最後のカーブに入る前のコース端がジャンプ台に成っている、つまりショートカットルートに気づき実行したのだ。何度も言う

が獵哉はレースゲーム自体初めてである。なんという理解力、そしてなんという実行力。

「……悔しいが居るものだな。天才というものは。完敗だ」

とんでもない負け方をしたためか興奮が冷めずプロレーサー気分は続行。思わずお洒落っぽい負け台詞を言い放つてしまう。実際前世での経験があるから勝てるだろうと慢心していた故に悔しきは意外なほど大きい。獵哉を見てみると呆然としていたが、その表情には喜色が漏れていた。

「獵哉、楽しかったか？」

「……ああ、身体に伝わる振動。スピード感。偽物と分かっている……これが本で読んだことがある心に響くというものか、正にその通りだな」

獵哉はカーレースゲームが大層お気に召したようだ。アトラクションの好みから心のどこかでもしやと思つて居た所はあつたが、こゝも嵌まるとは想像を超えていた。もしかしたら人生で初めて誰かと競つて勝つたのかもしれない。だったら勝利の美酒に酔つたと言つても過言ではないのだろう。

「そうか。ところで獵哉」

「なんだ？」

「こういうのは三回勝負と相場が決まっている。さあ時間が惜しい早く次を始めよう」

まあなんにせよ負けたのは普通に悔しいので再戦を求めた。獵哉も予想通り一回の勝負だけでは物足りないようで、年相応にしてはまだまだ落ち着きがある態度であるが初めて見るような輝かしい表情でわかつたと領きスタートボタンを押した。

「——うーむ。強かつた」

結局あのあと十番勝負まで引き延ばしたが全敗。後半になると獵哉はコースや車のスペックを完璧に覚えたのか、もう手も足も出なくなった。何度もキノコや甲羅などのアイテムが欲しいと思つたが、所詮は無い物ねだりにしかならなかつたので、今度はアイテム有りきのレースゲームを探してリベンジしたい所だ。

座席が動き身体に負荷が掛かるゲームなので、朝から動き回っている事もあり流石に疲れたとNPCに選手交代。獵哉はソロプレイ中である。その傍には双子が両脇を固めており、自分は奈々子さんと一緒に近くのベンチにて休憩中である。

《……神詩志亮様。改めてメイド一同、勝手ながら感謝を送らせ頂きます》

「ふむ？ 感謝されるような事をした覚えはないのだが？」

《いいえ。わたくしたちメイド隊は神詩様に返しきれない恩がございます。……獵哉お坊ちやまについて、ほんの少しだけお時間を頂いてもよろしいでしょうか？》

「構わない」

メイド長が語り始めたのは自分と獵哉の関係についてだった。メイド長は元々和車の実家に仕える男衛<sup>メイド</sup>だったが、獵哉が『紅校』に通うときにメイド長へと抜擢されて、同じ空間での共同生活を余儀なくされた。それまでメイド隊の誰もが獵哉と面識が無いのにも関わらずにだ。

まったく見知らぬ多数の他人。それも異性。自分なら喜んで堪能するかもしれないが、獵哉は引越したばかりの時は脅えて部屋に出ないほどであったらしい。そんな獵哉を不憫に想いながらも歩みよれず、せめてストレスを与えないようにと、できるだけ視界に映らず音も立てず気配を殺して業務を熟していたのだが、家族の元を離れた獵哉は孤独で寂しそうにしていた。しかしメイドたちが傍に寄ろうにも怖がらせるだけだと悪循環に陥っていたらしい。

それを変えたのが自分だと言う。学校初日の帰り、メイド長はシンシとは何かと尋ねられたらしい……うむ、とりあえず黙って話を聞く。

《その時は満足できる答えを口にすることができず、坊ちやまを落ち込ませてしまいました。なので咄嗟に、そのシンシというものを仰ったご本人に意味を尋ねてみてはとお答えしたのです》

声を掛けてきたのはメイド長が助言していたからと知り驚く。話は続き、獵哉が自分に話しかけてきて到自を含めて友達となった日の

帰り。獵哉は初めて見るほど機嫌が良くて、ありがとうとメイド長に感謝したらしい。その日の事は生涯忘れられず日に三回以上は思い出してしまつて顔がにやけてしまうのだとか、うむ、後半は別に言わなくてよかつた気がする。あとメイドの数人が舌打ちした気がするのは気のせいか？

それから獵哉はメイドたちと話をするようになった。獵哉はまずメイドたちを労いはじめたそうだ。ごはんが美味しい、いつも洗濯してくれてありがとうと、なにより自分たちに女性であるのに獵哉は気さくに接してなおかつ優しくしてくれるようになり……話がそれなりに長くなつたので纏めると自分たちは生涯を尽くす主を見つけたとのことだ。奈々子さんが力強く首を頷いて同意しているのは、とりあえず反応しないでおこう。

これもすべて神詩様のおかげですとメイドたち全員から感謝の言葉を送られる。そう言ってくれるのは嬉しいが貰いすぎるのはどうにも気恥ずかしい。また、それを言うのならば自分だつてメイド長に感謝をしなければならなかつた。

「メイド長の助言のおかげで自分も得難い友人を得られた。こちらこそありがとう」

《——身に余る光榮。これからも獵哉坊ちやまをよろしくお願ひします》

獵哉の話を聞けて、心の底から遊園地に来て良かったと思えた。到自も楽しそうだし、そして自分ももの凄く楽しい。時間がもう少ししか残されていないことが酷く残念に思えた。『ワグルマランド』には夜の部もあるのだが、流石に危険過ぎるとのこと夕方には帰る予定だ。

「——っ!? 志亮様!」

最後にどうしても乗りたいものがあるのだが、折角だもう少しここで遊んでもいいかもしれないなど考えていると、突然、奈々子さんが自分を護るように前に立った。

「こちらアルファ! 異性による奇襲、数いち! 警戒態勢!」

通信機にて端的な指示を飛ばした奈々子さん。ここでようやく自

分は全速力で向かってくる女性に気付いた。ゲームの音で全く気がつかなかった。自分たちを襲いに来たのか!? 猟哉と到自は無事なのか!?

「私の後ろから決して離れないでください!」

焦る俺とは裏腹に奈々子さんは極めて冷静に銃と警棒を取り出して応戦の準備を整える。襲撃者が目の前まで迫る。武器を持っている様子はない。そういえば、男性を襲撃する女性の中には生涯に一度だけでもいいからと、突貫してキスをしてくるタイプが居るとニュースでやっていたのを見たことがある。

もしかしてその類いかと身構えると、襲撃者はそのまま止まることなく……膝を床に付けて所謂スライディング土下座の体勢で自分たちの前で止まった。

「……は?」

二人揃って真抜けた声が出る中、土下座をかました襲撃者(仮)は、がばりと身体を起こして半泣きで叫んだ。

「——お願いします! PV撮影に出演してください痛だだだだだだ!?!」

……とりあえず不審者と言うことで、奈々子さんは女性の関節を極めた。全員が集まってくる。何事だと聞かれたのだが、どうやら新しいイベントみたいだと、なんとも言えない苦笑を返すことしかできなかった。

## 遊園地で遊ぼう 4

国内有数の巨大テーマパークであるワグルマランドは、客数を増やすために定期的に広告を出しており、テレビでCMを何度も見かけたことがある。しかしながら老舗故の思考か、それとも付き合いか、ワグルマランドはインターネット広告分野において遅れをとってしまっただ。

地球でもそうだったが若者の情報受信元はテレビよりもインターネット。最も有名ゆえに口コミだけでも多大な集客率を誇るだろうが、それで胡坐をかかないのは流石は国が誇る遊園地か、遅れてしまったものの参入しない理由はないと、ネット広告用のPV撮影を行なう事となっただけ。

そして、現実から遠ざかり夢のような時間を与える事を生業とする遊園地ゆえか、企画した広告の内容が、この世界にとっては正に夢のような内容だった。

ありきたりと言ったらそれまでだが、なんと女性がひとりでワグルマランドに遊びに来たら、本当に偶然、男性と出会えたという、この世界で言えばあまりにも非現実的。夢そのものと言っても過言ではないようなシチュエーション。それが此度のPVの中身とのこと。

ワグルマランド及びPV・MVを専門とした広告代理店の関係者たちは頑張った。大手企業の予算があつてこそそのなせる技とはいえ、それに甘えず彼女たちは懸命に頑張った。何故なら彼女たちにとって、このPVは喉から手が出るほど欲しかった夢の産物なのだから。直接的な宣伝行為に男性を使用することは法律やら何やらで厳しく規制されている中、たったひとつのPV、たった一度の撮影のために専門の弁護士先生を雇って、何度も何度も市役所などの公共機関に通い何十にも及ぶ手続きのサインを書いて撮影する権利を勝ち取った。

ならば今度は実物だと、貴重な男性芸能人のスケジュールを、会社の財力と権力と繋がり人間と人間の尊厳をコストに一日だけ獲得することができた。この時、ワグルマランド側、広告代理店側両方ともかな

り盛り上がったらしい。

彼女たちは調子に乗った。CGでは味気ないと、実際にワグルマランドを貸切にして撮影しようとした。しかし、彼女たちよりも偉い立場の人たちから、ふざけるなときつめのお叱りを受けて、撮影を理由に貸し切りはできないと断られた。

一度は冷静になった彼女たちであるが、芸能事務所側から貸し切りであるならば現地でも構わないと許可が出て再燃。そして和車家の男子が遊ぶために貸し切りになる日、つまりは今日の事を知った彼女たちは、ほんの少し撮影のためにお邪魔できないかと、上の人にしつこくギリギリまで交渉を行ない。相手側……まあ、自分たちにバレないように撮影する事を条件に見事許可を勝ち取った。なお、こちら側には一切話が入っていない。完全な無許可である。

まあ、許可取得に関しては、奈々子さんメイド隊、関係者一同の大人たちが対応するだろうということで一旦置いておくとして、彼女たち広告代理店は場所も人も機材も最高のものを揃えて現地入りした。しかし、ここで致命的なトラブルが発生する。自分たちにも影響を及ぼした猟哉に対する義兄たちからの嫌がらせ。そう貸切だったはずのワグルマランドの通常営業である。

これによって男性側の事務所がドタキャン。ただし、これに関しては強引なねじ込みが原因なので、身の安全を考えれば芸能事務所側が断るのは至極当然の判断だろう。

ーそして現在。ドタキャンを受けた広告代理店側が追い詰められた。

どれぐらい追い詰められたかというと、監督兼社長の女性が、それなら貸切の理由となった本人たちに代役を頼もうと、とんでもない事を言い出して誰も止めなかったぐらい。そんなわけで現在。PV監督兼広告代理店社長は、俺らに男性役の代役として出て欲しいとダイレクト土下座を行なったと不審者は語った。

「申し遅れました。私あいたたた！ 名刺渡すだけ！ 名刺渡すだけなので!! ……改めまして、まほじんと申します」

奈々子さんによって取り押さえられながらも、商魂逞しいと評すれ

ばいいのか、名刺を自分に渡してくる不審者改まほじん社長。会社名は『まほー？さくくる』と言うらしく、まほじんと言う名前の横に代表取締役と書いており、彼女がこの会社の一番偉い立場の人間であることは間違いないらしい。

「……芸名の類か？」

「はい。個人で活動していた時のをそのまま使ってます」

よろしければ本名用の名刺もありますがと言うが、別に必要性もないので、問題ないと伝え、名乗られたならば一応名乗り返すのが筋かと思ひ、姿勢を正して声を整える。

「——神詩志亮と言う。気軽に名前でもらっても構わない。よろしく頼む」

紳士さを意識した微笑みを送ると、まほじん社長は色で例えるならば赤、黄、青の順で表情を変え、擬音で言えばファー！ からアツ！ でサー……だろうか？ やはり宣伝に関わる職業の人だ。リアクションがとても分かりやすい。

「——あなたはいったい？」

待ち望んでいたと言えば仰々しいが、さすがは創作に関わる人間だ。そんなアニメらしい言い回しで問いかけられたら、紳士として反射的に着飾った言葉を言いたくなるものだ。紳士が関係しているかは知らん。

「神詩志亮だ。紳士を目指している男子。今はそれ以上でもそれ以下でもない」

「……シ」

「っ。」

「シンシというものが何かは分かりませんが、あなたのような男性は初めて見ました!! んんん！ やばい！ すごい!! あなただけのPVを作って世間に知らしめてえ！」

料理人に押さえられているまな板の鯉のように、興奮して跳ね出すまほじん社長。それを完璧に拘束する奈々子さん、どちらもプロだな。

「神詩志亮さん！ 代役とは言わず是非とも主役として、私の作品に



出てください！ お礼からなにまで何でもお支払いしますから!!」  
「…………ふむ」

悩む。まほじん社長のド派手なお誘いには驚いたが、降って湧いた役者活動に大変興味がある。別に芸能界自体には、まだ興味らしい感情はないが、単純に何かしらの作品に出演するということ考えると中々わくわくする……と悩む素振りを見せて勿体ぶってしまったが、困った女性を放っておくのは紳士を目指すものとして許されざる行為だろう。彼女が自分の目の前で土下座を行なった時点で、既に心は決まっていた。

奈々子さんを見つめる。困らせてしまうことに申し訳ないと思うが、自分はどうしようもない人間である。しばらく目で訴えると仕方ないですねと苦笑を返してくれた。やはり彼女には何かしら礼をしなければなるまい。

「…………ちよつと、こちらに来てください」

「警察に突き出すのはいいですけど、是非とも神詩氏に出演の許可をもぎ取ってからでないと囚人になってもなりきれません！」

「それなら話が早いですね。後はこちらで対処しますので、ゆっくりと事情聴取を受けてください」

「…………え？ あれ？」

——大人たちが話あっている最中。自分は到自と猟哉に確認をとる。ちゃんと話してはいなかったが、PV撮影に出演するのは自分だけであり、二人にはその間待っていて貰う必要がある。勝手に決めたことを謝罪しながら、確認をとると猟哉は自分の所為だという申し訳なきから、到自は持ち前の気前の良さから了承してくれた。

「猟哉。此度の件は彼女たちの自業自得と呼ぶべきものであることは間違いない。あまり気にするな」

「だが、俺に対する義兄からの嫌がらせが発端であるのは確かだ。和車家の事情たちに巻き込んでしまった。出来れば謝りたいが……」

環境がそうさせるのか。生まれつきの性格なのか、ひとりて抱えこみやすいらしい猟哉は、まほじん社長たち『まほー？さくくる』に所属する社員一同のことを気にしてしまっているようだった。

「よくわかねえけど、悪いのは猟哉の義兄貴たちだろ？　　猟哉がなん  
で謝るんだ？」

「到自の言うとおりで。それに悪い考えなのは承知だが、自分はこう  
なったのを幸運だと思っている」

自分がこの状況をポジティブに考えていることを示せば気持ち  
が増しになるかと、到自らしい単純明快な正論に乗っかる形で本音を  
暴露する。

「幸運？」

「——テレビっ子でな、CMに出るのは昔からの夢だったんだ」

といっても、今回はネットPVではあるが映像を流して何かを宣伝  
するためのものという観点では同じ物だ。一緒くたにしてもそうは  
問題多分無いだろう。そんな風に三人で話していると、奈々子さんた  
ちが帰ってきた。行きと明らかに違うのは、まほじん社長が自由の身  
になっているところである。

「外の準備ができ次第、現場へと向かいますがよろしいでしょうか？」  
「自分は構わないが、準備とはなんだ？」

話し合いの要点を纏めると自分が代役を行なうにあたって、奈々子  
さんは自分の利になることを幾つか条件に持ちかけたらしい。細か  
な所は聞かなかつたが、最優先となるのは身の安全の保証ということ  
で、スポーツ施設の外を囲っている女性たち、というか本日ワグルマ  
ランドに来場している客の対処を、『まほー？さくくる』に任せること  
にしたという。

どうやら、撮影の際に念のためにと警備員と男衛を雇っていたらし  
く、彼女たちに他のお客の整理を担当してもらえるところのこと。

また、撮影が終わった後も引き続き自分たちに蔓延る……遠巻きに  
見ている客が近づかないように見張ってくれるように交渉し同意。  
警備員も男衛も違う会社の人たちなのではあるが、元からどちらも男  
性役者のために用意された人員なので、結果論になるが契約内容自体  
に間違いはなく、話はスムーズに進んだとのこと、それならお言葉  
に甘えよう。

「あの……大丈夫なんですか？」

「志亮様が望むなら、私は望みどおりにするだけです。それにこちらにとつても、むしろ僥倖な展開です。やはり四人ではどうしても限界でしたし、彼女の会社が雇った警備員や同僚の力が借りられれば安全は強固になります」

「いえ、それも大事ですが……その……志亮様つて電波に流していい存在なんですか?」

「志亮様が望むなら、私は望み通りするだけです」

「まあ、顔の上半分は隠すみたいだし、大丈夫なんかじゃないかな?

……ごめん、普通にヤバイと思う」

自分が電波に流れることに対して、不安そうにする奈々子さんたち。その反対にまほじん社長はなにやら興奮した様子で電話している。会話の内容から正気を疑われているようだ。それはそうだ。なにせ自分のことを創作でもそうはいないほどの、常軌を逸した存在として語るのだ。

そもそも、通常営業している遊園地に男性がいたという情報自体が、あちらにとつてはかなり眉唾ものだったらしく、まほじん社長が追い詰められるあまり幻覚を患ったと思われるらしい。絶対に居ると言う社長と、嘘だという部下一同。ムキになったのか、それとも経営者としての深い知恵か気がつけば自分の存在の有無で賭け事が発生していた。

「言ったなあてめえら! だったら言葉どおり本当にいたら、冬の即売会に興味で出している同人PVてめえら総出で手伝って貰うからな!」

——まあ、そのくらいなら可愛い物かと、その時の自分は無知故に気軽に考えていた。少し未来の話すれば『まほー? さくくる』一同は地獄を見ることになる。

さて、そんなこんなでスポーツ施設を出た後、まほじん社長に連れられて撮影場所である、遊園地の中央最奥、ワグルマランドの象徴というべき城の中へと移動した。

ただのセットと言えばそれまでだが、お伽噺の舞台に入り込んだような絢爛豪華な城内。遊園地で男性と出会うというのは、現実味から

遠ざかりまくっているから、それならいつそ異世界感を強調しようと言ふことで、城を選んだらしい。因みにデートでも待ち合わせもでもなく、出会い止まりというところでこの世界の男女の関係性が垣間見れる。

「……………汚いって罵倒されながらモツプでゴシゴシされる隅の苔になりたい」

そんな城内にて、自分でも知っているほどのテレビで見たことのある大人気アイドルがとってもネガティブな事を口にして膝を抱えていた。

———どうやら、世界が変わってもアイドルとは大変な職業であることは変わらないらしい。

## 遊園地でPVを撮影しよう

撮影のために移動したワグルマ・キャッスル。矢地さんがもうちよつといい名前なかつたんでしようかとぼやくほど、この世界の住人からも少々センスに関して疑問視がなされているこの遊園地の看板城。

アトラクションもなければ遊べる場所はないが、ファンタジーアニメの王族などが本当に住んでいそうなほど外装、内装がかなり凝っている。警備員がお客たちを割って築いてくれた道を進み、城内に入ると、まず初めに赤い絨毯が歓迎してくれたことに、密かに感動を覚えた。

いつもなら1日何万人は歩き土で汚れているであろうが、今日は撮影で貸切になった影響か目立った汚れはなく、高級感と相まって踏み締めるたびに湧き出る罪悪感が妙に心地いい。外面はいつもの調子を保っているとは思うが、城の雰囲気は呑まれていなかったらタツプダンスでも披露していたかもしれない。

そんな自分の後ろを歩く猟哉にふと目を向けると、家が世界有数の富豪とあつてか当然の如く落ち着いた歩みを見せており、とても落ち着くことができた。一方で到自は少し心地悪そうにしているが、どちらかといえば忙しく動く撮影スタッフたちが理由らしい。

「に、似合う……！　なんか理由らしい理由は浮かびませんが志亮様たち城内がすごく似合います！」

「負担が減ったとはいえ気を抜かないでください」

「ああ、こうしてみると三人ともすごくいい！　切羽詰まって最初に目が入った志亮さんだけしかほとんど見えていかせんでしたが……や、やべえ全員が全員違う魅力マックスじゃねえか！　ぜ、全員違うバージョンとりてえ！」

「ダメですよ」

撮影で登場する男性は元からひとりだけの予定であり、一応意思を確認したところ猟哉は家庭の事情から、到自は本人があまり興味がないことから辞退した。それに付け加えて未成年の撮影には親の許可

が必要なのでなのでまほじん社長が望もうが望むまいが二人は撮影に出ることはない。

ちなみに自分は母に連絡済みである。反応は想像通りであったが声量が想像以上で、実は未だに耳鳴りが治らない。そのあと許可は出たが絶対DVD買うからねと興奮気味に言われたと思いきやそのまま電話が切れた。母よ、自分が出演するのはネットのPV動画なのでDVDは多分出ない。

「……あれ？ おかしいなヘッドギアが外れないぞ？」

「いつのまに私も目はCG機能が搭載されたのかな？」

「やっぱり現実って……え？ 現実?! ……最高！」

城内に入ると、そこには「まほー・さくくる』のスタッフ及び撮影の関係者と思われる人々が居た。反応自体は他の女性と同じであったが、さすがは映像に関わる仕事をしているのか、内容がそれっぽい。「よっしゃ！ 優秀なスタッフゲット！」

そんなスタッフたちの反応を見ながらガッツポーズを掲げるのは、まほじん社長。自分の存在の有無で部下たちと賭けをしたらしく、その内容が冬のイベントのための個人制作物の手伝いをする事だった。結果はまほじん社長の完勝。それはそうだ。

自分は確かに個として存在しているため、出来レース甚しいのだが、案外売り言葉に買い言葉のあのやりとりも己の利を得るための態度だったのかと考えると、彼女確かに会社のトップに立つ立つ存在なのだろうと関心する。

「ぶぎやー！ 自分の上司のことは信じないから負けるんですー！」

勝つたら紹介してあげる約束だったのに残念だったねえ!!」

「聞いていませんか？」

「いえその、挨拶の時にちよつと前に出てもらうとか、そんなぐらいですので決して、職権濫用では決して——」

ただまあ、奈々子さんに笑顔で凄まれて身を小さくする姿を見る限り、色々と自分の気のせいではないのかと疑う。

そんなこんなで撮影場所であるワグルマランドを見渡せる正面バルコニーがある中央塔へと到着。外から見た時は細く見えたが、中は

十数人の大人たちと、カメラをはじめとした撮影機材を入れてもまだまだ余裕があり、撮影が始まるまで待機することになった。

……気がつけば自分たち三人の椅子が用意され、テーブルごと高そうなお菓子や飲み物が持ち運ばれるなど撮影側の女性たちから歓待を受ける。みんなで礼を述べれば歓喜極まり惚けた表情を見せるが、まほじん社長に仕事に戻れとお叱りを受けて、すぐに仕事に戻った。すごい、これがプロの動きか、多分違うとは思うが。

「……奈々子、ちよつと話があるんだけどいいかしら？」

「依頼主の個人情報を探るのは男衛として御法度ですよ」

「……ちよつとだけ」

「黙秘します」

どうやら、『まほー？さくくる』側が雇った男衛は奈々子さんが所属する会社のアカスズメ。つまり奈々子さんとは同僚だったらしく、なにやら話しかけられている。しかし、見た感じベテランな先輩なようだが、奈々子さんに対して腰が低い。謙虚な人なのだろう。そういうことにしておこう。

「楽しそうだね？ 志亮」

「うむ、テレビっ子だからな。ネットPVの撮影だから厳密には違いかもしれんが、こうやってテレビの裏側みたいな現場を見られるだけでも中々楽しくてな」

流星は映像制作を生業としているプロと言うべきか、撮影の準備は目に見えて進行している。これならあと十分以内には撮影は問題無く行なわれるだろう。

「……汚いって罵倒されながらモップでゴシゴシされる隅の苔になりたい」

……もつとも撮影が始まる前に解決しなければならぬ事情があり、覚悟を決めてそちらを目を向ける。そこには撮影機材に身を隠すように膝を曲げて座り、何やら暗い空気を漂わせている見覚えがある女性がいた。

濃い青染めショートヘア。スレンダー、言い換えれば中性的な見た目をしており、その女性は自分の記憶に間違いがなければ彼女こ

そ、今年度もつとも男装が似合うと業界から太鼓判を押されたトップアイドルのはずだ。

「……猟哉、到自。聞きたいのだが、あそこに居るのは、現トップアイドルのカオルさんで間違い無いと思うか？」

「済まない、テレビはあまり見ないからアイドルのことは分からないんだ」

「アイドル？」

猟哉はアイドルこそどういった存在か知っているが、彼女のことは知らず。到自に至ってはアイドルそのものがなんであるか分かっていないらしい。まあ自分たちは小学一年生。アイドルの事を知らないのも無理はないだろう。

「ふふつ。ボクの人生。どーしてこんなばっかりなんだろう。ただアイドルの夢を追っていただけなのに、気がつけばこんなことに……ああ、だめだー。もう人生お終いだー」

——間違いない、呪詛を吐きながら何かしら己の人生というものに嘆いている彼女こそ。テレビで見ること百は超えるだろう。紅月国で競い合うアイドルたちの現トップに君臨する大人気アイドルのカオルさん。そんな、輝く時の人が、人目を隠れるように見て明らかに落ち込んでいる。

この世界のアイドルは、やはり大半が女性というだけあって男装少女あるいは男の娘と呼ぶべき人たちが台頭している。異性による魅力がやはり最大の売りなのか、紅月系アイドルに求められるのは如何に男性的であるか。その一点においてカオルさんは正に天才アイドルだった。

事実、テレビで最初に彼女を見た時、司会者がお決まりの性別に関する話題を振るうまでの数十分、この世界にも男性アイドルが居るのかと誤認したぐらいだ。もつともよく見れば仄かに女性らしさがちやんとあつて自分は結構好きなのだが……もとい、そんな彼女は年代を問わず同性たちに大人気。

幾多の賞を獲得して、歌う曲は連続してミリオンヒット。まさに雲の上の存在である彼女が、今にも地面に溶けそうな様子で目の前に居



ることに、流石に動揺を隠しきれない。

「まほじん社長……彼女はあのアイドルのカオルさんで間違い無いかな？」

「そうです。彼女があの子のアイドルのカオルです。PVの神詩さんの相手役として来ていただきました」

まほじん社長に確認取れば本人であることが確定する。トップアイドルの相手として出るのもそうだが、どうして女性俳優ではなくアイドルが選ばれたのか疑問に思っていると、顔に出ていたのかまほじん社長が説明してくれた。

今回のPVはワグルマランドに遊びに来た女性が、男性と運命的な出会いを果たすといった内容だ。そんな内容だからこそ、創作でありながらも相手役となった女性キャストに対する「嫉妬」は絶大なものになるだろう、それはキャストだけではなく関わった関係者全員を巻き込み炎上に発展する可能性があり、それを抑えるに当たって、男性的な面を強く出して芸能活動をしているアイドルを起用、実は男役としてもドラマに出たことがあるカオルさんが選ばれたとのことだ。「カオルさんが女優並みの演技力があること、以前からお付き合いがあつて仕事に対して真摯で真面目な方だと知っているからこそ、今回の大任に選んだんです——男装女性と男性が絡む絵が撮りたかつたと言われれば否定しませんけど」

「おい」

「だってえ。男性が入ったPVなんて、これから二度と撮れるかわからないんだもあいだだだだだだ！」

「志亮様に変態的な動きで近づかないでください」

どうも、初対面の時からはっちゃけた影響か、気を抜くとタガが外れた態度で接してくるまほじん社長。自分的には気さくで面白いからいいのだが、欲望を周囲に醸し出すくねくね音頭は世間的にはアウトだったらしく、奈々子さんに取り押さえられる。

——部下から、社長を警察に引き渡すのは撮影が終わってからにしてくださいと言うお願いに、自分は気にしてないと告げる。ただ奈々子さん的には2アウトらしく、次怪しい動きしたらマジで突き出して

やると呟いていた。うむ、こればかりは、さもありません。

「こほん。それでどうして彼女は……あんな風なのだ？」

言葉に迷って、変な言い回しをしてしまったがまほじん社長には伝わったらしく、困った顔をしながらも説明してくれる。

「いつもの事ではあるんです。ただ今回は重圧やらドタキャンのショックなどでさらに落ち込んでいるみたいで、隠れているとは言え人前で」

テレビで見るカオルさんはシニカルな笑みを浮かべながら、甘い言葉をファン達に贈り、どんな先輩や重鎮相手でも決してキャラをブレさせない仕事人にして自信家である。しかしカメラの外での彼女はメンタル方面で若干の問題があるらしく、自信は欠片も無くて、落ち込み癖があり、常にじめじめとしているとの事。

ただ、今回はいつも以上で、男優にドタキャンされた事がかなり効いたらしい。

「ワグルマランドは日本最大の遊園地。さらに男優が出演するPV。事務所や業界など様々な方面で期待されていましたから、それが中止となれば経歴にも心にもどうしても……ね。相手役の男優に断られたのも女性としてショックだったと思いますし」

今回の撮影は自分が想像している以上に、周囲に影響があるみたいで、現にカオルさんのマネージャーが撮影中止から、自分を代役に撮影が再開されたのを関係各所に伝える電話対応から帰ってこないとのこと、あの人が帰ってこない限りカオルさんはこのままで準備が出来ても撮影に移れないかもですねと、まほじん社長が言う。どうやらアイドルマネージャーは、メンタルケアも兼任しているみたいだ。

そう言っている内に、撮影準備は終わってしまい。マネージャーではないがアイドル事務所側の関係者たちがカオルさんに声を掛ける。だが落ち込みすぎて外部の音を遮断してしまっているのか、なにも反応を示さない。その様子に焦り出すまほじん社長。どうしてかと思えば。こちらをちらりと見る視線と合ったことで、その理由が自分であることを思い至る。

——自分が撮影に参加するに当たって、奈々子さんが提示し、自分

もそれはそうだと納得した撮影に参加できるのは夕方までという条件。正確な時間は分からないが、最長でもあと二時間ほどが限界だろう。素人である自分、男性の撮影となれば、トラブルも出てくるだろうし、時間は幾ら合っても足りないはずだ。

「……ふむ、まほじん社長に聞くのは違いかもしれないが、カオルさんに声を掛けてもいいだろうか？」

相手が大人気アイドルとあって、異性の自分がおいそれと話しかけるべきかと地球でのアイドル事情を思い出して、念のためにとまほじん社長に断わりを入れる……なんだか、もの凄く驚いた顔で奈々子さんが見てくるが緊急事態だ、見ない振りをしよう。

こほん……といつても同じ業界で働いているだけで、カオルさんは違う会社に属する人間。まほじん社長に許可を出せる権限は無いのは重々承知だったのだが、なんとマネージャーが昔ながらの仲らしく、自分の判断なら問題ないとの事で、許可を出してくれた。

「彼女もプロですから、相方である志亮さんが声を掛けてくれたら、きつとスイッチ入るかもですしね……押しではいけないのも押しちゃうかもですが……面白いゲフンゲフン！ このままだと撮影を始められないので是非とも挨拶してやってください」

……そう言う、まほじん社長は、わくわくしている気持ちを隠し切れずに自前であろうカメラを取り出した……思惑はどうあれ、このまま撮影できなくて時間が過ぎてしまうのは自分とて本位ではなく、それになにより、落ち込んでいる女性を放っておくというのは、紳士を目指している身としてできるはずがない。

……しかしながら、テレビで見ていた大人気アイドルに話しかけるとなると、少しばかり緊張する。なんだか普通にお疲れ様ですなんて声を掛けるのは烏澁がましいさえ気がしてきた。本来であれば雲の上の存在であるお人なのだ。多少は気取った態度で接したほうがいいだろう。

——恥ずかしい話、芸能人に対する緊張やら嬉しさやらで浮かれていた事に気付かなかつたらしい。カメラを向けられていたことも理由に入るのかもしれない。後になってこの時の自分の行動を振り

返って思う……：我ながら、なぜ反省をしないのかと。

「——え？」

まずは自分の顔を見てもらいたいと、俯いている顔を挙げるために顎に手をやり引く。いわゆる顎くいつてやつだ。なぜやったのか自分に聞かれても、こつちを見て欲しいと思つてノリと勢いでやったとしか答えられない。

小学一年生、ジェットコースターにも乗れぬ低身長である自分と、膝を丸めて座るカオルさんとは丁度視線が重なる背丈だったらしい。自分を認識して見開く瞳の視線が真つ直重なる。後ろにいた奈々子さんはこの時点で目の明かりを消したらしい。

「——初めましてだカオルさん。本日代役として出演することになった神詩志亮というしがない男だ。トップに輝く貴女に比べれば六等星の身でしかないかもしれないがパートナーとして誠心誠意努めた」

やはり傍で見たカオルさんは、トップアイドルに相応しい綺麗な顔をしていた。男である自分が憧れるほどの美貌でありながら、ギャツプと言うべきか、僅かに残る女性らしい綺麗さに酔いそうだ。

いや、実際に酔つたみたいで調子に乗つた自分は、己の小さな体を前に出して、鼻同士が触れてしまいそうなほど顔を近づけた。

「——ワグルマランドに来れば運命的な出会いがある——本当にその通りだったみたいだな……貴女と出会えて良かった」

PVの内容を掛けながら、カオルさんの中性的な声に合わせるように低めの声で囁いた。

++++

結果的に、カオルさんは調子を取り戻した。

「……カオルさん。大丈夫ですか？」

「ああ、なにも問題無いぜ。ハニー。むしろ背中に羽が生えてしまったほど体が軽いんだ。今なら空を飛んで紅月山にも上れてしまいうだよー！」

「絶対に止めてくださいー！」

ただまあ、みんなが言うにはアレは調子を戻したといよりも、正気

を失ったというものらしい……撮影側のスタッフが、どうも自分のことを化け物を見る目で見ている気がする………さもありません。

——ともあれ、ついに撮影が始まる。どうなるかは分からないが、トップアイドルの相手役として恥無きように努めよう。

「……………あ」

カメラを確認して居た、まほじん社長が素っ頓狂の声を出す。それにつき撮影スタッフたちがざわめき出す。

「む？ どうした？」

「あー。いやー。失念していたというか……みんなして今気付いたといますか……志亮さんとカオルさんの身長差が開きまくってどうしようとなっていて気がつきました、あはは………」

……どうやら、撮影が始まってすんなりとは行かないらしい。